

中央高速自動車道西の宮線建設に伴なう

昭和46年度 発掘調査報告書

沢中原遺跡・寺門遺跡

山梨県教育委員会
山梨県遺跡調査団

1972・3

中央高速自動車道西の宮線建設に伴う

昭和46年度 発掘調査報告書

沢中原遺跡・寺門遺跡

序 文

近年、埋蔵文化財は、各種の大規模な開発事業によって、これまで知られなかった明日香村の高松塚古墳のように学術上貴重な発見や、重要だと言われてきた遺跡が破壊され、全国的にその保護保存上の問題を提起しております。

本県においても急激な開発の波が打し寄せ、中央道を皮切りに大規模農道、勝沼バイパス等の道路建設及び道路改修事業、都市計画による宅地造成、畑地帯総合改良等の農業改善事業が計画され、多くの遺跡が破壊の危機に瀕しております。

文化財は一度破壊されると復元が困難で、特に埋蔵文化財は不可能であります。土中に残された私達祖先の足跡は、個々人の性格が異なると同様に遺跡相互の性格も異なっていますから、それぞれ優劣つけがたい重要性をもっています。これを保護するには土地の現状維持が最良の方法ですが、やむを得ない開発には事前の緊急発掘調査を行ない遺跡の記録を保存しております。

この報告書は中央自動車道（大月～勝沼間）を昭和44年8月遺跡の分布調査によって発見された遺跡の発掘調査について県教育委員会が、日本道路公団の委託を受け、昭和46年10月～12月にかけて、山梨県遺跡調査団が建設予定地に含まれる、沢中原遺跡、寺門遺跡の発掘調査の結果の報告であります。

この報告により、大月市周辺における埋蔵文化財解明の参考となれば幸いです。

なお、直接調査にあられた調査員各位をはじめ大月市文化財関係者及び地元の方々にご協力いただき厚くお礼申し上げます。

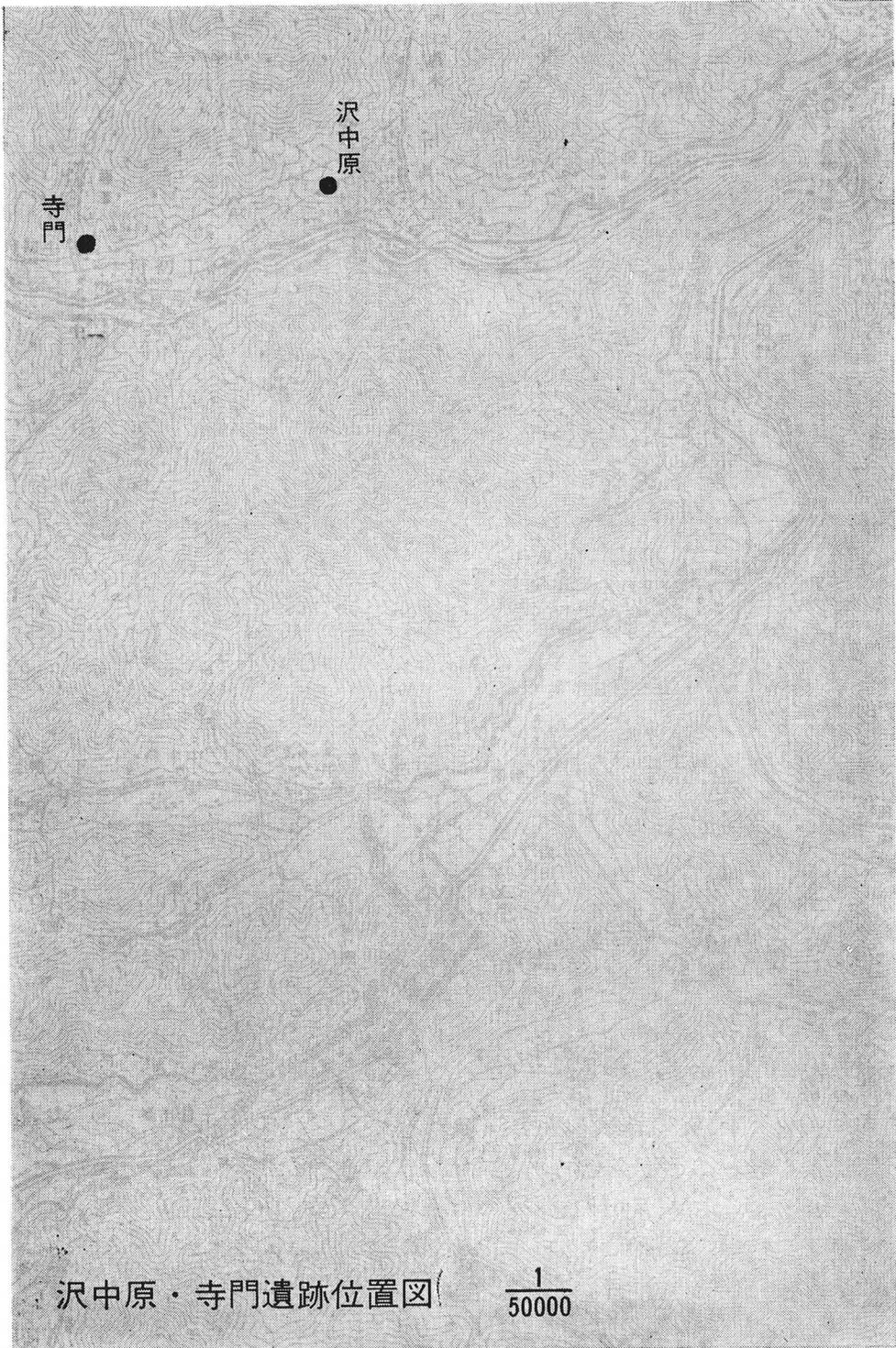
昭和 47 年 3 月 31 日

山 梨 県 教 育 委 員 会

教 育 長 清 水 林 邑

例 言

1. 本書は中央高速自動車道西の宮線内に占地する沢中原，寺門両遺跡の発掘調査の報告書である。
1. 山梨県遺跡調査団幹事会の指名で谷口一夫，飯島進両幹事が調査を担当し，立正大学大学院学生，立正大学学生，都留文科大学学生，山梨考古学研究会々員，山梨県遺跡調査団調査員等に応援を求め行なったものである。
1. 本書は飯島進，谷口一夫，小林広和，菊島美夫が分担執筆した。
1. 遺物の整理，図版作成は小林広和，菊島美夫，山本正則，谷口一夫が行なった。
1. 第三章第二節の沢中原，寺門両遺跡の地質については，その重鉱物組成分析を甲府盆地第4紀グループの藤本丑雄氏にお願いした。時間的な都合で本書に間に合わなかったが，後日追加補足するものである。
1. その他多数の方々から厚いご指導と援助を得たことを記し，あわせて深い謝意を表する次第である。



沢中原・寺門遺跡位置図

$\frac{1}{50000}$

目 次

第一章 概 説	1
第一節 中央道大月 勝沼間 路線内に於ける遺跡の概況	1
第二節 発掘調査への 動機と 経過	3
第三節 発掘調査団の構成（調査組織）	5
第二章 位置と 地形	6
第一節 沢中原，寺門両遺跡の 地理的 環境	6
第二節 沢中原，寺門両遺跡の 地質について	7
第三節 沢中原，寺門 両遺跡の 層位	8
第三章 沢中原 遺跡発掘調査 報告	9
第一節 沢中原 遺跡発掘の 経過	18
第二節 沢中原 遺跡出土の 土器	18
第三節 沢中原 遺跡出土の 石器	30
第四節 沢中原 遺跡の 考察	32
第五節 沢中原（向原）遺跡出土の石器	36
第四章 寺門遺跡 発掘調査 報告	37
第一節 寺門遺跡 発掘の 経過	37
第二節 寺門 遺跡 出土の土器	47
第三節 寺門遺跡 出土の 石器	49
第四節 寺門 遺跡の 考察	54
第五章 ま と め	56
第一節 問題点と 今後の 課題	56

挿 図 目 次

沢中原, 寺門 遺跡 位置図	巻頭
沢中原遺跡 付近の 地形図	巻頭
寺門 遺跡付近の 地形図	巻頭
沢中原 遺跡発掘 地点全景	巻頭
第1図 沢中原 遺跡 地形図	10
第2図 沢中原 遺跡向原 地形図	11
第3図 沢中原 遺跡グリッド図	13
第4図 沢中原遺跡土層図 (A-B)	15
第5図 沢中原遺跡土層図 (C-D)	15
第6図 土器・石器 出土平面図 及び側面図	17
第7図 土器拓影図 1	19
第8図 沢中原・押型 文土器 復原図	20
第9図 施文原体の a, b	21
第10図 土器拓影図 2	22
第11図 土器拓影図 3	24
第12図 土器拓影図 4	25
第13図 土器拓影図 5	27
第14図 土器拓影図 6	28
第15図 土器拓影図 7	29
第16図 石器 実測図	29
第17図 石器 実測図	31
第18図 沢中原遺跡(向原) 出土石器	36
第19図 寺門 遺跡 地形図	38
第20図 寺門 遺跡グリッド図	39
第21図 寺門 遺跡 土層図	41
第22図 寺門 古墳 断面図	43
第23図 土器 拓影図	48
第24図 石 鏃 実測図	50
第25図 出土 石器 実測図	51

図 版 目 次

卷末図版	沢中原遺跡発掘地点全景	卷末
第1図版	沢中原遺跡土層図	〃
第2図版	沢中原遺跡出土状況	〃
第3図版	〃	〃
第4図版	〃	〃
第5図版	〃	〃
第6図版	沢中原遺跡出土遺物	〃
第7図版	〃	〃
第8図版	〃	〃
第9図版	〃	〃
第10図版	〃	〃
第11図版	〃	〃
第12図版	沢中原(向原)遺跡出土遺物	〃
第13図版	寺門遺跡	〃
第14図版	寺門遺跡出土遺物	〃
第15図版	〃	〃
第16図版	〃	〃
第17図版	〃	〃
第18図版	〃	〃

第一章 概 説

第一節 中央自動車道大月～勝沼間路線内における遺跡の概況

この地区に於ける中央道用地内に所在する遺跡の調査は 去る昭和44年8月、まず分布調査が行なわれた。当時は 路線のごく概略の位置が示されたにすぎなかったので、周辺一帯について調査を行ったのであり、大月地区を山本寿々雄、大和地区を谷口一夫、飯島進、勝沼地区を野沢昌康、上野晴朗、森和敏がそれぞれ担当した。その結果 報告された遺跡数は大月地区41、大和地区4、勝沼地区24、計69に達した。昭和38年 県が作成した埋蔵文化財包蔵地台帳によればこの地域内にある遺跡は14であるから、実に55の遺跡が新たに発見されたことになる。

これら諸遺跡の内笹子峠以東、すなわち 大月地区のものについて概観するに、そのほとんど全てが甲州街道添い、つまり笹子川及び これに北方より流入する。藤沢川、真木川等の沿岸に存在する。この地域は山岳地帯で、北方は 滝子山姥子山小金沢山等の山岳重畳し、丹波山村地方と約20軒を距て、西方は 達沢山笹子峠源次郎岳が郡内地方と国中とを分かち、南方は鶴ヶ鳥屋山三つ峠山が立塞がり、わずかに東方のみが開けている。笹子川は これの中間を笹子峠より東に流れているのであって、比較的寒冷地である。笹子川の北岸は 河岸段丘が発達していて遺跡は主として その上に所存しているのであって、沢中原、寺門両遺跡も又その例外ではない。尚この地域内に小規模の横穴古墳3基が報告されている。

この地域の遺跡に関する文化伝達経路を考えるに、1は 笹子峠をこえての甲府盆地方面、2は 甲州街道添いを中心とする西関東方面、3は大幡地区、富士山東麓を径ての東海方面、4は 葛野川流域を利用する等 北方小菅丹波山地区を径ての北関東方面等が考えられるのであるが、これら文化伝達経路に関する解明の手掛かりが少しでも得られるかどうか等も 本調査に課せられた問題点の一であろう。沢中原遺跡から発見された遺物の中に、明らかに 関西方面にみられる特異な文様の影響が看取されること等は、その目的の一部に叶うものといえることができる。

発掘調査に際して最も関心をもつものの一に土層がある。いわゆる関東ロームは 富士火山灰によるものとされているが、その上位層である 立川ロームの西限は何処であろうか、甲府盆地に於てはそれが見られないし、昭和41年発掘の大月市宮谷遺跡に於ては 明らかにそれが見られたとすれば 富士山北東部に於ける立川ロームの西限は宮谷～笹子峠の中間となる訳であるが、この 約18kmの区間のどのあたりであろうか、その確認への手掛をうることも又この発掘調査の問題点の一であろう。

さて、その後路線が確定した結果、その用地内に所存し破壊される運命にある遺跡は結局下記の12遺跡であることが判明したのは、昭和46年1月のことであった。(飯島 進)

番号	名 称	所 在	時 代	現 状
2	西の上 B 遺跡	大月市花咲西の上	縄文・土師	畑
3	坂田古墳	〃 真木字坂田	古 墳	
4	原平遺跡	〃 〃 字原平	縄 文	
5	内屋敷古墳	〃 〃 内屋敷	古 墳	
12	沢中原 A 遺跡	〃 〃 沢中原	縄文早期	畑
17	日向 B 遺跡	〃 下初狩日向		
19	房氏 B 〃	〃 〃 房氏	縄 文	
24	コウシカ 〃	〃 〃 藤沢		畑
25	寺門 B 〃	〃 〃 〃 寺門	縄 文	畑
40	吉久保 〃	〃 衞子吉久保	地下式墓	
44	養真寺 〃	大和村日影小路	〃	
45	白 沢 〃	〃 〃	縄 文	

第二節 発掘調査の動機と経過

昭和46年春、県教育委員会は上記12遺跡の内、No.12 沢中原遺跡、No.25 寺門遺跡の二遺跡の発掘調査を行うことを決定した。用地買収以前の段階に於いて 上記二遺跡のみが発掘調査の対象と定められたのは、全て 県教育委員会の決定によるもので、県遺跡調査団、発掘担当者等の関与したものではない。かくて当初同年8月中旬に発掘着手と発表されたが 諸種の事情により実際に着手したのは10月上旬であった。

本県に於ける中央自動車道用地内遺跡の 発掘調査は、昭和43年葦崎～小淵沢間、昭和44年7月大月～勝沼間と、それぞれ路線決定の都度調査団が組織され 調査員が県教育長より委嘱されて、発掘調査＝記録保存を担当することになっているのであった。その根底には、工事実施者たる日本道路公団（破壊者）と文化庁（保護の国家機関）との間の覚書（調査の結果 重要度の高い遺跡については、その破壊を避けるために、路線の変更もありうることを内容とする）に基づく最小限度の破壊防止の保証が 発掘調査即破壊を担当する者の唯一の良心の支柱であることは言うまでもない。

尚昭和46年春、県教育委員会は 県内に於ける遺跡の大規模の総合的分布調査等を行うため、山梨県遺跡調査団を組織する方針を樹て、同年7月その結成をみた。調査員は 総数130名余に上り、県内埋蔵文化財有識者の総力を結集したと称する大世帯となった（上述 中央道関係の2調査団は調査員は7名にすぎない。）

さて私共はこのようにして生れた県遺跡調査団の決定に基づき、その第一の事業として 本節初頭に述べたような事情で採択された 本件二遺跡の発掘調査を担当することとなり、調査の現場組織を第三節にみるように編成したのは同年8月上旬であった。

今次の発掘調査に当っては、遺跡の立地条件に鑑み、作業効率を高めるため 調査員の合宿を希望したところ、大月市教育委員会、真木区藤沢区の関係者各位の格別の御好意によって 各般の御援助を頂き、且つ全期間快適な 合宿を行い得たことは全く感謝に 耐えないところであった。真木区に於ては新築の公民館を提供して頂き、炊事は小高氏夫人の献身的奉仕によって15日間の合宿を有意義に過すことができた。藤沢区に於いては、当初の土地問題の紛糾にもかかわらず、地主 小林 繁氏より隠居所一棟を快よく提供して頂き、一家をあげての 家庭的環境の中で11日間を過しえたことは全く嬉しいことであった。ここに厚く御礼の言葉を申述べたい。

さて、沢中原遺跡は 別項の如く縄文早、前期に属する遺跡で、真木川の西岸に位置する小段丘の中段に位し、狭小の発掘区画であるにも不拘押型文土器片が多数出土したことは 本県に於ては最初のことであり、然もそれが押型文初期の発展過程に一つの仮説を提供しえたことは 予想外の成果であった。

寺門遺跡は笹子川の北岸に発達した、この地域としては比較的大きな段丘上に位置し、その南方正面、高川山と鶴ヶ鳥屋山との中間に富士山を大きく望むことが出来る眺望、日照共に絶佳、然も湧水豊富なゆるやかな南面傾斜地である。大字名を藤沢というのは富士見沢の謂であろう。太古も現代も人間の生活環境選択の条件は全く同一であると今更乍ら肯けるのである、この段丘上には諸所に土器等の発見が伝えられ、土器片の散布も多いので相当大規模の遺跡が存存すると思われるのであるが、今次の発掘地点はその外端部に位置し、且つ耕地造成のため甚しい土層攪乱が加えられているため文化層の把握が困難であった。然し部分的には、1m²中に数個の黒曜石三角石族の出土した個所もあり、又出土遺物も縄文前期、中期、後期の三時代の長期間にわたる生活のあとがうかがわれることは、この地域が比較的寒冷地であるにもかかわらず相当複雑濃密の遺跡であったと考えられた。この点本県西北部に於ては、時代的に単純の遺跡の多いことに対比して、その特異性が強調される。

調査終了時に、地元の人々との遺跡を中心とする座談会をもったが、両地区とも多数の参集を得た。真木区に於ては地元の指導的立場の方々が多数をしめ、若年婦人達の姿も目をひいた。藤沢区に於ては、午後一時という時間であったにもかかわらず、数十人の参集を得、熱心に質問が行なわれたが、中年婦人がその過半を占めていたことが印象的であった。

この発掘調査にあたり地元大月市の教育委員会教育長藤本三郎氏、同次長相馬了作氏、同事務局幡野武則氏、楢本三千秋氏、下真木区長藤本金次郎氏、藤沢区長小林光忠氏、その他関係者各位に一方ならぬ御指導御援助を頂いた。ここに、改めて深甚の感謝の辞を申上げる次第である。(飯島 進)

第三節 発掘調査団の構成

一調査組織一

調査団長	井	出	佐	重	山梨県議会議員
発掘担当者	谷	口	一	夫	山梨県遺跡調査団幹事 日本考古学協会会員 中央道遺跡調査団調査員
〃	飯	島		進	山梨県遺跡調査団幹事 中央道遺跡調査団調査員
調査員	小	林	広	和	立正大学大学院学生
〃	菊	島	美	夫	立正大学考古学専攻学生
〃	分	部	桃	彦	山梨県遺跡調査団幹事
〃	山	崎	金	夫	〃
〃	伊	藤	顕	文	山梨考古学研究会員
〃	渡	辺	礼	一	〃
〃	鈴	木	馨	子	〃
〃	三	浦	美	世子	〃
〃	渡	辺	敏	雄	〃
〃	田	辺	功	男	〃
〃	小	野	聡	一郎	〃
〃	伊	藤	顕	吾	〃
〃	山	本	正	則	都留文科大学考古学研究会員
〃	里	村	晃	一	〃
〃	竹	内	清	志	〃
〃	服	部	弘	栄	〃
〃	田	中	文	江	〃
〃	一	瀬	寿	美子	〃
〃	酒	井	由	美子	〃

第二章 位置と地形

第一節 沢中原、寺門両遺跡の地理的環境

沢中原、寺門両遺跡は共に笹子川左岸に発達した中位河岸段丘上に占地する。

まず沢中原遺跡（大月市大月町字沢中原 2940）についてみると笹子川とそれに流れ込む支流の真木川との合流地点直上西岸に、沢によって切られた丘陵列が何条か認められるが、その一番南西に当る丘陵上には標高 約 500m 程度の通称真木山と呼ばれるゆるやかな山があり、この南面傾斜面が沢中原遺跡遺物包含層となっている。

この沢中原遺跡に立ち真木山を越え裏手を望めば滝子山、西奥山を見、前方には深い谷をはさみ西から東へ伸びる山で視界をさえぎられ、東方にわずかに真木川の流れる大きな沢に視界は開かれる。また西方にはゆるやかな沢をはさみ、前方にまた何条かの丘陵が走っている。この丘陵上にも中期縄文の遺跡が認められているところである。

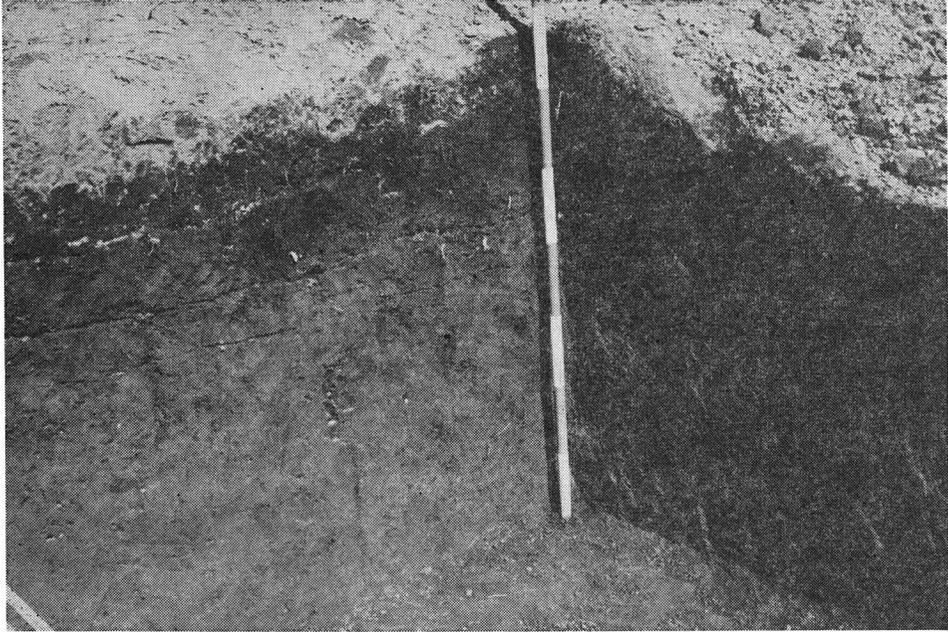
沢中原遺跡の遺物包含層は沢中山南面傾斜地にわずかな面積を占めるにすぎない遺跡の規模としても小さなかつ立地条件もあまり良いとは考えられない地点であるが、こうした状況の中から押型文の良好な遺跡が発見され、資料が残せたことは幸運であったともいえる。

次に寺門遺跡（大月市初狩町字藤沢小字寺門）についてみると、やはり、笹子川と、それに流れ込む支流の藤沢川との合流地点の東北端に当る一つの舌状の大きな中位河岸段丘上に占地しているもので、前記した沢中原遺跡と比較するならば東西南北に亘り視界は充分なみごとな台地上にある。

特に遺跡のあるこの河岸段丘の東西には深い谷が形成され、西側が現在の河川（藤沢川）となり、東側は西側よりけわしく深いが、単に谷を形成しているにすぎない。その東側の谷はわずか北方に続くのみで、谷はストップし流出した土砂で舌状台地と同一レベルになっているところからすると、以前は現在の藤沢川が、遺跡のある台地の東方の谷を流れていたことが予測されるに充分である。このことは遺跡包含層の東西にとった標準層位でも第Ⅲ層のロームが西から東へ移行するにしたがい大きく落込んでいるところからも、現在はほぼ南面傾斜の台地だが以前は東面傾斜地であったことを物語るに充分なものがあるようである。

（山本正則，里村晃一，竹内清志）

第二節 沢中原，寺門両遺跡の地質
—重鉱物組成分析から—



<沢中原遺跡層位写真>

(この項は，甲府盆地第4紀研究グループの藤本丑雄氏に分析を依頼してありますが，若干の時間が必要なため，後日追加補足いたします。)

第 三 節 沢中原，寺門両遺跡の層位

沢中原，寺門遺跡ともに発掘はグリット方式で行ない，遺跡全体の掌握に努め，層位についてはグリットを連続して発掘し トレンチに変え確認することにした。その結果，次の諸点について明らかとなった。

沢中原遺跡については，かなりの攪乱が認められたが，その中でもD区5～8は比較的良好な形で残されており，かつ遺物を良好な姿で存在したことから，D区5～8の南北に走る東壁を沢中原遺跡の標準層位として紹介することにした。

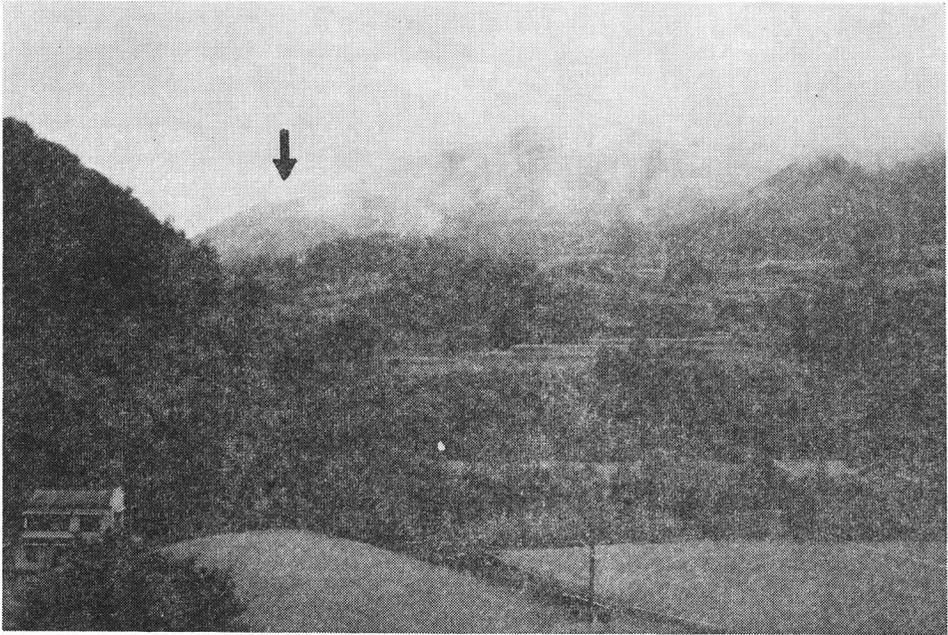
沢中原遺跡に於ては第Ⅰ層から第Ⅳ層までが確認され，A—Bセクションでは中間に攪乱層のⅢ層を設定した。第Ⅰ層は耕作土で地表面から12cm～20cm，第Ⅱ層は粘土質で砂，小竝子を含む茶褐色土層で15cm～20cmの推積がみられるが，この第Ⅰ～Ⅱ層間に於ては諸磯B，C式土器を混在している。さらに，沢中原に於て一番明確に認められたところの層位である第Ⅲ層につながるが，この第Ⅲ層では10cm～20cmを計り，色調は暗茶褐色を呈し，緻密な粘土質にスコリア粒子を包含する層位であって，ここからは一連の押型文土器が全く攪乱をうけていない良好な形で採集できたことは大きな成果であったといえよう。次に，第Ⅲ層下部は第Ⅳ層のロームと混じり合いながら第Ⅳ層のロームに移行しているが，ローム層に於ては何等遺物を確認するところまで至らなかった。

また，第Ⅲ層として設定した攪乱層は第Ⅱ層から第Ⅳ層上部にまで達していたが，ここからは諸磯B，Cが若干認められた程度であった。

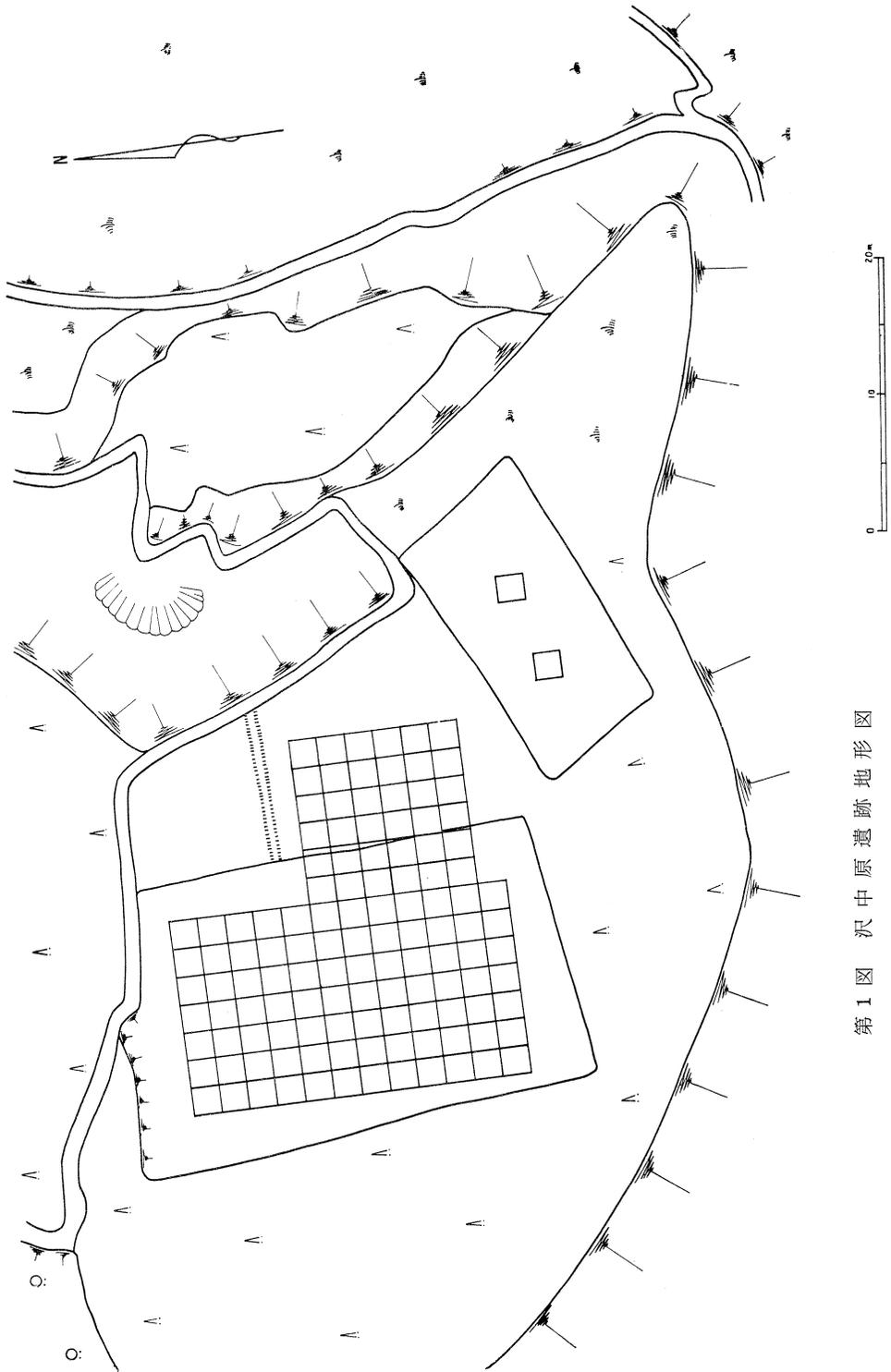
次に寺門遺跡に於ては，東西及び南北のグリットを連続発掘したトレンチで層位の確認を進めたが，ここでは標準層位としてE4区～J4区の東西に走る北壁をあて，紹介したい。

ここでは三層の層位の確認がなされたが，第Ⅰ層は耕作土で淡い茶色を呈し西側に於ては20cm程度の略同厚をもっているが，東側に移行するにつれ土厚は増し深いところで50cm程度までに落ち込んでいる。寺門遺跡に於てはもともと遺物量が少ないが，この間にあっては後期縄文式土器片をわずかに攪乱された中で認めたにすぎない。第Ⅱ層は第Ⅰ層同様攪乱が著るしいが，この層は淡い茶色の土に褐色のロームを混入している。この層の中間に於て中期縄文式土器片が，下部に於て前期縄文土器片が，それぞれ認められた。また，第Ⅳ層のローム直上に未攪乱の良好な部分が認められたが，たまたまこの第Ⅳ層直上から石鏃類が集中して認められている。また若干前後するが第Ⅱ層直上に焼土が3カ所に認められ，同一レベルに河原石，三つに分割された敲石，大型の石斧が発見されている。以上の点が明確に把握しえた点であるが，土層図より窺えることは，東端より急激にロームが落ち込んでおり，当時は小さな沢が存在していた事もわずかながらに予測させるものがある。（小林広和，菊島美夫，谷口一夫）

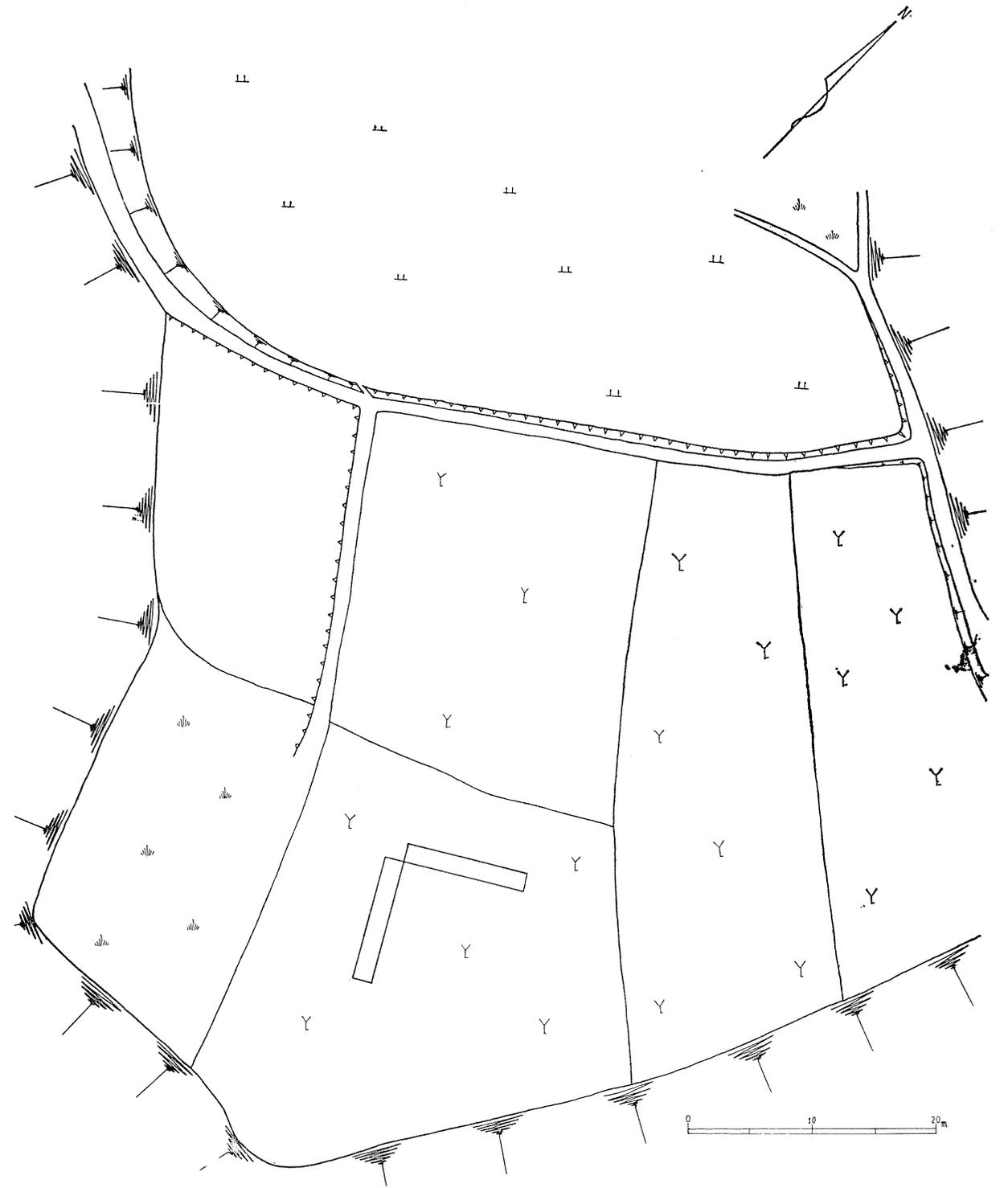
第三章 沢中原遺跡発掘調査報告



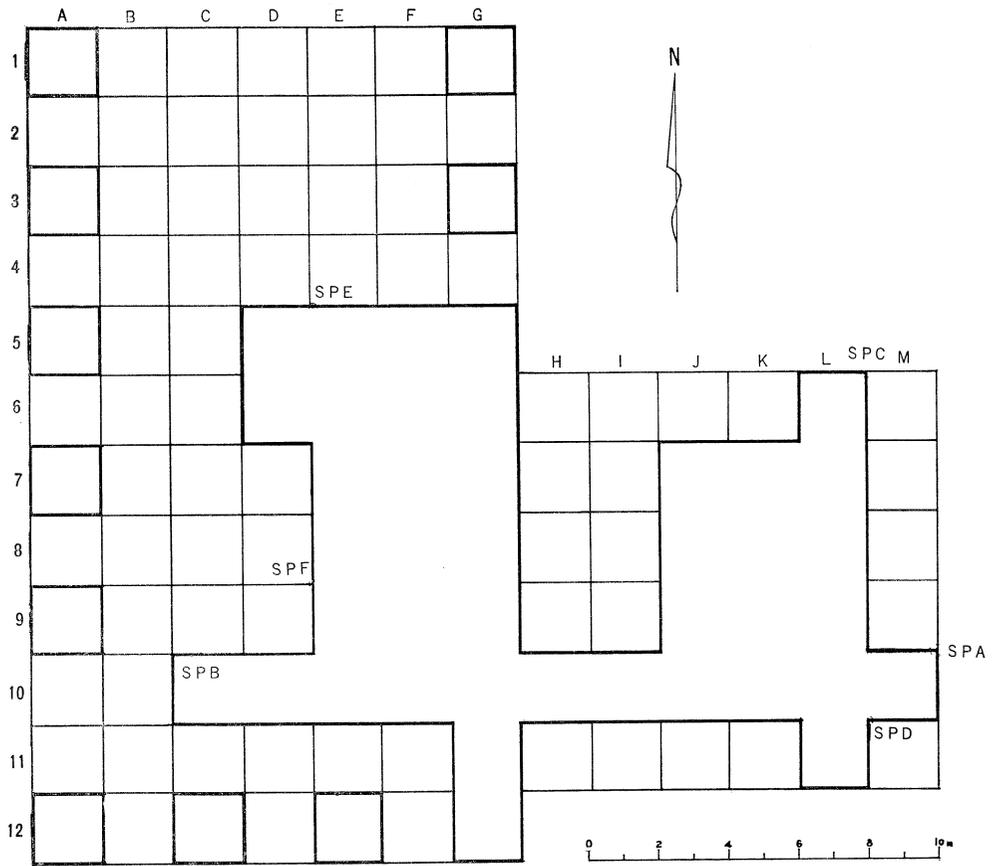
沢中原遺跡全景（東方より望む）



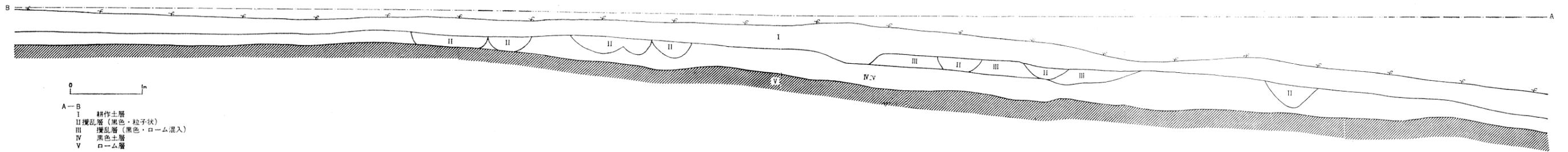
第 1 图 沢中原遺跡地形图



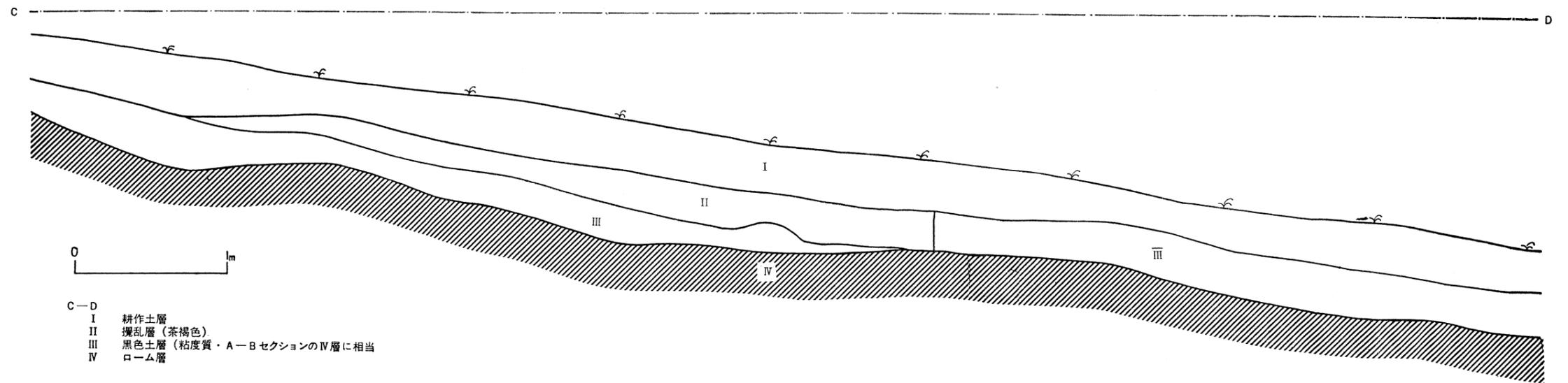
第2図 沢中原遺跡(向原)地形図



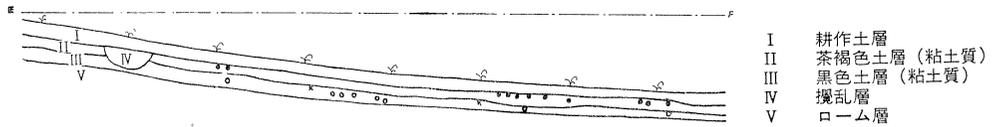
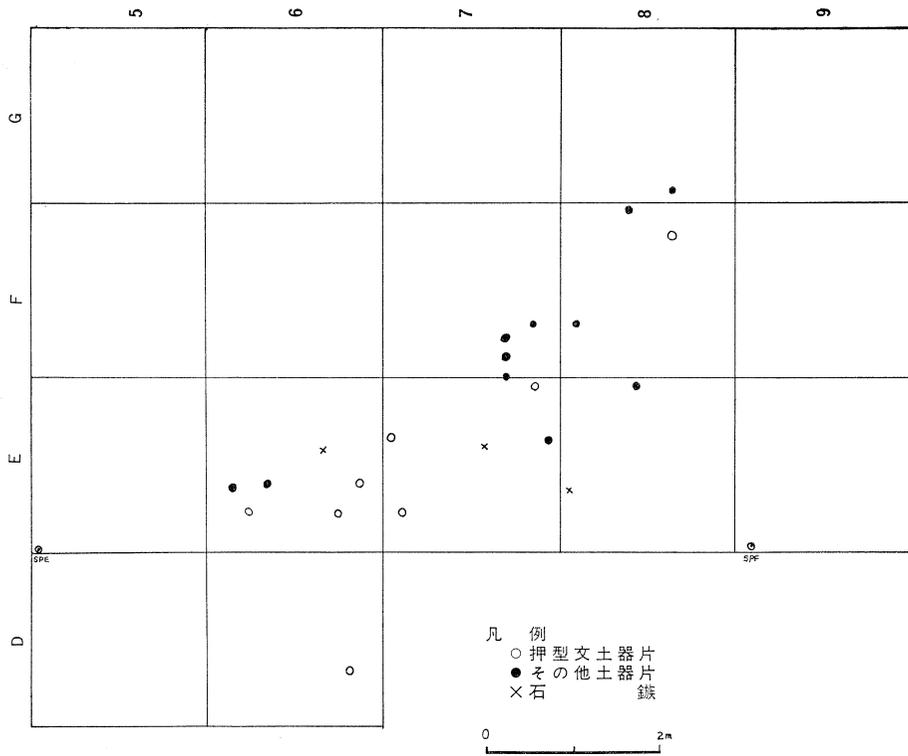
第3図 沢中原遺跡グリッド図



第4図 沢中原遺跡 A-B 土層図



第5図 沢中原遺跡 C-D 土層図



第 6 図 土器・石器出土平面図及び断面図

第一節 沢中原遺跡発掘の経過

発掘調査は昭和46年10月8日より22日まで行なわれた。発掘区はグリッド法を採用し、第3図のグリッドを発掘地域内に設定した。1グリッドは2×2mである。西から東へA～M、北から南へ向って1～12の番号をつけている。発掘作業は、まずA-2, 4, 6, 8, 10, 12, G-10, 12を掘り下げるが、遺物の出土量は少く、表土30cmを除くとロームに達し包含層すら把握できない。次いで、D区～F, 5～9（第6図）を発掘する。表土よりは、諸磯C式、若干の諸磯B式が出土してくる。第Ⅱ層の茶褐色土上面よりは、条痕文系土器が、第Ⅱ層下部より第Ⅲ層暗褐色土の上面からは、押型文土器（帯状施文と全面施文）が出土しており、遺構の検出はなかったが、包含層の検出に成功した。しかし依然、遺物の出土量は少い。J-M区を掘り下げるが、攪乱が著しい。諸磯C式が主体である。次いでJ-Mを拡張し掘り下げるが同様に攪乱が著しく遺構の検出はできなかった。

結局、押型文土器の包含層を検出したのみで、他型式、特に諸磯C式の場合、遺跡の中心をはずれて、出土状況より一定方向に流れているのが認められる。（小林広和）

第二節 沢中原遺跡出土の土器

発掘の結果、得られた遺物は、わずかで石器5点・土器100余片である。その中には種々の型式があり、量的には1型式が大半を占めるものはない。この内層位的事実を確認できたものはD～G 6～8区出土の押型文のみであった。しかし、それらを整理していくうち、郡内地方における縄文土器の様相に関する事象がわずかに判明し得た事は大きな収穫であった。以下、これら土器を8類に分類して記述しておきたい。尚、執筆の機会を与えていただいた谷口一夫氏、及び土器について御教授をえた吉田格先生に対し、深謝する次第であります。

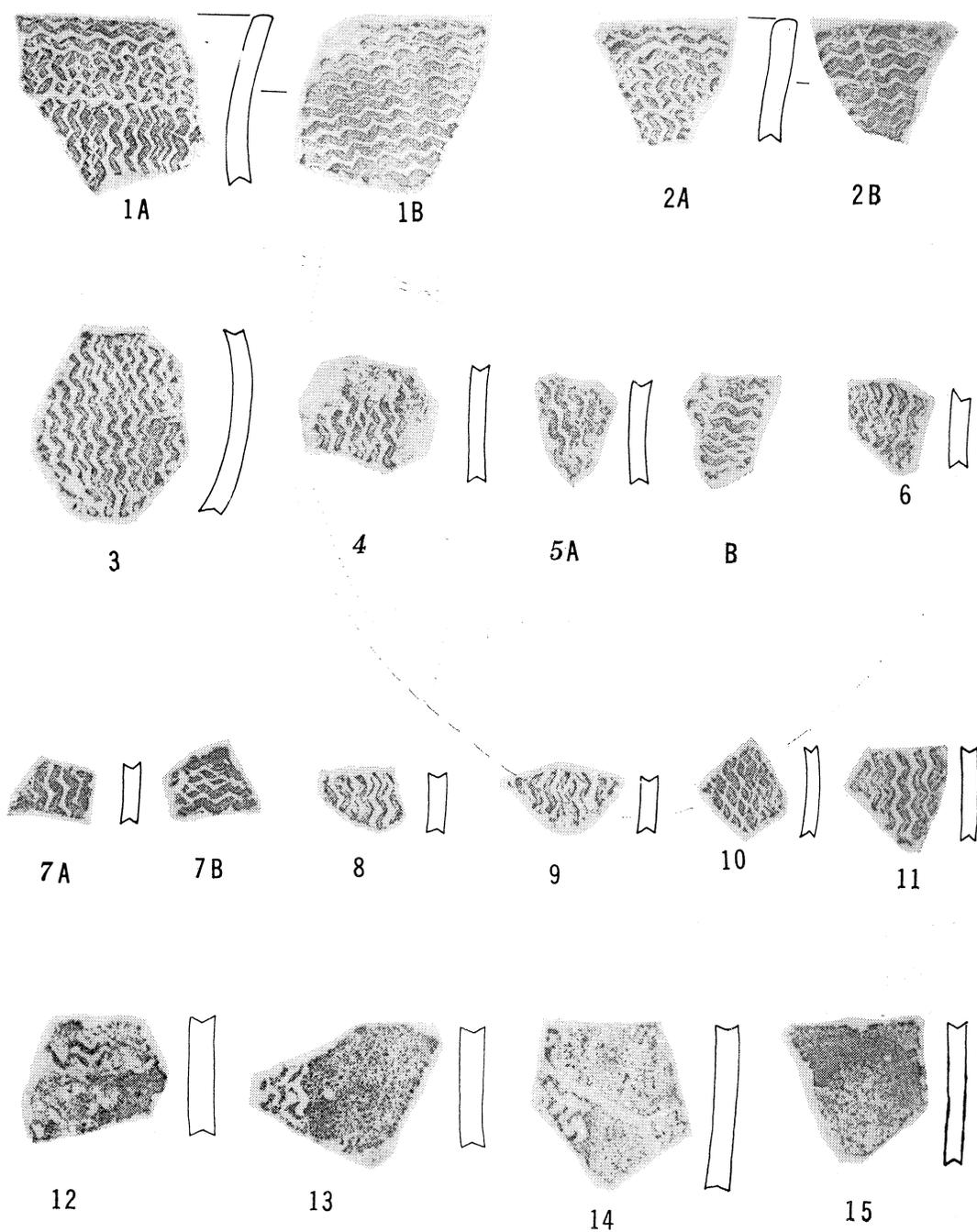
第一類 土器 一縄文早期前半一（第7図）

周知の如く本類は、丸棒に彫刻を加えた原体を土器面に廻転押捺するという作業によって器面に文様を施すといったもので、この種は西関東から九州まで広く分布している。その文様は、山形文、格子目、楕円文に代表されるが、本遺跡出土の押型文土器は、総数20片の破片（口縁部二片を含む）で山形文のみが施文されて他文様は含まない。以下に特徴を記してみる。

○色調

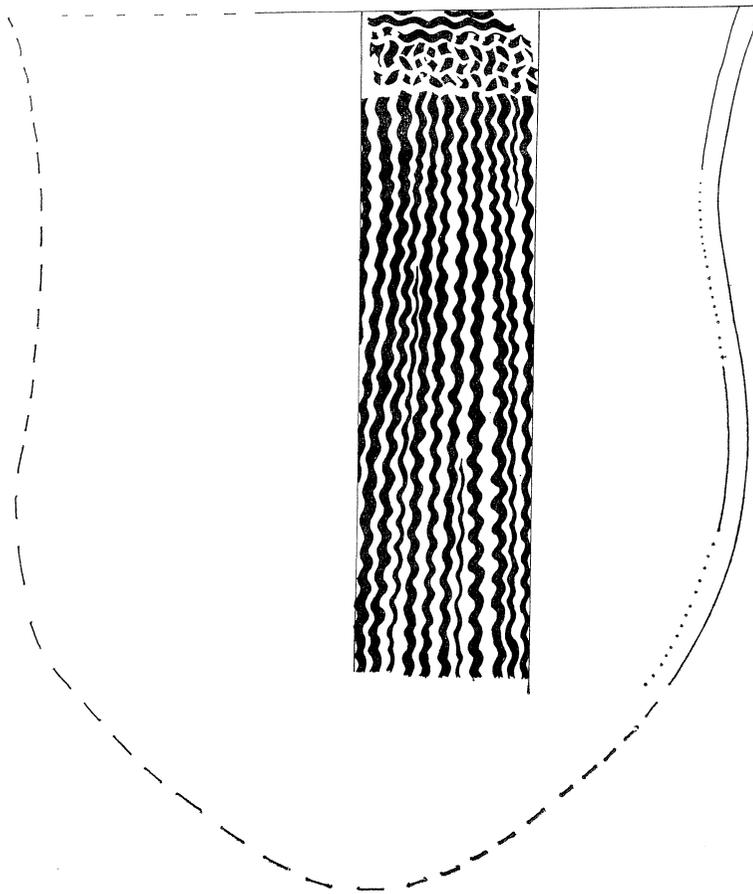
大きく分けて≪A青灰色≫と≪B褐色≫のものに大別できるが、褐色系ものについては、さらにB-I（赤褐色）、B-II（淡褐色）に細別できる。

外面 A 12 13 14 15



0 5 cm

第7图 土器拓影 1



第8図 沢中原，押型文土器復元図

②—I	1	2
	3	7
	10	11
②—II	4	5
	6	8
	9	
内面 ①	12	13
②—I	1	2
	14	15
	3	4
	5	8
	9	10
②—II	6	7

②種では、内外面ともに同一色調を呈するものは、わずか4片にしすぎない。これは、土器面焼成の際に火熱が平均でなく、様々な化学的現象によって生じた結果であるとされる。①種ではNo. 14

の内面に炭化物らしき附着物を除き、概して内外面ともに青灰色を呈し、安定している。

○器形(第8図)

発掘によって得られた資料が、最大4.6×4.3cm、最小2.1×1.6cmの破片で底部破片が1片も存しないなどの理由で、器形の全容をつかむ事が非常に困難であるが、二片の口縁部破片、No. 3の胴部破片が同一個体と思われ、図上復元はある程度可能であるが、口径など細い点までは把握でき得ないが一応次の如くなる。口唇部では、平坦であるが頸部がわずかにくびれ、やや外傾している。器壁は0.45ないし0.55cmを計る。胴部では丸く曲線を描き、そのままくびれて底部に達するものと思われる。

○胎土

本遺跡出土押型文の胎土は、二大別できうる。色調では、①、②に判別が可能であったが、これは焼成時による化学変化ではなく、胎土の差違によるものである事が推測される。すなわ

ち④種では、粘土に粒子の他に多量の雲母、識別不可能な特殊な含有物（黒鉛の一種かも知れない）を含むもので、これが⑤種のような褐色を呈しない要因とされるのである。

④ 砂粒の他に特殊鉱物を含む

⑤ 雲母・石英ら砂粒のみのもの

④においては、粘土は緻密なものを使用し、排水性がある事は、拓本作業の際に現れる。雲母、長石、石英らを含むが、特に雲母は多量に含有するようである。

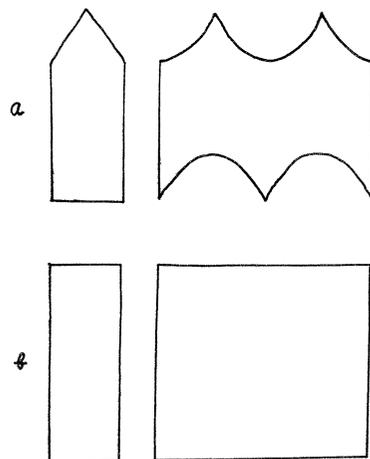
⑤は雲母、長石、石英、赤色粒子を含む。器面は④にみられるザラザラした感じがなく、滑かである。1, 2, 3, では0.25mm位の雲母が表面に目立つが、他は少量で8のように表面では観察する事ができないものなどがある。

○ 文 様

押型文土器の文様は、先学の分類するところによると、山形文、楕円文、格子目文らに分けられているが、本遺跡出土のものは山形文のみで構成されている。口縁部は、三条の横走する山形文がそれ以下では縦走する（第7図1, 2）, 3~11は胴部破片で縦走する山形が密に押捺つまり全面施文される。2, 5, 7は内面で横走する。これらは山形の巾2ないし2.5mmを計り、山形の頂は丸みをもち波状を呈する。12は横走する。波状の山形が施文されて、無文部を残す。13, 14は縦走する山形が施文されて、やはり無文帯（帯状施文）を残す。山形は鋭角で、ジグザグ状を呈する。器厚は4.5~6mmを計る。

○ 施文原体

施文原体に彫刻される山形の1山の巾（一波動間の長さ）は、④種においては6mm, ⑤種で6.5ないし7.5mmを計る。⑥においては、1山おきと同じ形の山が出現し、原体には2山が彫られていることが観察できる。したがって、⑥種の原体の直径は約4.1mmを計る。又施文原体に彫刻される山形の本数は五本を数え。これが連続して密に押捺されるので五本を単位としてくり返し同一な山形が現れる。これが一施文原体単位となり、1の場合では、原体の長さが1.8cmを計る。さて山形文の文様割付であるが、これには、第9図のような文様割付法が考えられている（可児1967）。それによると、a, は原体の先端が、切削されて楔状を呈し、これが山形文と対応するところから、一種の文様分割法を考えている。この場合、文様の両端は \sim 状を呈するb, は原体の表面に縦の細い溝を入れ、この溝を基線として山形が彫刻されたとしている。ここでは、その意に従うことにする。12~13は、文様端に \sim 状を呈し施文原体のaを使用している事が認められる。⑥は、全面施文でその判別は



第9図 施文原体の a, b
<可児1969年より>

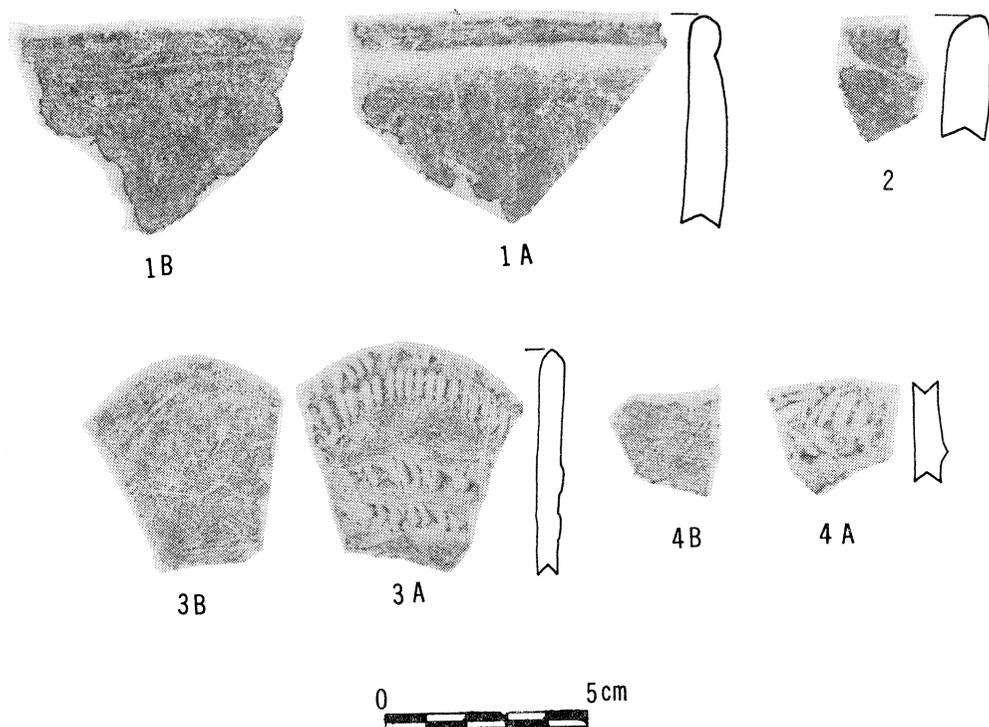
難しいが、1の口縁端は \sphericalangle を \sphericalangle を示さず、原体の両端は平行に切断されている。又山形の頂部近くには、原体に彫り残しの部分があり、それが1山おきに出現することからも、aとは異なる文様割付を行っていたと推測される。つまり施文原体の表面に、何らかの印をつけ、それを目印に彫刻したbに近いものであったとされる。

第二類 土器 (第10図 1~2)

器面がよく研磨された無文の土器で、花輪台Ⅱ式に比定されるものを本類とした。

1は、口唇上面が丸みを呈し、肥厚が著しい。口縁部のみわずかに外反するが、直立形態に近い。胎土は、 2×2 mm 大の白色不透明、黒色不透明の石粒子を含むが胎土は固くしまり緻密である。色調は焼成の際の加減であろうか、口唇部附近では黒茶褐色、それ以下では薄茶褐色を呈する。器厚は0.7ないし1 cmを計る。

2はやはり口縁部破片である。形態は直口形態を示し、小破片の関係かも知れないが、器厚は1 cmで変化はない。口唇部上はやや尖り気味を呈して、器面は丹念に研磨されている。胎土は 2×3 mmの石英を含むが、砂の含有は少く良好なものを使用している。色調は赤褐色を呈し、焼成良好な土器である。



第10図 土器拓影 2

第三類 土器 (第10図 3～4)

本類には、関西系縄文早期粕畑式土器に比定されるもので、突帯文と 押捺施文を特徴とする群である。

3は、口唇部破片で、口縁端には細かい刻目が、それぞれ平らに 押捺されている。突帯文は二段認められる。突帯上の施工は 扶ることなく単に鋭利な器具によって切り目を入れている。又切り目と切り目の間隔は非常に狭く細い。器厚は 4.5～4.9mm を計り比較的薄手のものである。色調は薄茶褐色を呈する。胎土は、石英粒、長石など細かい粒子を 多量に含んでいるが、胎土は固くしまっている。内面は表面に比べ ややザラザラした感がある。焼成、保存ともに良好な土器である。

4は鋭い刺突用具により押捺されたく形文様と突帯文から成る。内面は細い擦痕が目立つ。器厚は 0.6cm を計る。胎土は 1.5×1.5mm 大の石英、粒子白色 不透明の石粒子、それに微量な金雲母を含む。色調は薄茶褐色を呈し、焼成良好な土器である。

第四類 土器 (第11図)

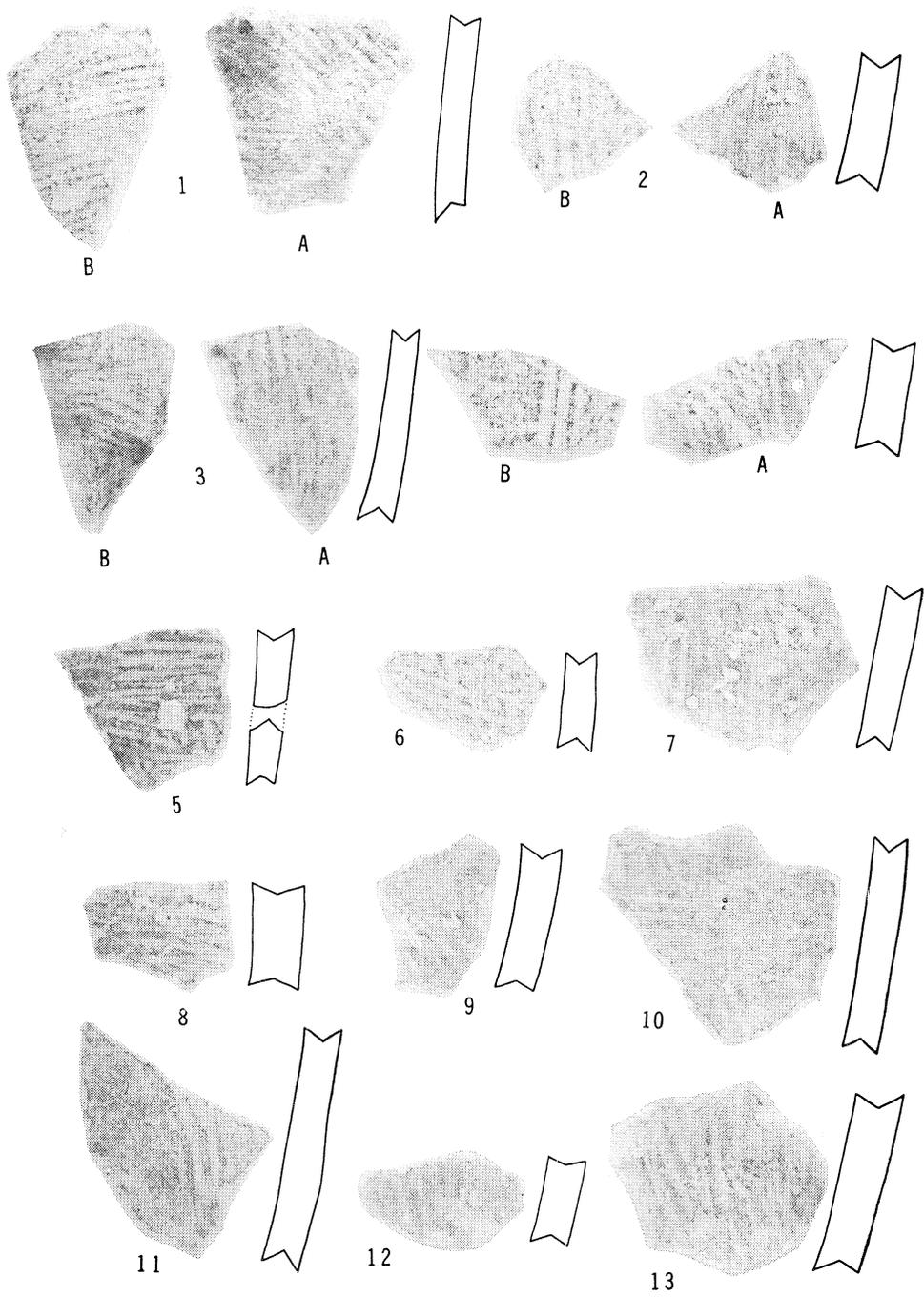
本類は内外面共に貝殻条痕文をもつものが主で、縄文早期、子母口式土器に 比定されるもので各個体間は、それぞれ特徴を持っている。

- (a) 内外面共に縦位の条痕をもつもので、2, 7, 11, が上げられる。条痕は内外面ともに直線的で、施工工具は同一である。器厚は 1.2 ないし 1.3cm を計り、胎土は軟質黄色不透明の砂粒を多量に含みザラザラして、重量感がある。胴部下位の破片である。
- (b) 1 を上げる。内外面とも横位一斜位の貝殻工具により施文されている。胎土には 繊維を多量に含み表、裏ともに繊維痕が認められる。焼成は良く、胎土も中では固くしまり緻密である。
- (c) 外面で縦位、内面で斜位に施されるもので、3 を上げる。繊維を含み、表面には 繊維痕が残る。焼成は良好で色調褐色を呈する。
- (d) 外面が横位一斜位、内面で縦位に施文される。施工工具は 4 条以上で、直線的である。5, 8, 9 を上げる。胎土は 繊維が少く、白色不透明、軟質黄色不透明の粒子を含み、内面はザラザラし、重量感がある。

第五類 土器 (第12図 1, 2)

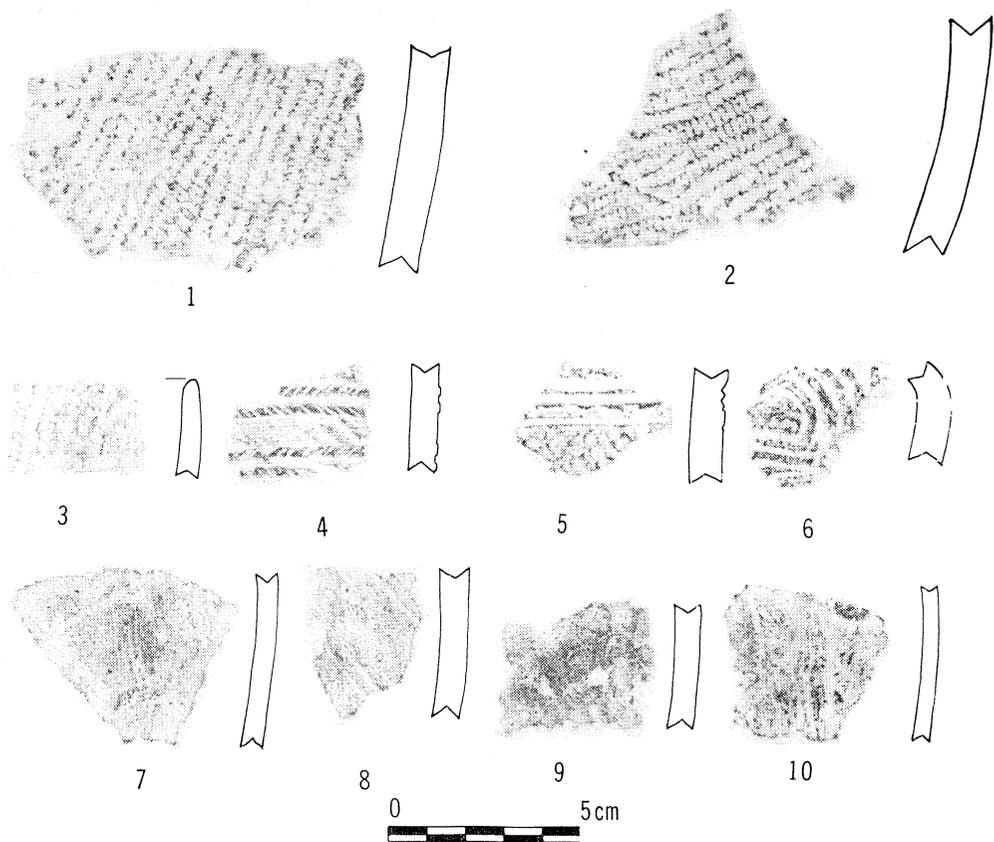
縄文のみによって飾られた土器を本類とした。おそらく、縄文前期、黒浜式土器に 比定されるものと考え、以下にその特徴を記述してみる。

1, は胴部下位の破片と思われる。地文には、横方向LRの回転で縄文が施文されている。胎土は繊維が混入しているが、他の石粒子は含まない。内面はヘラ状工具により、縦位一斜位



0 5 cm

第 11 图 土器拓影 3



第12図 土器拓影 4

の方向に調整が加えられ、平滑である。色調は、薄褐色ないし褐色を呈する。保存は良好の土器である。

2は、やはり胴部下位破片で、1同様、地文にLRに回転した縄文で施文されている。内面は、ヘラ状工具により調整されて平滑である。胎土には繊維を含有し他の混入物はない。1と同一個体かも知れない。

第六類 土器 (第12図 3~6)

本類には、縄文前期、諸磯B式に比定されるものをまとめた。

3は口縁部破片で、直立かやや内傾する。地文には、LR回転の縄文で施文されている。色調は薄褐色ないし褐色を呈する。胎土には金雲母、白色不透明の砂粒を含むが、胎土は緻密なものを使用してひきしまっている。焼成保存ともに良好である。

4は地文にRLの横位方向の縄文を施し、その上に、巾2ないし2.4mmの隆起文をはりつ

け、それにヘラ状工具による刻みをつけたものである。胎土は金雲母、白色不透明の砂粒を含むが、緻密なものを使用している。色調は赤褐色を呈し、焼成良好である。

5は、地文にRLの縄文を施して、その上に四条の平行沈線を施している。器厚はやや厚く0.9mmを計る。胎土には金雲母、白色不透明の砂粒を含み、胎土は緻密である。色調は薄褐色を呈し、焼成は良好である。

6は、平行沈線による曲線と直線で文様が巧みな構図でもって描かれている。この施文用具は半截所管によるものである。色調は薄褐色ないし褐色を呈する。胎土は石英、白色不透明の砂粒を含む。焼成は良好なものである。

第七類 土器 (第12図 7～10)

無文、細かい繊維による擦痕を有した薄手の土器を本類としたが、時間的位置は縄文前期の所産かと考えられる。

7は器厚4ないし4.2mmを計る。胎土には、石英、長石それに多量の繊維を含む。外面には、縦走する擦痕が、内面には横位の細かい擦痕が目立つ。色調は黄褐色ないし薄褐色を呈する保存良好な土器である。

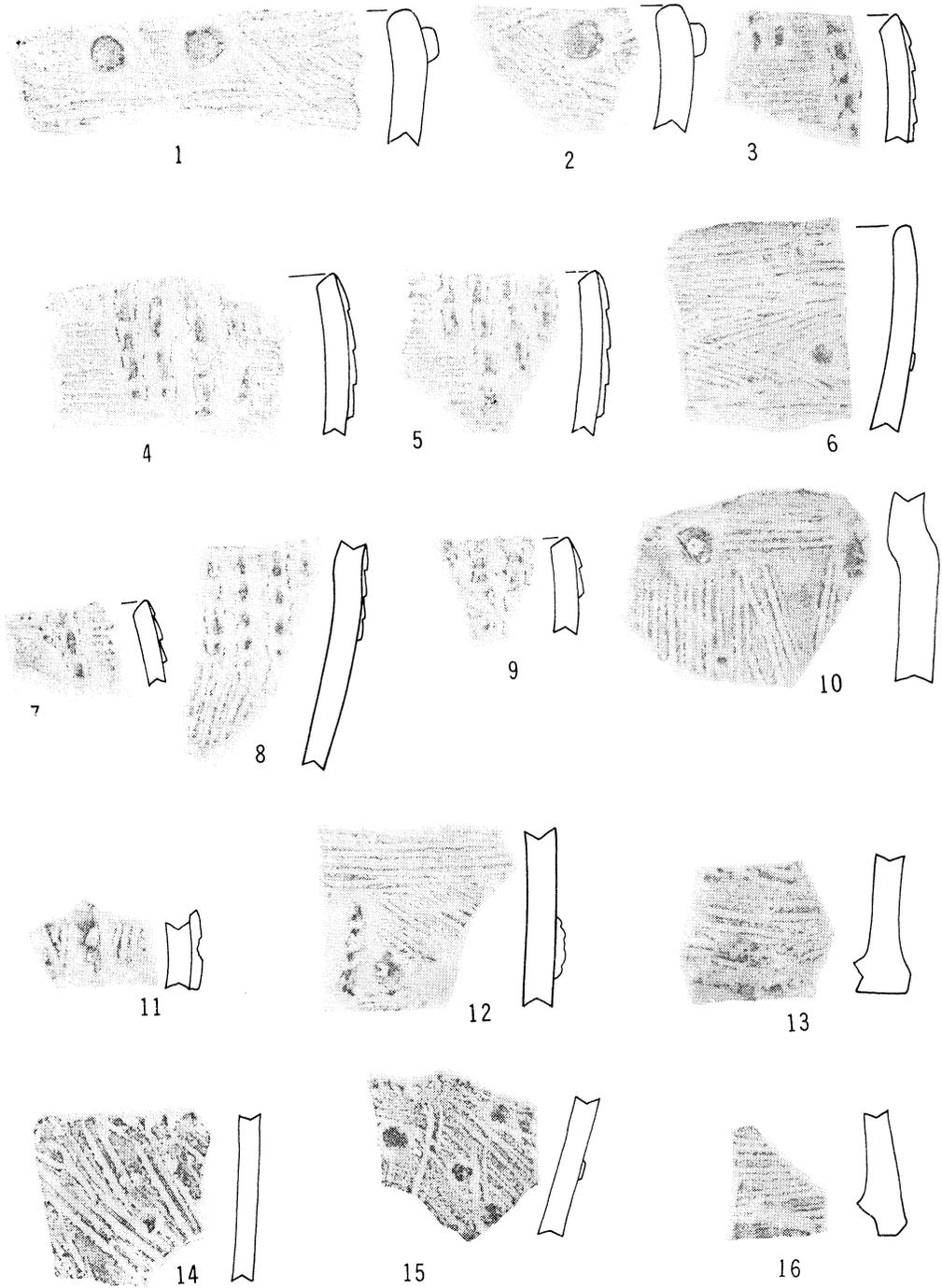
8は器厚6ないし6.5mmを計り、やや厚い。器面は内外面とも繊維によると思われる細かい擦痕が目立つ。色調は薄茶褐色を呈する。

9は、器厚4ないし6mmを計る。表面は磨滅して、観察不可能であるが、内面においては、横位に繊維による擦痕がみとめられる。胎土は白色不透明の砂粒、微量の雲母、それに繊維を含有する。色調は薄灰褐色を呈し、焼成は悪い。

第八類 土器 (第13図)

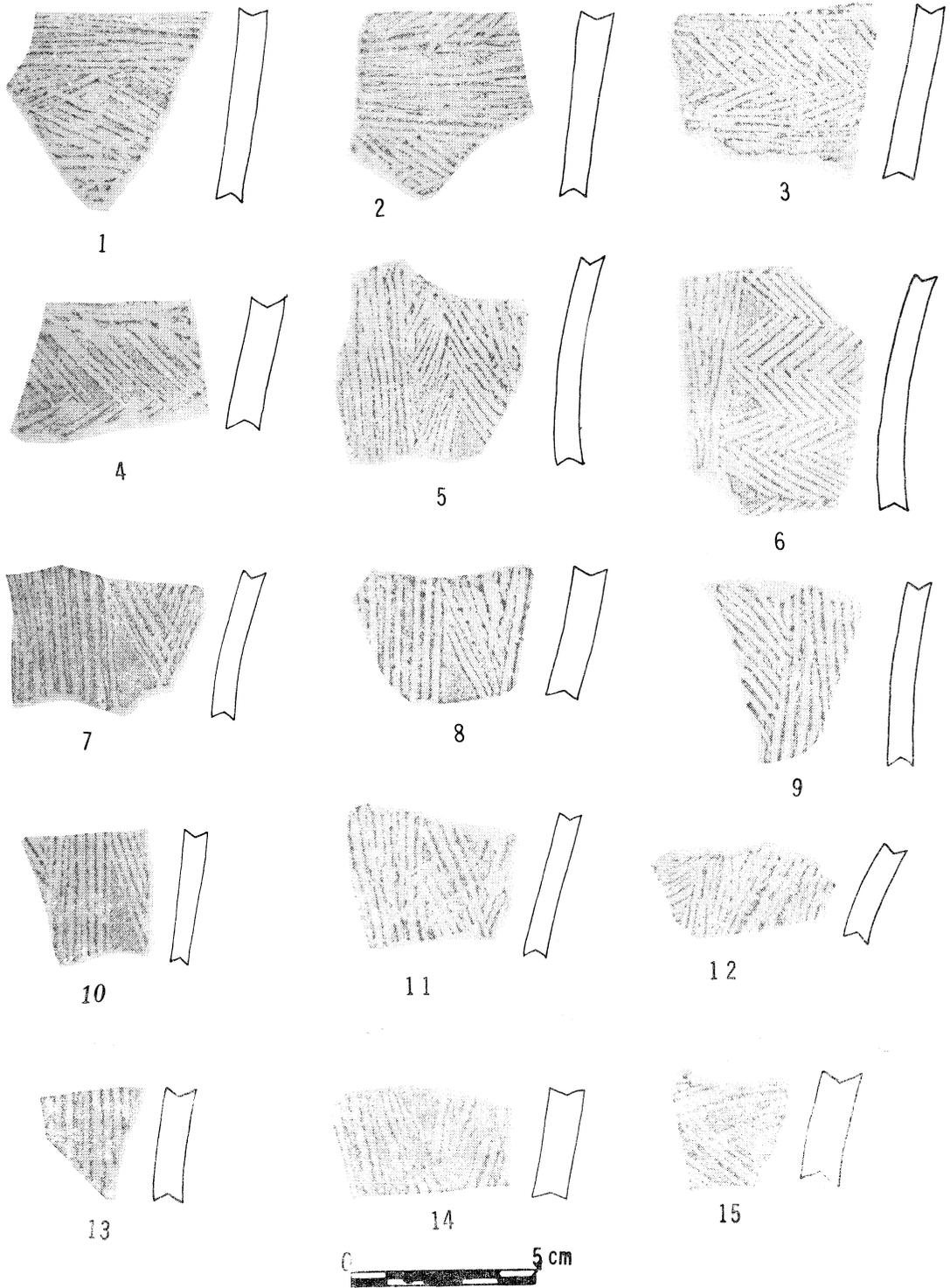
本類は、地文に半截竹管文による沈線を施したもので、繊維を含有しない一群で土質焼成は良好なものが多い。諸磯C式土器に比定できる。

A、紐状突起、土器本種は紐状の粘土紐を貼附して立体感のある文様構成を示す。(第13図3～5、7～9)。口縁部はやや内湾する。頸部はくびれるものと思われる。形態は甕ないし深鉢形を呈するものと推測される。胎土には多量の金雲母、石英を含み、胎土は緻密である。色調は赤褐色ないし褐色系統である。紐状突起は、全て縦位で平均四条が一括して附加されている。この紐状突起の上面には、半截竹管工具による一種の刺突文を伴うものが普通である。地文には、半截竹管による直線が口縁に平行して施文されている。3～5は巾3ないし5mmの半截竹管様工具により平行沈線を地文に施し、その上に四条以上の単位よりなる縦位の粘土紐を附し、紐上、上面には巾3ないし4.5mmの半截竹管工具の押引文が観察される。器面調整はよく内面は光沢を呈する。11は胴部上半と思われる。粘土紐下には平行沈線が施されているが、それ以下では沈線が斜位に施される。

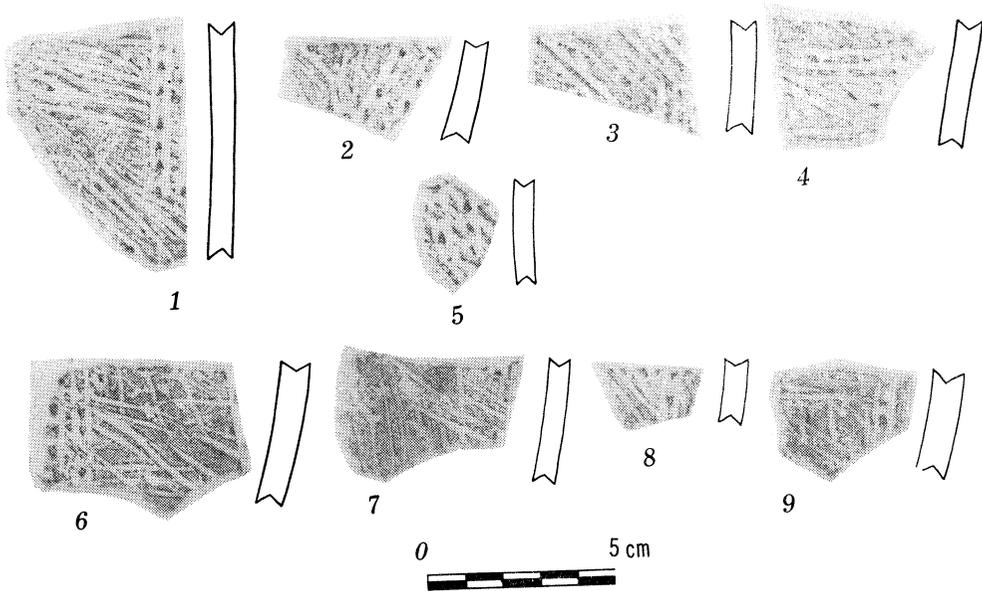


0 5 cm

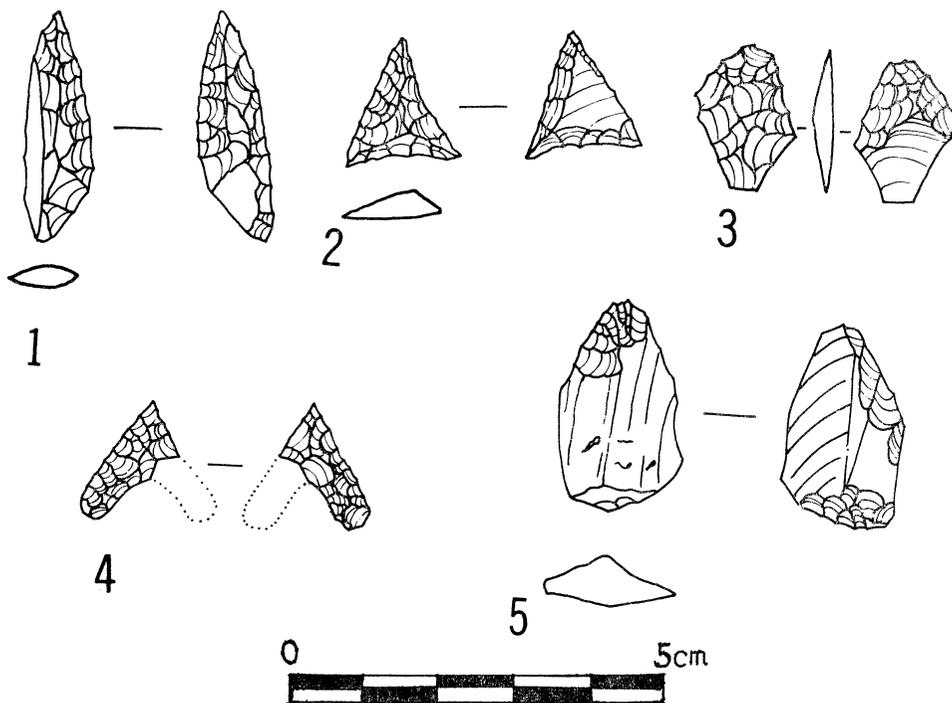
第13图 土器拓影 5



第 14 图 土器 拓影 6



第15图 土器拓影 7



第16图 石器实测图

B. ボタン状突起が付けられるもので1, 2, 6, 10, 14, 15が上げられる。A種同様に地文には半截竹管用具による沈線が施されるが、Aで水平沈線のみであったのに、綾杉形(1, 2, 6)と水平のものがある。ボタン状突起にはその形状が、押しつぶされて粗大となったもの(1, 2)、整美な小形のもの(6, 14, 15)などがある。又ボタン状上面に半截竹管用具によって刺突、廻転されたものがある。(10.12)胎土には、多量に金雲母、白色不透明の石粒を含み、器面はよく調整されている(10.12)。焼成は良好で薄茶褐色ないし褐色を呈するようである。

C. 沈線文のみで飾られるもので(図14)厳密には、A, Bに含まれる。半截竹管用具による直線的な平行沈線が主体であり、文様は平行文と綾杉形文、山形文らによって構成されている。器厚は薄手のもので4mm、厚手のもので9mmを計る。胎土はやはり金雲母、砂粒を含み緻密で良好なものである。焼成はよく褐色ないし赤褐色を呈する胴部破片である。

D. 刺突文土器で(第15図1~9)が上げられる。胎土はA~Cと同様であるが、色調は茶褐色ないし、黒茶褐色を呈する。刺突は、不規則な縦横に走る平行沈線の中に、直線的に施され、その手法は押引かと思われる。内面は調整がよく施されているが、ザラついた感があり、焼成は良くない。(小林広和)

第三節 沢中原遺跡出土の石器

沢中原遺跡より発見された石器は少量でわずか5点を数えるにすぎない。その内訳は縄文土器に伴うもの4点(石鏃3, 石斧1), 先土器文化の所産と考えられるもの1点である。

○石鏃(第16図1, 2, 4)

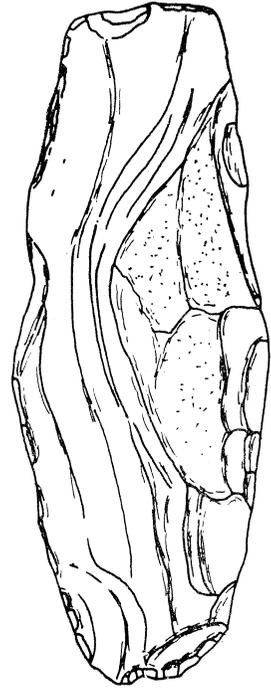
2, 4は第Ⅱ層下部より出土した。おそらく押型文土器に伴うものであろう。2は、正三角形に近いが右辺が、わずかに湾曲する。素材には剥片を用い、a面では調整剥離が全体に及び、又三辺より一定方向に剥離される為、中央が厚く0.35cmを計る。基部は細い剥離が加えられて、浅く内湾する。石質はチャート質で完形である。4は、いわゆる鋏形石鏃である。片方の脚は欠損しているが、ほぼ二等辺三角形を呈していたことが推測される。基部の内湾は極端に深く、脚が全長の $\frac{1}{2}$ 以上を占める。剥離調整は、両面とも、くまなく施されている。石質は黒曜石である。この種は、関東の普門寺遺跡、大原遺跡、稻荷原遺跡ら押型文の古い様相をもつ群に伴出する。1は、片方の脚が欠損する。二等辺三角形を呈するものとする。先端部は鋭く作り出されて、調整剥離痕は両面に施される。石質は緑泥片岩を使用している。

○石斧(第17図1A, B)

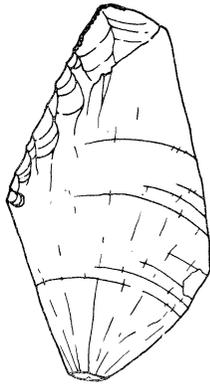
いわゆる短冊形の打製石斧である。最大巾5.5cm, 最大長14.7cm, 最大厚2.1cmを計る石質は砂岩で粗大な感を受ける。



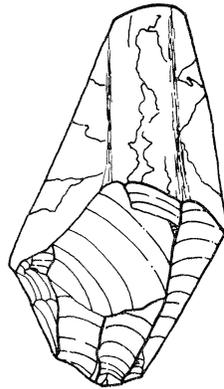
1A



1B



2A



2B



第 17 图 石器 实测 图

○ 剥片 (第16図3, 5)

いずれも石器未完成品と考えられる。

3, は最大厚 2.7cm の比較的薄い剥片で, 両面には剥離痕がほぼ全体に施されている。石質は黒曜石である。5, は両端に剥離がみられるが 使用痕はなく, やはり石器未完成品と思われる。

○ 17図の2は先土器文化所産のものと考えられるもので, 一種の石刃かと思われる。b面は主要剥面が主でしかも基部には, 加撃面を残す。左肩は細かい剥離加工が認められる。石質は玄武岩系を使用している。

第四節 沢中原遺跡の考察

I, 沢中原遺跡で得られた押型文土器は, 次のような事項で, 押型文土器研究上重要な位置を占めるものとされる。

(一) 施文効果について

押型文土器の器面に施される文様は, 文様に重複がない事, 帯状施文のものは, 器面が彫整され胎土をしめるための回転を必要としない事等を根拠に, 押型文は 装飾効果を目的としたと云う事を述べた。<小林1971>

今日でも筆者自身その見解は変わっていないが, 今一度 沢中原の遺物より考えてみたい。遺物の概観の中で記した如く 沢中原の押型文は, 帯状施文と全面施文とが併用されている。全面施文の方は文様に重複はなく整然とした山形押型文が 規則的に口縁部では横位に, それ以下では縦位に施文されている。帯状施文では, 胴部と推測される小破片のみであったが 横位と縦位とが認められる。今日までに発見されている押型遺跡の中で明確に全面施文と帯状施文が 同時期としてとらえられているものは少い。原体 a種は, 帯状施文のみに, b種は 全面施文に使用されているという事実は, 単なる原体の相違 そのものではなく, 文様割付法による差であって, 施文が単なる胎土をしめる為ではないものと推測される。又, 施文法に合せ原体を変えるという風習が, すでにあったという推測は 不可能ではない。帯状施文の器面は良く調整されて, 他の仕上げ作業は必要としないなどを 考慮に入れば施文効果は装飾を意識したものである事がうなづける。

(二) 沢中原押型文の編年的位置

押型文土器の編年上明確な層位関係を把握した例は 日本全国に於ても数少い。したがって, この様な状態の中で 押型文の編年は, 文様, 器形などいわゆる型式学的なものより, その骨組がなされてきた。

沢中原遺跡の発掘調査には、出土遺物の層位あるいは伴出物等について特に注意を払い、作業に従事した。その結果 D～F 5, 6, 7, 区の第二層下～第三層上面にかけて押型文包含層を把握した。他の子母口、諸磯式土器らはこの地区では、表土、第二層上部で出土している。

さて沢中原における押型文の特徴は前にもふれているが、带状施文、全面施文、原体 a, b 二種を併用し、山形文のみで構成されている。全面施文に最近似のものには、埼玉県大原遺跡<吉田1941>がある。しかし、大原では格子目文を伴い、全面施文のみで沢中原より新しく位置づけられる。带状施文土器に類似するものには多摩ニュータウン No.269 遺跡<可児1969>があるが、多摩では带状施文を特徴としており、中には全面施文に近いものがある。さらに文様構成で山形文のみで施文されて沢中原と共通点が多く、古い様相をもつ。

さて山形文のみで構成される群について、可児氏は山形文のみの単純な様相を示すものを第 I 期として最古に位置づけ、第 II 期には格子目文の出現の段階を位置づけている。それに従って沢中原は第 I 期に位置づけられ、押型文土器群中最古グループとされるであろう。

(三) 带状施文と全面施文について

赤木清氏によって「磨消手法」としてとらえられた带状施文は、長野県樋沢遺跡において、全面施文のものと層位的にとらえられて、下層から带状、上層から全面施文が出土した事実より、带状施文から全面施文へ移行するという考えが以後一般化され、細久保式以降の楕円文を主体とする遺跡らの発掘結果によって証明され、今日では固定化されつつある。しかし、今回の発掘による沢中原押型文土器は、带状施文、全面施文を併用していた事が証明されたわけで前述のような考えは、沢中原においては通用しない。すなわち第 I 期より带状施文、全面施文が併用されていた訳で、この点に関しては、沢大原ら格子目文、山形文で構成する群らを考察することによって、带状施文から全面施文へ移行するという考えに対し、まだ検討の余地ある事を述べておいた<小林1972>が、沢中原の発掘結果は、これをさらに発展するものとされる。つまり第 I 期においては、施文原体 a, b 種の併用の事実、さらに带状施文、全面施文の併用が行なわれていた事実より、樋沢の発掘結果による「带状から全面へ」と移行する」という考えは、一志 樋沢-細久保期には通用するものとしても、それ以前と、沢中原、多摩らに代表される山形文のみのグループ以後は押型文土器初期発掘過程を考えるには困難であろう。ここではその予察として今後の研究の指針を示しておきたい。

第 I 期(山形文のみで構成)には、沢中原より、原体の a, b, 全面施文、带状施文の併用が把握され、又多摩ニュータウン No.269 遺跡における、ほんやりした様相、つまり带状施文の中には全面施文に近いものがある事が報告書より認められる。施文原体は a, b を併用していたのかも知れない(可児1969)は正解であるものと信ずる。このように装飾効果を目的した押型文土器は第 I 期で、带状・全面施文を併用するが、次の山形文、格子目文の第 II 期に入ると、

- 1) 全面施文 大原
- 2) 带状施文(原体 a のみ) 沢

といった全く異なる様相を示す。おそらく大原では、施文原体にbを使用していたものと思われるが、格子目文の出現期には、沢中原にみられた㊶㊷の二様相が完全に一つの文化として分離していることに注目される。一体なぜかという問題は次にゆずるとして、次の楕円文を伴う時期について若干ふれてみる。樋沢下層式は、沢に最もよく類似し楕円文を伴うことから沢の影響をうけて、発達したものと考えられている（大野・佐藤1967）。ここでは、帯状施文を基本とするが、中には全面施文に近いものが注意されている。又、新潟県印ノ木遺跡では、連続菱目文、格子目山形文らは帯状施文であるが、楕円文と山形文の併用文は交互に密に押捺され全面施文する。このような傾向は大川や北替地にもみられる。

以上の関係を図示すると



といった関係となる。今後の資料の増加に期待する。

II, 縄文早期, 花輪 II 式が本遺跡よりは、二片出土した。いずれも攪乱土層又は谷への流れ込みといった具合で、その文化層はつかむ事が出来なかったが、柱川地域よりは花輪台 I 式が確認されている<山本1959>事などから、今後の調査に期待できる。又 比較的、都留大月地方には少いとされている子母口式土器がそれとほぼ併行すると思われる粕畑式系土器とが 層的事実はないが、伴出している点など注目する。

さて、県下における諸磯式土器は甲府周辺では花鳥山を中心に、郡内では 河口湖周辺が上げられ、山梨県全域にその分布をみる。本遺跡でも、諸磯式特に㊸Cは本遺跡内では多い。しかしこれらは、いずれも攪乱を受けているか、もしくは他地域より流れ込んできたものと考えられ、遺構は検出されない。ただ押型文土器がD~G区にかけて 層位的にとらえられたのみであった現在、八類に分けた内七類についての詳しい様相は、後日つまり後の発掘で資料が集積した時点で行いたいと考える。(小林広和)

参 考 文 献

- 松 沢 亜 生 細久保遺跡の押型文土器（石器時代4）
- 中 村 孝三郎 卯ノ木押型文遺跡（長岡市立科学博物館研究調査報告5）
- 吉 田 格 埼玉県大原遺跡（古代文化12）
- 佐 藤 達雄
大 野 政雄 岐阜県沢遺跡調査予報（考古学雑誌53—2）
- 戸 沢 充 則 樋沢押型文遺跡（石器時代2）
- 藺 田 芳 雄 菱村普門寺観音早期時代遺跡（あんとろぼす3—1）
- 岡 本 勇 相模平坂貝塚（駿台史学3）
- 岡 田 茂 弘 大川遺跡（奈良県文化財調査報告2）
- 三友田 五 郎
安 岡 路 行 稻荷原（大宮市教育委員会）
- 赤 木 清 押型文における磨消手法（ひだびと5—9）
- 可 児 通 宏 多摩ニュータウン No.269 遺跡（多摩ニュータウン遺跡調査会）
- 小 林 広 和 押型文土器の諸問題（史陵第1号）
- 〃 押型文土器の施文法に関する私考（史陵第2号）
- 吉 田 富 夫
杉 原 英 介 尾張天白川沿岸における石器時代遺跡の研究（考古学8—10）
- 稲垣晋也 他 「入海見塚」 S. 30
- 山 本 寿々雄 山梨県の考古学 山梨県に於ける縄文土器の展開
（県立富士国立公園博物館研究報告）
- 可 児 通 宏 押型文土器の変遷過程（考古学雑誌55—2）
- 安 達 厚 三
浅 野 清 春
大 参 義 一 北替地遺跡発掘調査報告（いちのみや考古6）

第五節 沢中原（向原）遺跡出土の石器

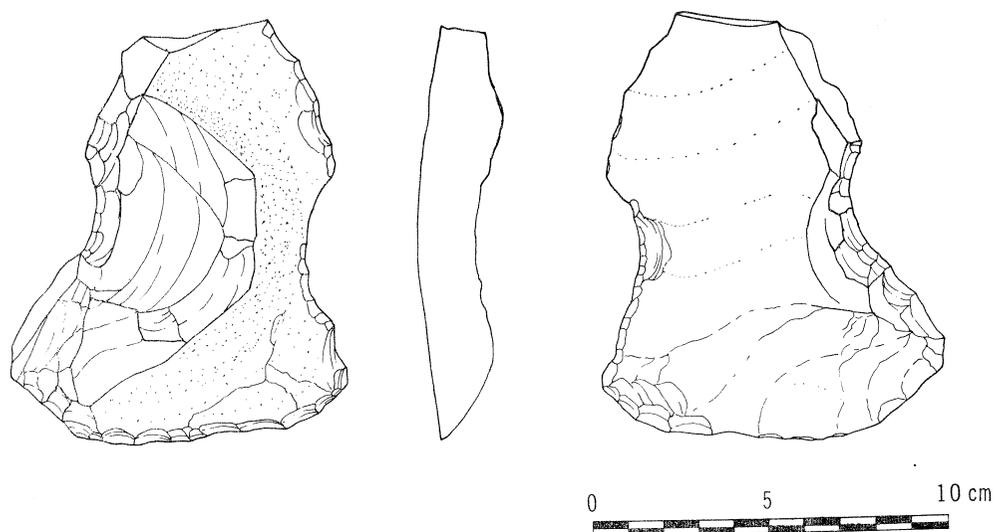
大月市大月町下真木の真木川西岸第一河岸段丘上を通称向原と呼ぶが、この向原の南面中央先端部に巾2m×長さ10mのトレンチを直角に二本入れ、層位の確認を行なった。（第2図向原地形図参照）これは当初、沢中原遺跡発掘地点と誤認（県当局）し、諸事万端発掘作業の手続きが終えていたため行なったもので、当初より遺物の出土は期待されずにいたが、発掘によってはずも第18図の如き分銅形石斧一点を採集したものである。

この地点は、大きな沢の中に位置し、礫層で覆われており、全く遺物包含層が認められないところから、この分銅形石斧は流されて来たものといえよう。

この種の分銅形石斧については、縄文時代に於ける粗製の打製石斧の一型式で、特に中部高地に於ても、その出土例は顕著なものである。

石質は、硬質砂岩で両面に加工痕を残すが、やはり日常生活用具として重要な道具であったものといえよう。

なお、土器についても、かなり注意して発掘作業を進めたが、一片の破片も発見されなかったことを付記しておきたい



第18図 沢中原遺跡（向原）出土石器

第四章 寺門遺跡発掘調査報告

第一節 寺門遺跡発掘の経過

大月市初狩町下初狩字藤沢小字寺門に占拠する寺門遺跡の発掘調査は、昭和46年11月17日から27日までの10日間に亘り実施された。

遺跡は笹子川北岸に発達した大きな河岸段丘上にあり、その遺物散布地域はほぼその全域に亘っているところで、同時にその地域内には山梨県遺跡台帳1024に記録されているところの古墳も認められるところである。

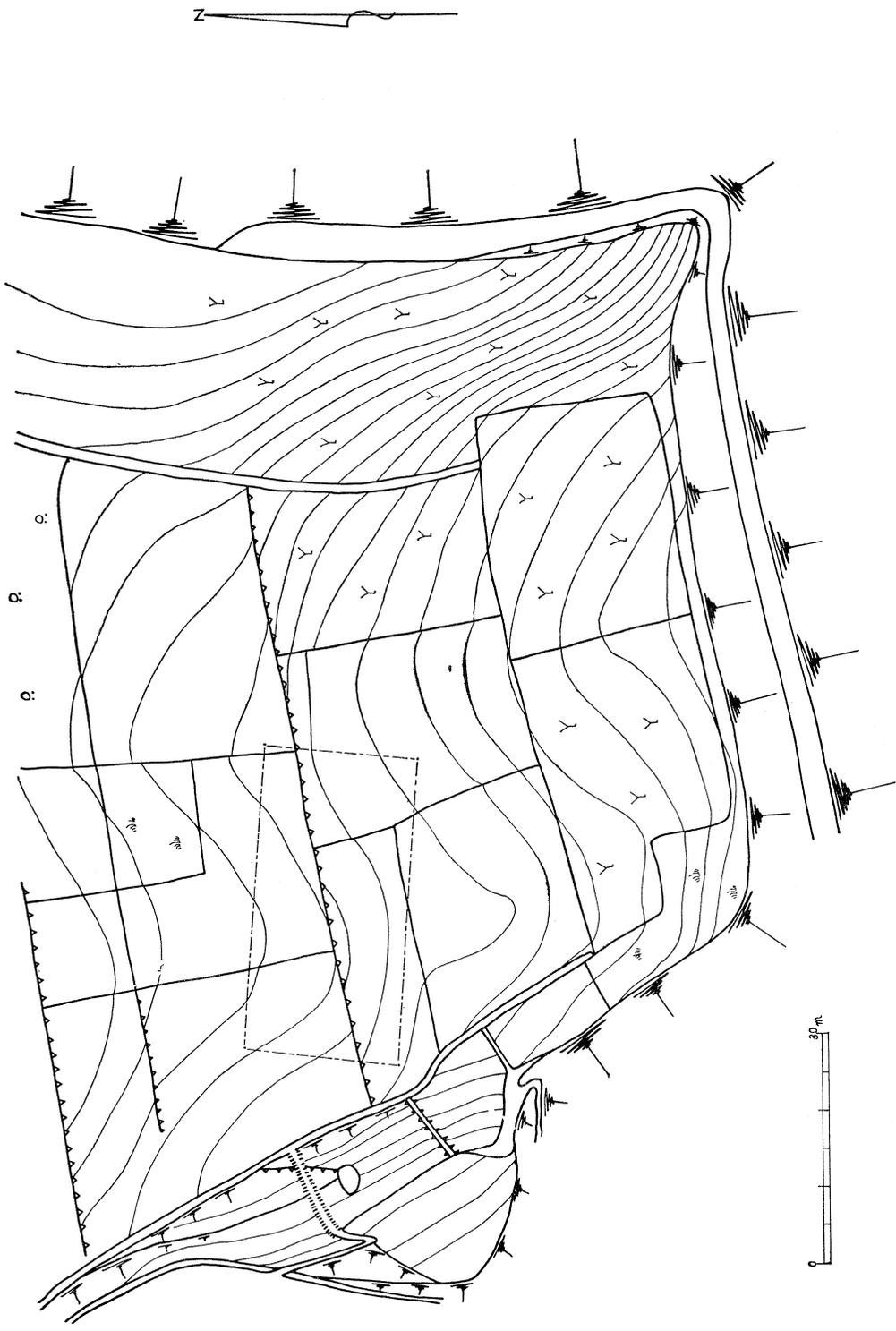
発掘調査は、この河岸段丘上の遺物包含地から始めた。まず、地形的にみても何等かの遺構の確認も可能であると予測されたため、中央道予定路線センターに並行して東西に40m、南北に20mの範囲内を2m間隔に等分に区切ったグリットを設定、グリット方式で行ない、必要に応じて連続して発掘を行なうなどトレンチ方式に移行させることにし、作業を進めた。では発掘日誌をもとに10日間の発掘経過についてふれてみよう。

昭和46年11月17日（水）

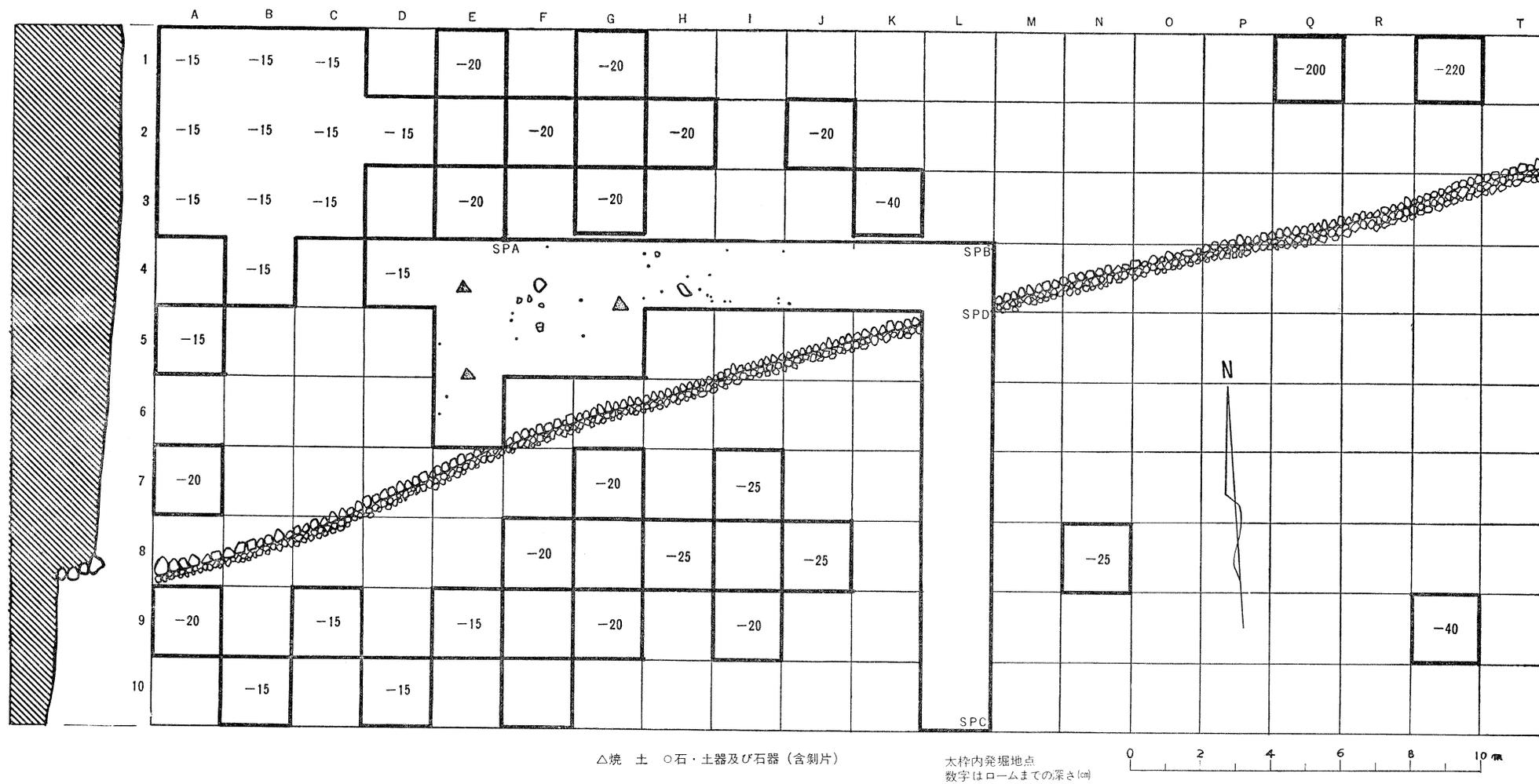
午前中関係者が出席し鍬入れ式を行ない、午後寺門遺跡の発掘調査が開始された。



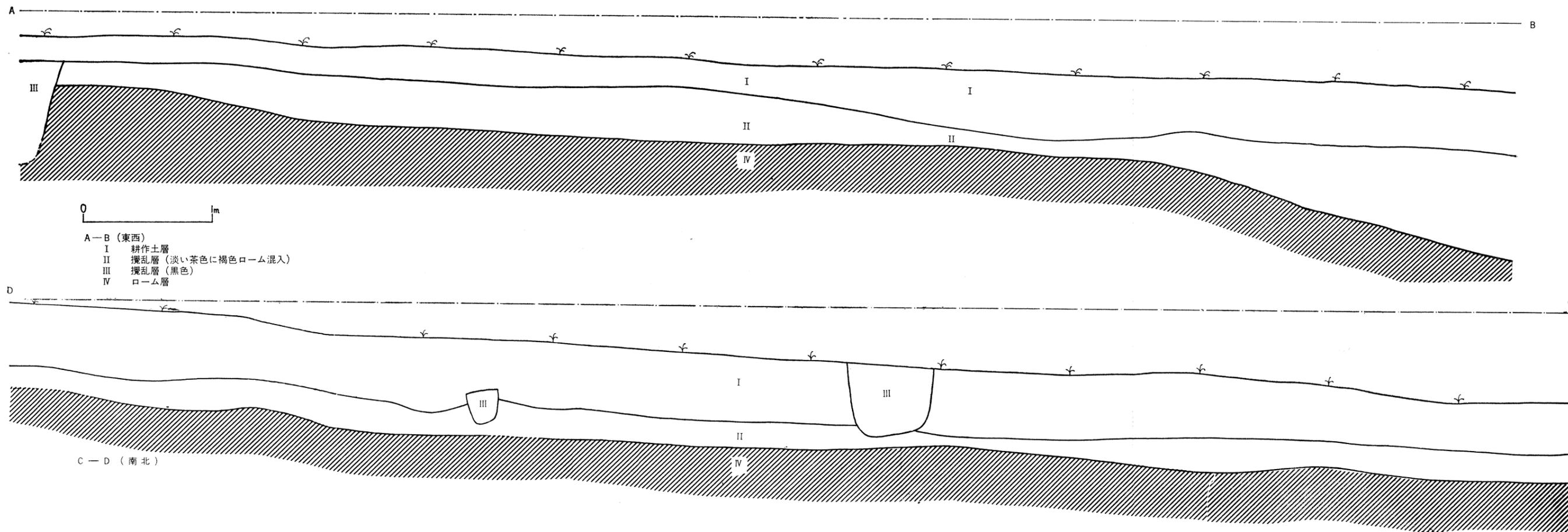
寺門遺跡全景（北々東より望む）



第19图 寺門遺跡地形图



第20図 寺門遺跡グリット図

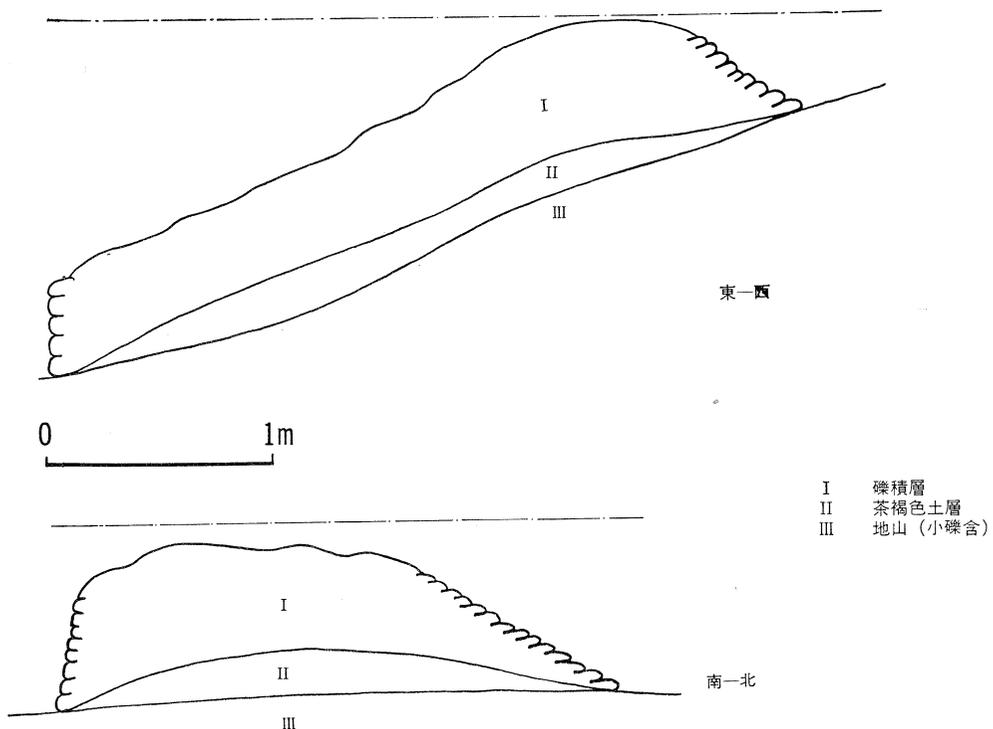


第 21 図 寺 門 遺 跡 土 層 図

まず、全員作業として発掘地点の設定にとりかかった。予定台地上を一通り表面採集を行ない、その比較的遺跡が多く散布し、かつ地形的にも良好な場所を選定し、路線センターラインにグリット最南端を並行して合わせ東西40m、南北20mの大枠を設け、その中を2m間隔に等分することによって第20回寺門遺跡グリット図に示したようなグリットを設定、縄張りを完了させ18日からの発掘に備えた。2m四方を一つの発掘区としたため総数200に及ぶ発掘区が出来たが、これを東西をA～Tまでの20、南北を1～10の数字で付し、A1区、A2区、A3区といった呼称で以下統一することにした。

昭和46年11月18日（木）

発掘班と測量班に分れ発掘並びに測量作業を一斉に開始した。測量班は地形測量と同時に、グリット図の作成に入り、出土遺物のポイントを記録するに万全の構えを取った。発掘班はA1区、C1区、E1区、G1区、Q1区、S1区から掘り下げたが、A～Gに於てはいずれも表土（耕作土、黒褐色土層）は浅くA、Cは15cm、E、Gは20cmでロームに達するなどで文化層は無く、期待に反するスタートを切った。反面、Q、Sは15cm～20cmくらいまで掘り下げても表土と同一の黒褐色土層が続き、攪乱された状態の中から、縄文式土器破片一片（第23回拓本12）が確認された。この地点は、この黒褐色土層が1m以上続く模様で、わずかながら後日への期待をのこすものとなった。またC1区でロームに茶褐色の堅穴状らしき落込みが見られたため、B2区を掘り下げ確認を急いだが、これは攪乱によるものと解った



第22図 寺門古墳断面図

昭和46年11月19日（金）

D 2区、E 2区、H 2区、J 2区及びA 3区、C 3区、E 3区、G 3区、K 3区、B 4区、D 4区、F 4区、の各グリットの掘下げを行なったが、依然遺物量は少なくJ 2区のローム直上（-20cm）から、小さな縄文式土器破片一片（第23図拓本15）が認められたにすぎない。またF 4区からは磨製の石製品 3ヶ（図版14図）が発見されたが、これは一つの敲石に復元された。（第25図1）。

昭和46年11月20日（土）

Q 1区、S 1区の掘下げを再開、さらにA 7区及び石垣南側の落込み部分のうちG 7区、I 7区、F 8区、H 8区、J 8区、L 8区、N 8区の掘下げを開始したが、この方もロームまで20cm～25cmと浅く、表土（耕作土、黒褐色土層）には何等遺物が認められなかった。Q 1、S 1は依然表土（耕作土、黒褐色土層）がそのまま続きQ 1で100cm、S 1で120cmに及んでもなおロームに達しなかった。Q 1では縄文式土器破片9片、S 1から1片の計10片（第23図）が採集された。なお、今日に至り判明したことに道路建設設計上の都合で、この部分が丁度くびれ部分に該当するため、Q 1、S 1ともに路線外に飛び出していることが確認されたため、この部分の追及は中止せざるを得ない状態となった。

昭和46年11月21日（日）

F 5区を中心とする地域が、寺門遺跡としては比較的良好な文化層が残されている模様であるため、この地域のD 4区、H 4区、I 4区、J 4区、E 5区、E 6区、F 5区を重点的に追うと同時に、山梨県遺跡台帳 1024にのせられている寺門古墳の墳丘実測（第22図）及び発掘にかかった。寺門古墳と言われて来たこの石積は厚さ40～60cmで、その下に10～30cmの土層があったが、石室や石棺の施設は認められず、開墾時の石積みであろうかと思われる。なお、包含層の方では、この日E 6区、H 4区で水晶の剥片、またH、I、Jの各4区で石鏃、黒曜石剥片など含め縄文式土器破片29片が採集された。

昭和46年11月22日（月）

遺跡南北のセクション図作成の為、L区4～10を掘り下げ、その東壁の測量を行なった（第21図）。また、同時にA 9区、C 9区、E 9区、G 9区、I 9区、S 9区、B 10区、D 10区、F 10区を掘り下げたが、いずれも15～20cmでロームに達し遺物は全く確認出来なかった。

昭和46年11月23日（火）

遺跡東西のセクション図を作成のため、重点地域のD～Lの各5区の未発掘区であるE 4区、G 4区、K 4区、L 4区を掘り下げ、平均して落して行った。ここではE 4区、G 4区でそれぞれ焼土を発見したほか、石鏃、黒曜石剥片及び縄文式土器破片20片を採集した。

昭和46年11月24日（水）

昨日に続きG 4区、H 4区を掘り下げ、さらに焼土の関係を探るためE 5区、E 6区、F 5

区、G 5 区を拡張、石斧、水晶・黒曜石剥片、縄文式土器破片を採集した。E 5 区に於ても焼土を発見したが、いずれも住居址等の遺構は発見されなかった。特にG 4 区に於て良好な形で50~70cm 掘り下げた地点で石鏃4 個(図版14)を採集したほか、縄文式土器破片2 片、H 4 区からはローム直上で黒曜石剥片7 個、石片1 個、縄文式土器破片1 片を採集した。

昭和46年11月25日(木)

G 4 区、H 4 区を中心にさらに掘り下げた。また、G 4 区、H 4 区の間にある壁を取ったがここからは初めて文様の顕著な縄文式土器破片1 片が発見された(第23図 拓本1)。なお、明後日予定のF 4 区~L 4 区北壁セクション実測に備え壁の清掃を行なった。

昭和46年11月26日(金)

調査員に連日の発掘調査による疲労の色が濃くなったため、一日休息をとることにした。

昭和46年11月27日(土)

最終日になったためF 4 区~L 4 区北壁セクション実測をとり、(第21図)さらに地形区の補足、発掘グリットの最終仕上げを行ない、全ての作業を終了した。(谷口一夫)

寺門遺跡出土遺物明細表

年月日	地区	出土層位	土器類	石器類	その他
46.11.18	Q1区	黒色土層	縄文土器片 1		
46.11.19	J2区	黒色土層	縄文土器片 2		
46.11.20	Q1区	表土	縄文土器片 2		
〃	〃	黒色土層	縄文土器片 8		
〃	S1区	表土	縄文土器片 1		
46.11.21	H4区	黒色土層	縄文土器片 1	石鏃1, 石器らしき黒曜石1, チャート剥片1, 水晶剥片1, 黒曜石剥片多数	
〃	I4区	黒色土層	} 縄文土器片 23	石鏃4, 黒曜石片多数	
〃	J4区	黒色土層			
〃	E5区	表土		石片2	
〃	F5区	表土		縄文土器片 3	チャート剥片1, 黒曜石剥片1,
〃	E6区	表土		縄文土器片 2	石片1, 水晶剥片1
46.11.23	F4区	黒色土層		磨製石器3	
〃	H4区	黒色土層	縄文土器片 18	石鏃3, 黒曜石, 剥片多数	焼土
〃	G4区	黒色土層	縄文土器片 2	黒曜石剥片1	
〃	F5区	表土		黒曜石剥片1	焼土
	E4区				
46.11.24	G4区	黒色土層	縄文土器片 2	石鏃4, 黒曜石剥片14, 水晶剥片1	
〃	H4区	黒色土層	縄文土器片 1	黒曜石剥片7, 石片1	焼土
	E5区				
46.11.25	G4区	黒色土層	縄文土器片 1		
	H4区 (中間点)		(文様の顕著なもの)		
合	計		縄文土器片67・	(石器14, 石鏃12, 石斧1, 敲石1)	

(菊島美夫)

第二節 寺門遺跡出土の土器

寺門遺跡の出土遺物については、第一節の発掘経過でもふれた通り土器片67, 石器14と極く僅少である。特別に住居址あるいは特殊遺構もなく、周辺の環境からみると意外な結果というより他はない。しかも遺物包含地は、これら土器片, 石器ともに第20図寺門遺跡グリット図のE4区～F4区, E5区～G5区, E6区の計10区に集中しており、遺跡の恵まれた立地条件からすれば、その遺物量はあまりにも少なすぎるといえるようだ。遺物包含層は第1層(耕作土層), 第2層(褐色のローム混入土層)だが、その大半は攪乱された様相を呈し、第3層のローム直上に、未攪乱のやや良好な層をみる事が出来る。

出土土器は全て縄文式土器で、それを分類するならば3類に分けることができる。ではそれ等の土器について若干の説明を加えてみたい。

第1類 土器

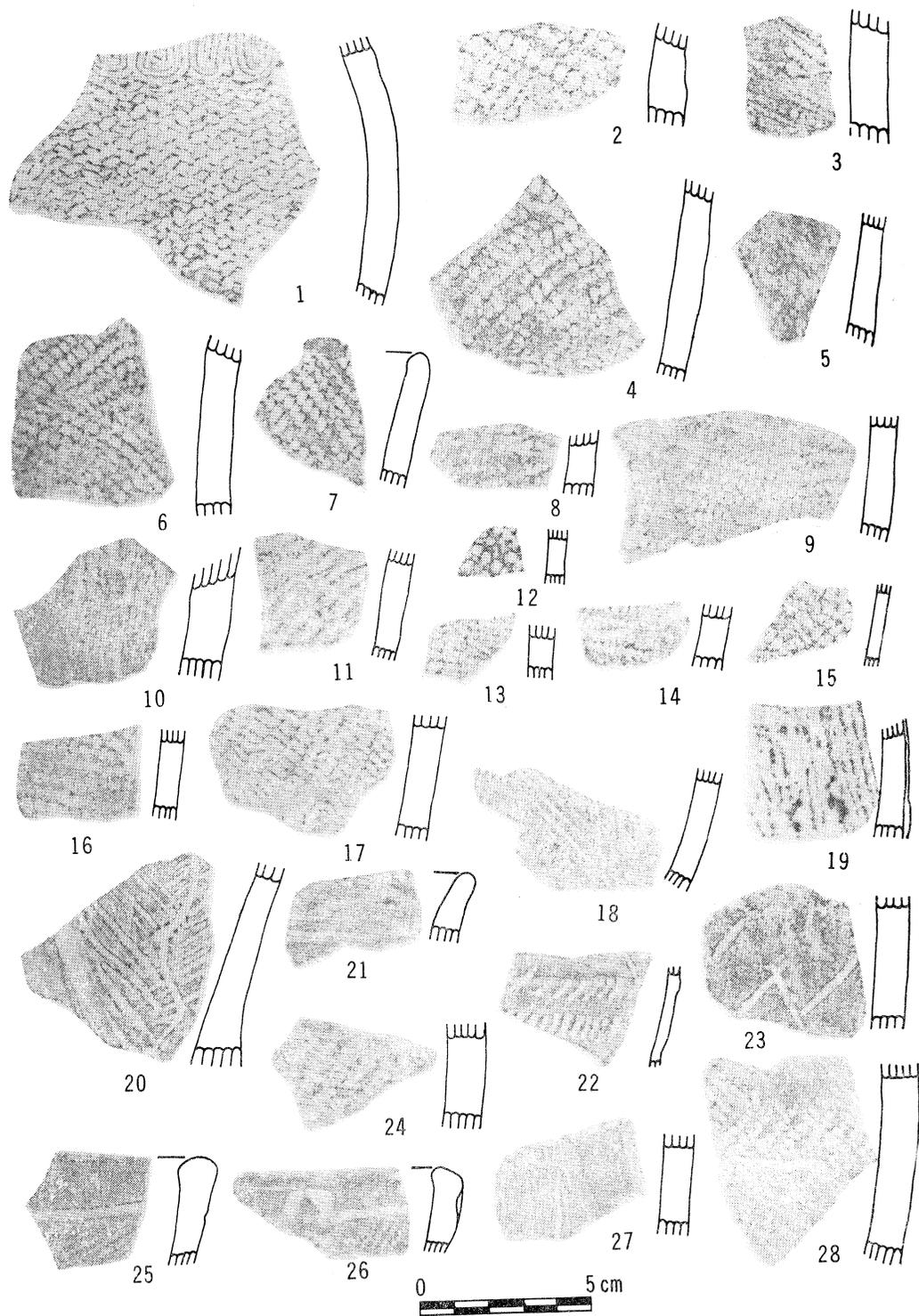
縄文前期に位置づけされる土器を第1類土器に分類した。第23図拓本1, 2については繊維を多量に混入した関山式土器に比定される土器で、その縄文の施文方法といい関山式土器のメルクマールとなるコンパス文様が顕著に表現されている。みみず状の縄文は、かなり大胆な変化を求めた、この時期の人々の心を如実に物語っているものがある。拓本22は前期にみられる貝殻連続刺突文による文様が施されているが、この種の土器はかなり求めたが、この一片の発見に留まった。

第2類 土器

縄文中期に位置づけされる土器を第2類土器に分類した。第23図拓本3～24, 27, 28がそれに該当する。いずれも中期後半の加曾利E2式のもので大体が中部高地に多い色彩の強い土器である。いずれも普通ならもう少し大形破片にて発見される中期縄文式土器であるが、ここでは全体にその破片は小型である。

第3類 土器

縄文後期に位置づけされる土器を第3類土器に分類した。第23図拓本25, 26がそれと該当する。これは耕作土層の攪乱層から採集されたが、加曾利B2式に比定される。(谷口一夫)



第 23 图 出土土器拓影

第三節 寺門遺跡出土の石器

寺門遺跡出土の石器は土器と同様に出土量は極く少量で、14点を数えるにすぎなかった。14点の内訳は黒曜石製の石鏃12点、石斧1点、敲石1点で、中でも石鏃が多くを占めているのが特長でもある。それ等は全てE4区～J4区、E5区～G5区、E6区の範囲内に集中して含まれている。また、この狭い範囲内にチャート剥片2、水晶剥片3を含め黒曜石剥片はかなりの量が出土しているのも特色である。

石斧及び敲石はF4区～F5区にまたがり同一レベルで出土したが、その出土状態は第20図に示した通りで、特に石斧は二つに折れ敲石は3つに分割され道具としての機能が欠けた状態で出土している点も無視できない。

以下、その特徴を記してみたい。

○石 鏃

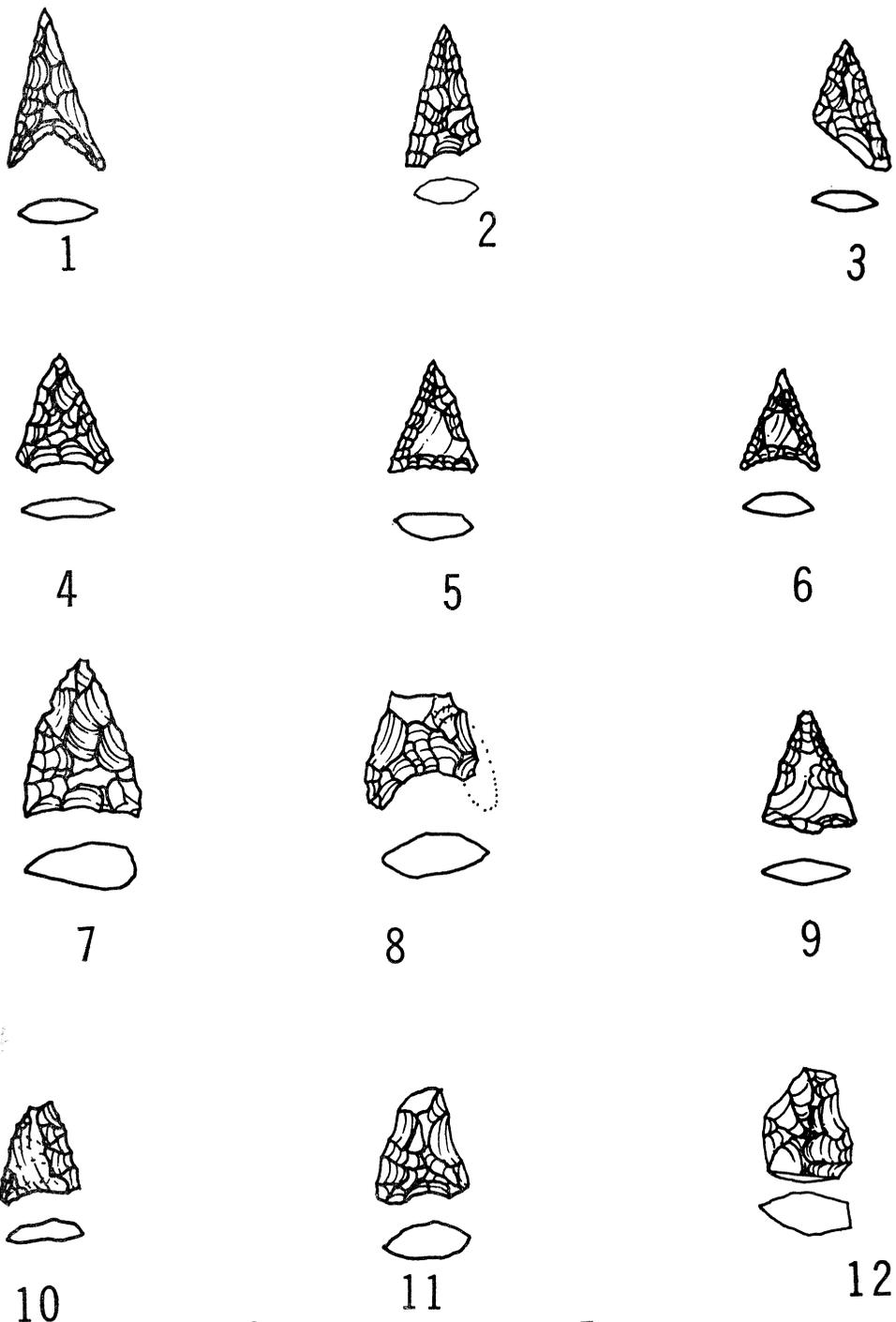
石鏃は縄文文化草創期には、その源が作成され縄文文化発展段階の中で幾回となく、その機能、用途に応じ形態変化を重ねてきたものと考えられる。形態については、古くから研究がなされ , ,  の三重に分類されている<大野雲外・大正四年>、その後赤堀英三氏により、さらに細分化され、有柄鏃、無柄鏃、柳葉鏃といった体系づけを行なっている。

最近では間接ではあるが、個体のもつ形を範型（各人が所属する集団の範型に則って設計し、一定の段取りで形づくられるもの）としてとらえ、集団と集団の関係を把握しようとする動きもある<小林達雄1967>。ここでは、以上のような先学の功績を基礎に、寺門遺跡に於ける石鏃について記してみる。寺門出土の石鏃は総数12本であり、形態より五種に分類される。

第1類 第24図1, 2が該当する。調整剥離が全体に及び二等辺三角形を呈す組のものを第1類とした。1は完形で全長2.3cm、その内脚が0.5cmを計る、巾は1.4cm、最大厚3.5mmを計るスマートなものである。基部の内湾は極端で直線的である。2は両脚を欠損するが、先端は保存がよく、先端部は鋭く、細身である。

第2類 第24図3, 4, 8が該当する。基部の内湾は深い、曲線を描き、巾広なものとした。3は左胴下半、右脚を欠損しているが、基部の挟り込み部分の曲線は明瞭に認められる。先端は鋭利であるが、1類に比べずんぐりしている。剥離は両面に施されている精巧なものである。4は両脚下部を欠損している。胴部最大巾1.3cm、最大厚0.2cmを計る。8は重量感があり、最大巾1.5cm、最大厚6mmを計る。剥離痕はあらい。I類とは細分されるかもしれない。

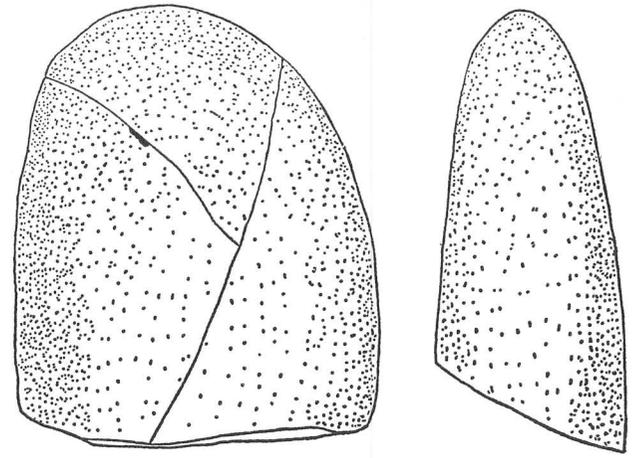
第3類 第24図5, 6, 7が該当する。二等辺三角形を呈し、挟り込みの浅いものとした。5は最大長1.5cm、巾1.2cm、最大厚0.4cmを計る。剥離は縁辺部のみしか施されず、中央で



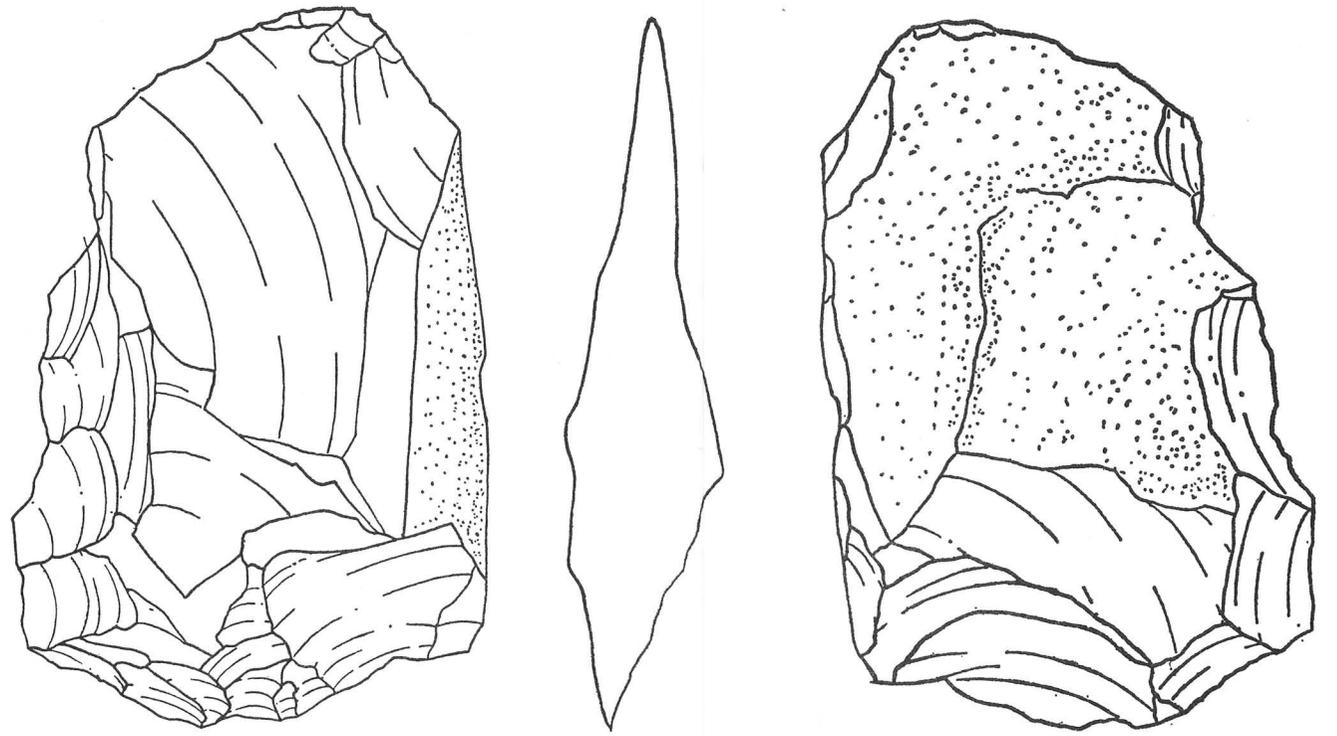
0 5 cm



第24图 石鏃实测图



1



2

第 25 図 寺 門 遺 跡 出 土 石 器

は自然面を残す。6は5同様であるが、やや小形化している。7は長さ2.2cm、巾1.7cm、厚さ0.7cmを計り重量感に富む。剝離は主に先端、右方より打撃が加えられている。基部は抉り込みが浅いが、よく調整されている。

第4類 第24図9が該当する。いわゆる有茎石鏃である。基部は欠損しているが、現存形よりその形態が推定される。剝離は先端部周辺、基部周辺のみしか認められず他は、自然面を残す。現在長1.7cm、巾1.3cm、厚さ3.8mmを計る。

第5類 第24図11、12の細身、厚手のものを本類とした。いずれも破損品であるが、11からはこれが二等辺三角形、有脚石鏃であることが推測される。12は石鏃の一種かと思われるが形態不明である。厚さは5～5.5mmを計る。

以上、寺門遺跡における石鏃について記してみた訳であるが、以下、気がついた点について記してみたい。

これら石鏃はローム直上褐色土層（ローム混入）より出土し、本遺跡唯一の包含層より出土し、土器には縄文中期後半の縄文式土器片が伴っている事などからして、時期はこれによりほぼ推測可能と思われる。

○ 石斧（第25図2）は、打製で玄武岩系の岩質を使用している。長さ18cm、巾11.2cm、厚さ4cmを計る重量感のあるものである。

○ 磨石は、砂岩質の原材を使用している。（No.1）

（菊島美夫）

第四節 寺門遺跡の考察

今回の寺門遺跡の発掘調査に於て、第一に指摘される点は、土器、石器ともに出土遺物が僅少であることが挙げられる。このことはとりもなおさず、この発掘地点が遺跡の中心点を大きくはずれていることを如実に物語る何物でもない。

出土遺物のうち土器をみると、前期、中期、後期の3期にまたがる遺物が確認されたが、いずれも点数が少なく、しかも破片が小さく断片的には型式の確認も出来るが、それ以上の突き進んだ考察には、あまりにも資料が少ないという点から危険が多い。したがって寺門遺跡については資料提示という線を守りたいと思う。

住居址等については、焼土が同一レベルに三カ所にあったことから、慎重に追い続けたが、最終的にそれ等の遺構は存在しなかったという結論が得られた。ただこの焼土三カ所を結んだ三角形の中央に大きな直径40cmあまりの河原石があり、しかもそのすぐ南側に三個体に分割された敲石と思われる石器があり、さらにそのすぐ南側に大型の打製石斧が存在した。これ等と焼土とは明らかに同一生活面である。この生活面は幸いにして攪乱はされていなかったが、表土からこの生活面まで約20~25cmは耕作土であり、全く遺物の層位関係は解らない。また、この生活面が乗っかっている第2層の褐色のローム混入土層は、F4区から南側に深くなり、I4区までの間にこの発掘グリットの中では最も遺物が密集した地域であった。殆んど黒曜石の石鏃、剥片はこの第2層の下部、第3層のローム直上から発見されている。前期、中期に属する土器片もこの第2層から発見されている。土器片の割には石鏃12点、その他黒曜石の剥片の出土量が多いことが特筆される場所である。水晶の剥片3点も認められたが、それ等は第2層直上からいずれも発見されたものである。石鏃については、分類そのものには大した意味を持たないと思われるが、これまで先学が行なって来た慣例で分類したら5型式になった。これがどのような意味を持つものかは今後の数多い資料集成に待つより他にないと思う。

さらに寺門遺跡の発掘調査に於ては、以上の遺物包含層の調査と相まって、山梨県遺跡台帳に記述されている寺門古墳が同地域内にあって、あわせて発掘調査を実施したが、結論として古墳でないことが確認された。

最後に寺門遺跡出土の縄文式土器に若干ふれてみたい。まず前期縄文式土器は、明らかに前期の遺物と考えられる土器は3片のみである。そのうち2片は繊維を多量に含み縄文にみみず状の変化をもたせたうえ、半載竹管によるコンパス文様を施した関山式土器（埼玉県南埼玉郡連田町字関山貝塚出土の土器を標式とする）と、もう一片は繊維の包含は認められないが、貝殻のヘリを施文具として貝殻連続刺突文を特徴とする土器片である。いずれもこの期の遺物を包含する遺跡は、中部高地の一面を占める山梨県には数少ないが、例え少数の資料といえど明確

な資料が得られた点は一つの成果といえる。山本寿々雄氏（1959年，県富士博物館報2）も，この関山式土器等の発見例が県下では断片的であることを指摘しているものである。中期縄文式土器片はここでは量的には多いが，いわゆる県内に於ける中期の縄文遺跡から出土する遺物量から比較すれば雲泥の差がある。たまたまその中で中期後半の加曾利E2式土器のうち挿図第23図拓本19にみられる伊豆諸島，伊豆大島から武蔵野台地，甲信の中部高地に広く分布する，みみず状の粘土紐をはりつけた丸味をおびた土器，拓本20にみられる沈線に指の腹で，ゆるやかに，あたかも削り消すかの如く蛇行線を描いた土器，それに拓本23でみられる連続八の字状の沈線文を持つ土器が，この寺門遺跡では伴出している点を明記しておきたいと思う。

（谷口一夫）

第五章 ま と め

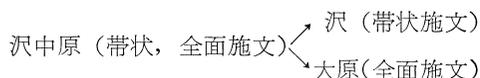
第一節 問題点と今後の課題

沢中原、寺門両遺跡を通じ各章で個々に記述して来た問題点について最後にまとめをしたい。

まず沢中原遺跡にあつては、良好な押型文土器の資料が得られた。これは後述するが山梨県下では初めての押型文土器発掘資料とし、今後の研究に大きな示唆を与えるであろう。

押型文に施される文様には带状施文、全面施文があるが、これ等の手法はやはり胎土を固める為のものではなく、一種の装飾的なものであると考えられる。沢中原出土の資料では带状施文、全面施文が併用された形で認められている。また押型文文様は、山形文のみで、これは押型文発展過程中最も古い集団に位置するし、同時に带状施文から全面施文への移行と考えられて来た時間差はこの沢中原では認められないものとなった。

山形文十格子目文で施文される群、つまり沢、大原等に代表される山形文のみの群に次ぐ古い様相をもつ群は、その文様構成が带状施文のみのもの<沢>、全面施文のみのもの<大原>の二大別にされるが、この点については、沢、大原以前のこの沢中原遺跡に於て带状施文、全面施文の併用が行なわれて来ているところから、



といった押型文初期の発展過程が一つの仮説として成立しよう。

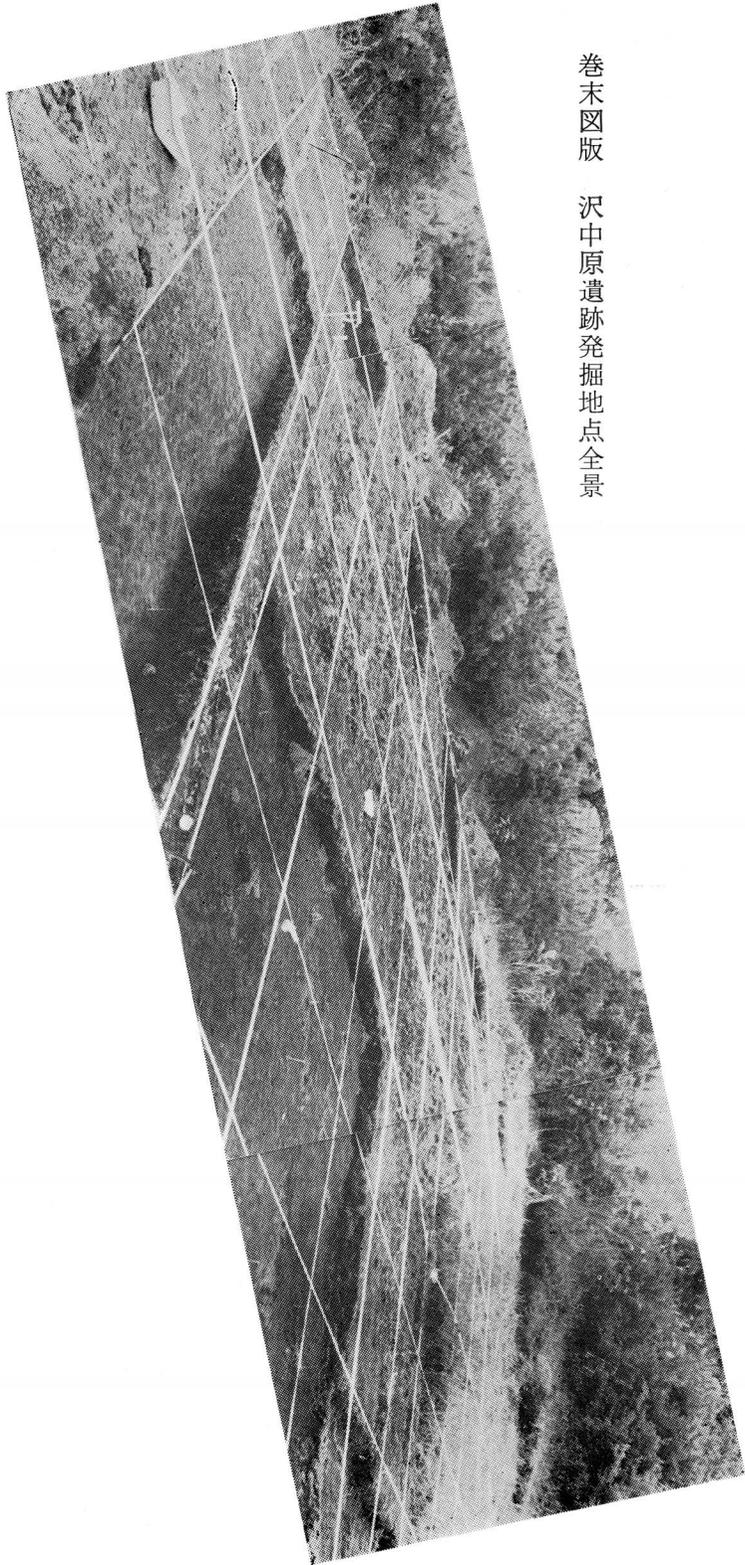
なお、山梨県では初めての押型文発掘資料となったが、これまで押型文の発見が確認されている遺跡には南都留郡明見向原、都留市大幡、南都留郡秋山村、東八代郡中道町向山、東山梨郡大和村、南都留郡河口湖町鶴ノ島等があるが、沢中原の仮説を立証するにしても、多くの未知の面もあり今後の調査に期待してやまない。

沢中原2類以下の土器については、寺門遺跡の土器と同様、資料の提示に留まったが、やはりこうした資料の集成によって山梨県下に展開した縄文文化解明への一助にしたいと願うものである。

寺門遺跡については、遺跡の中心点をはずれているが為に少量の遺物に留まったが、しかしそれなりにも一つの成果は得られたと思う。(谷口一夫)

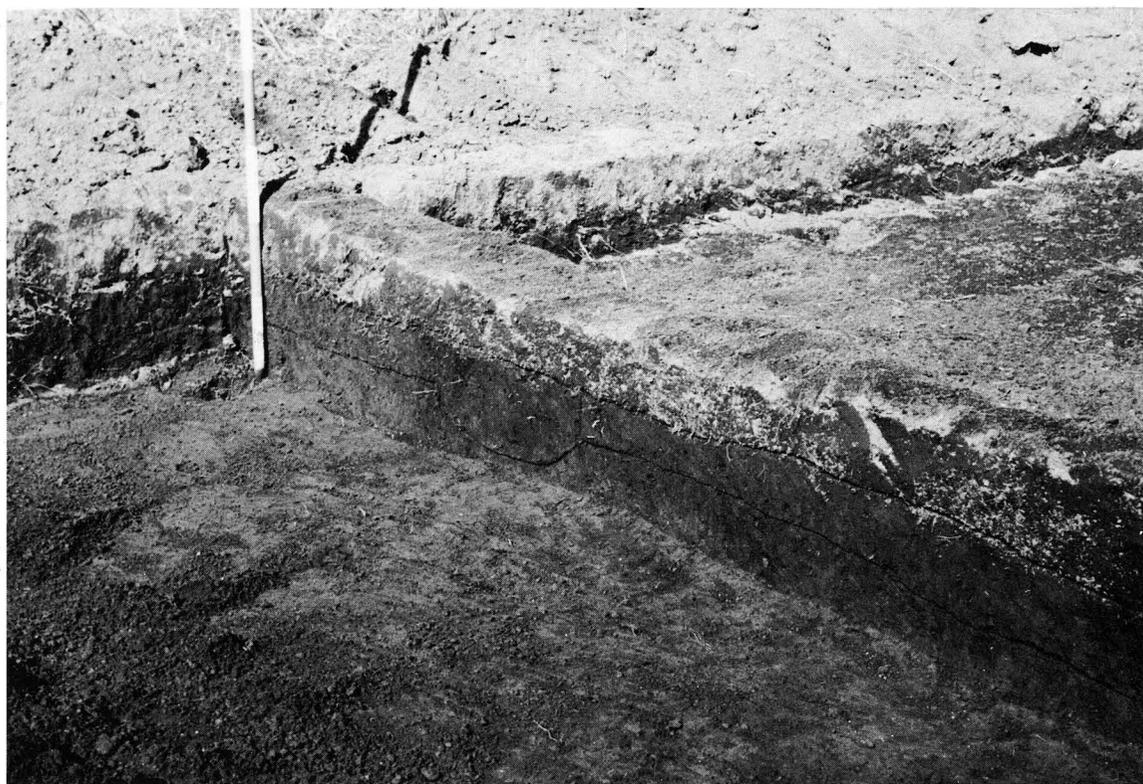
版 图

卷末図版 沢中原遺跡発掘地点全景

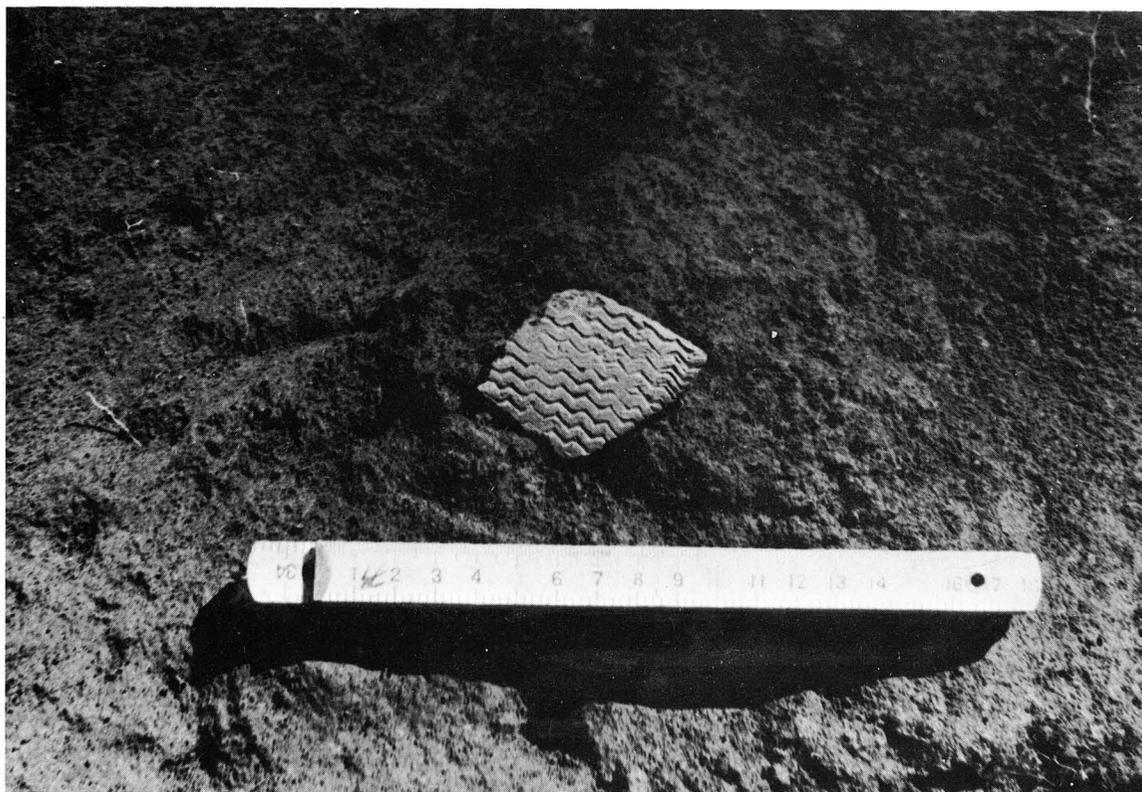




1. 南北トレンチ断面図



2. 沢中原遺跡E 5～8区断面図



1. 押型文土器出土状況



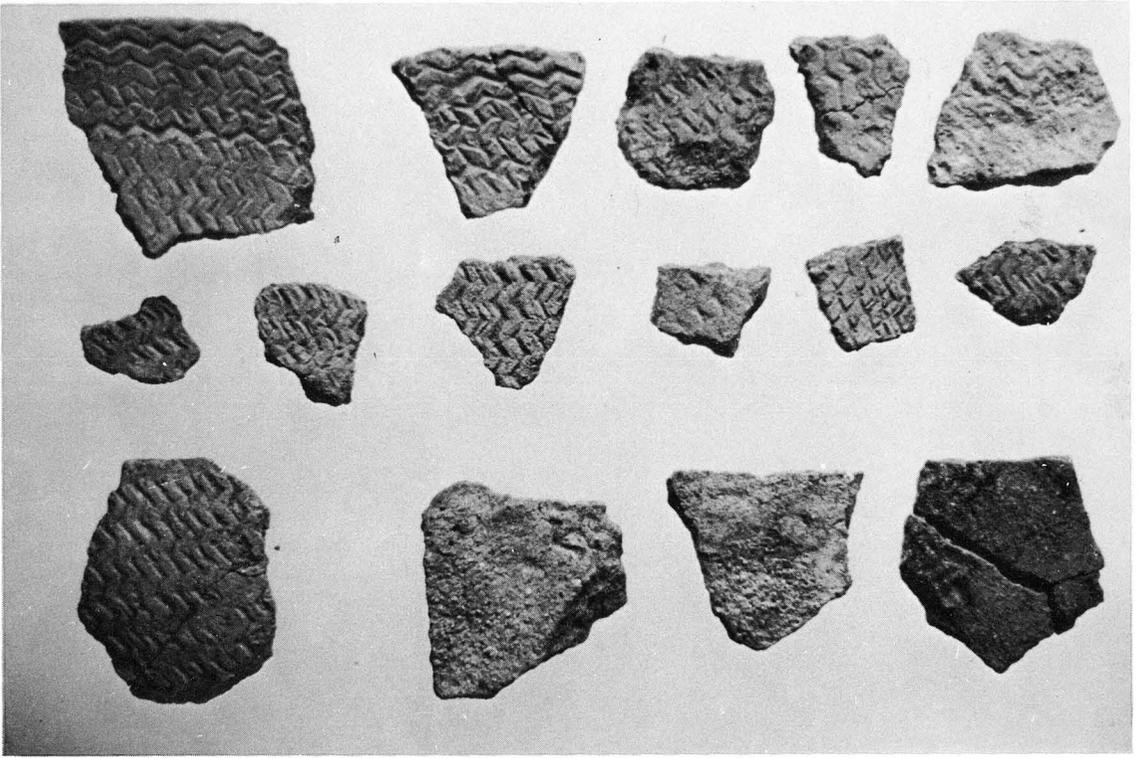
2. 押型文土器出土状況



1 押型文土器出土状況



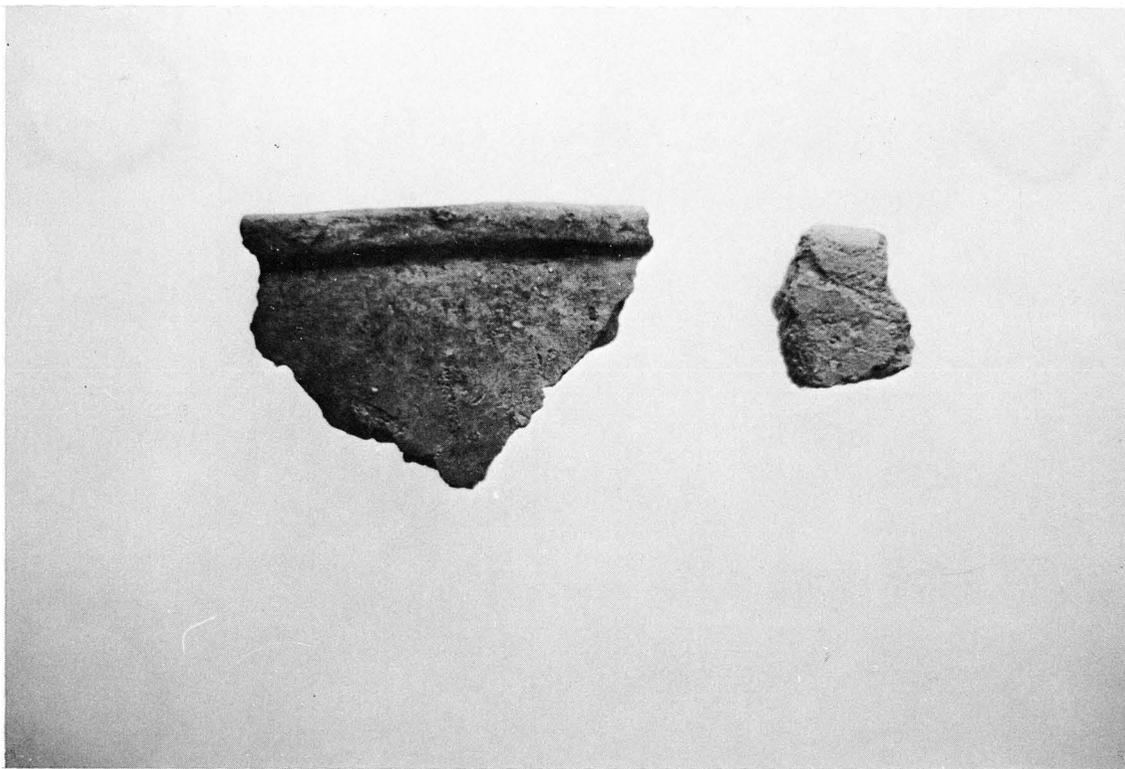
2 花輪台Ⅱ式土器出土状況



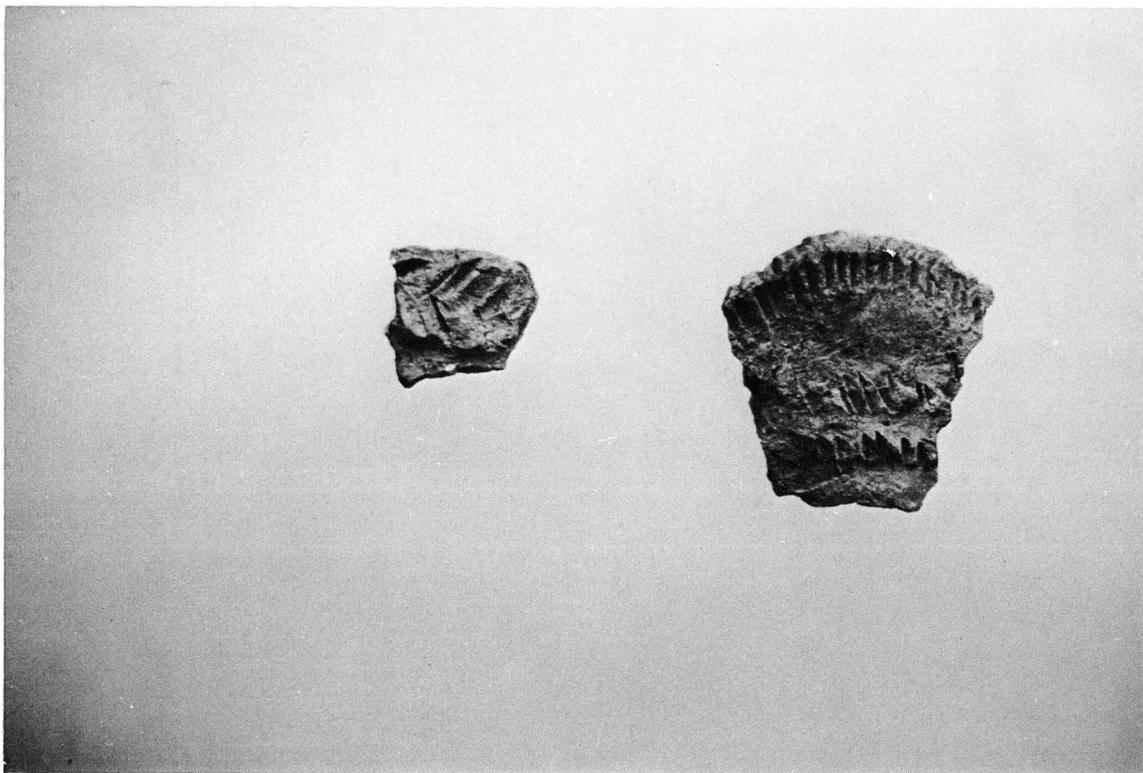
1. 押型文土器・外面



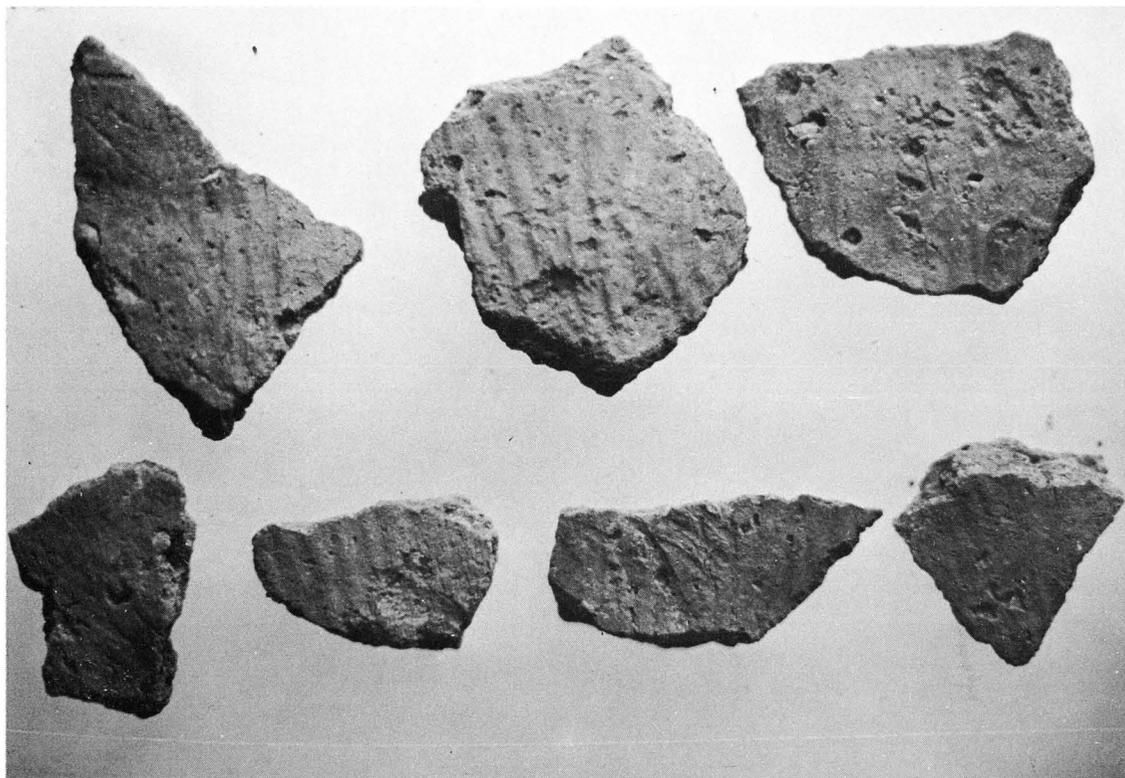
2 押型文土器・内面



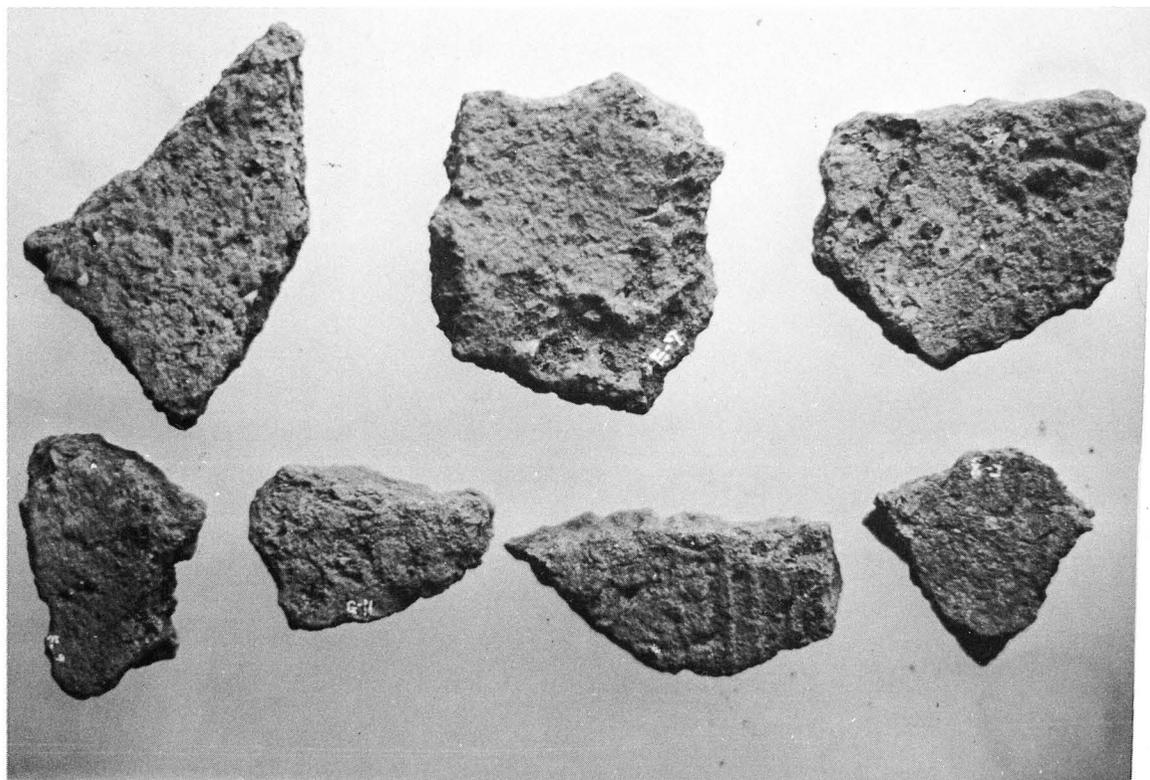
1. 花輪台Ⅱ式土器



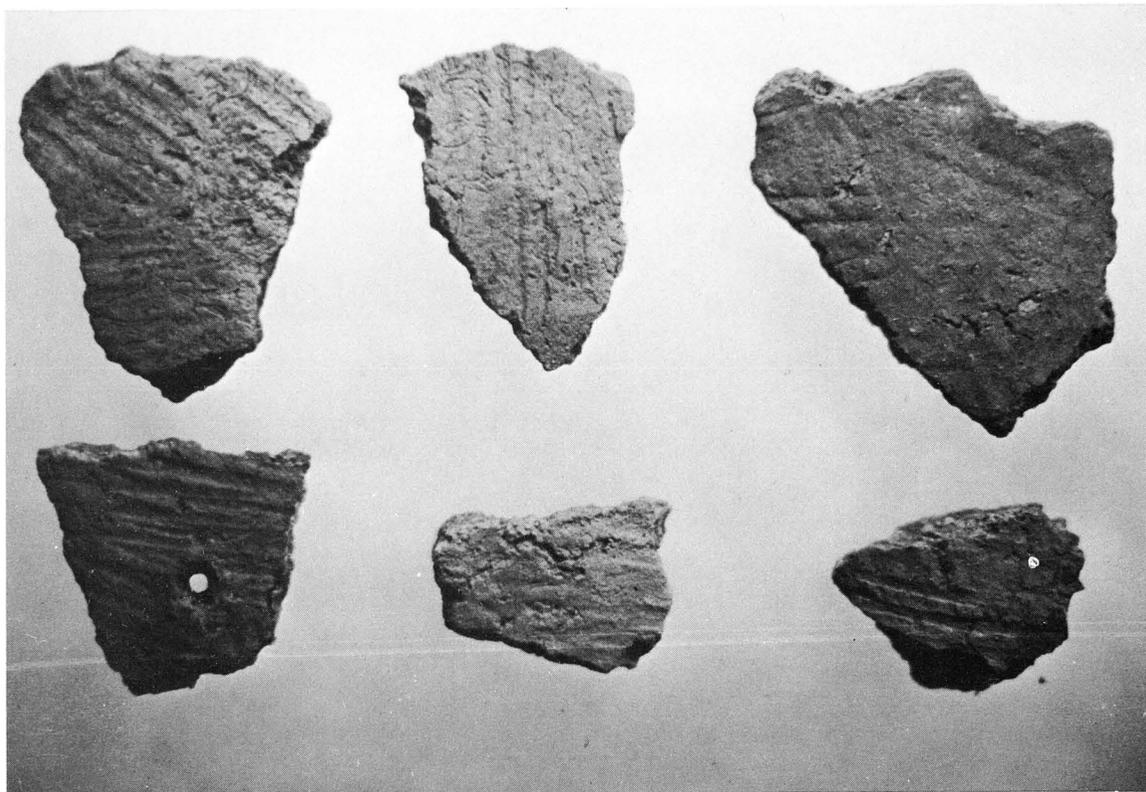
2. 粕畑式土器



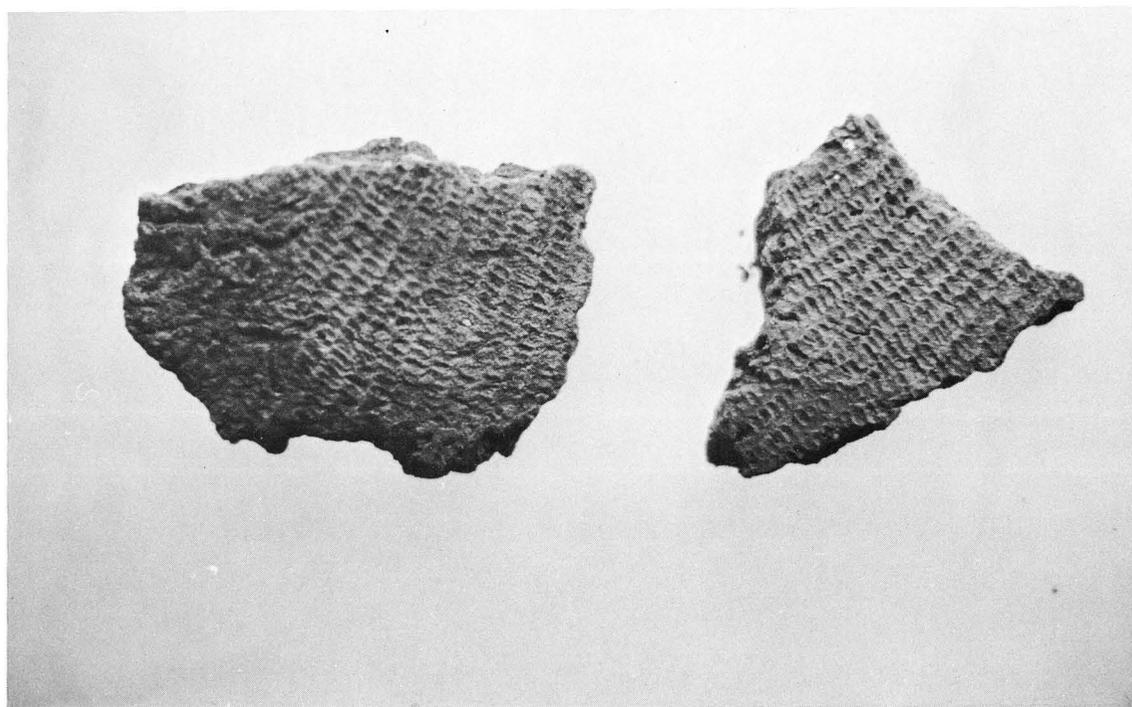
1. 子母口式土器・外面



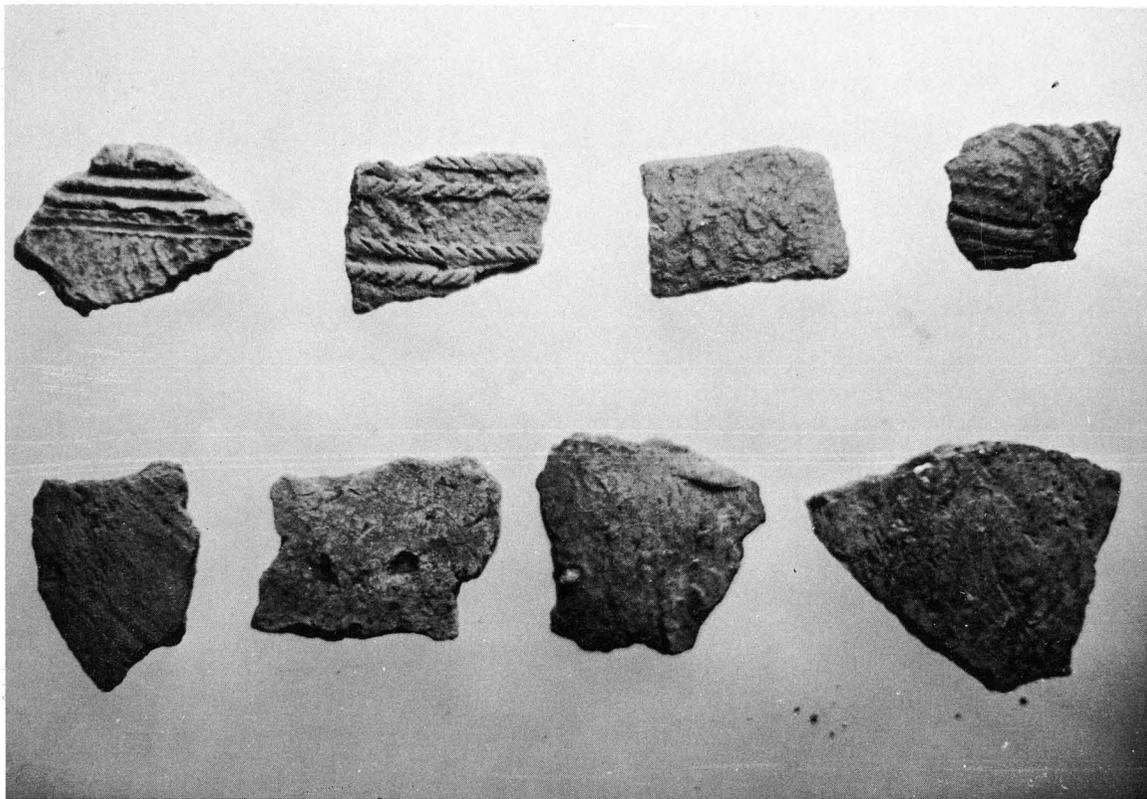
2. 子母口式土器・内面



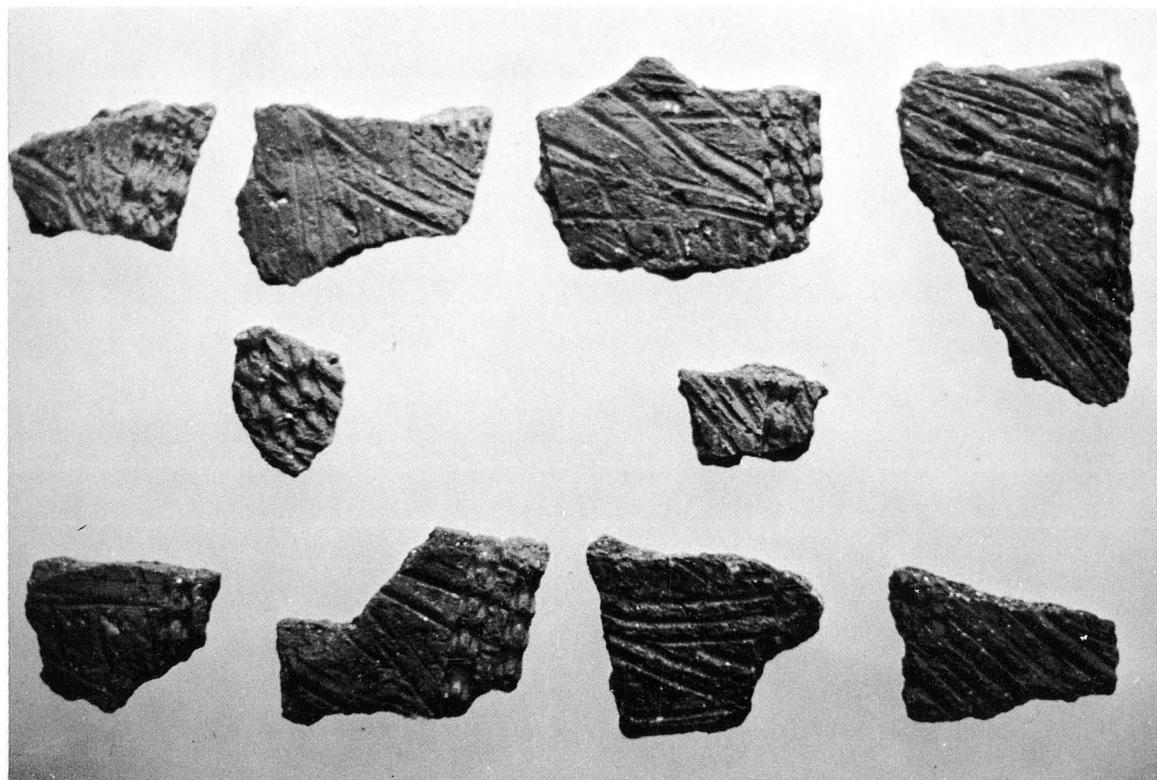
1. 子母口式土器



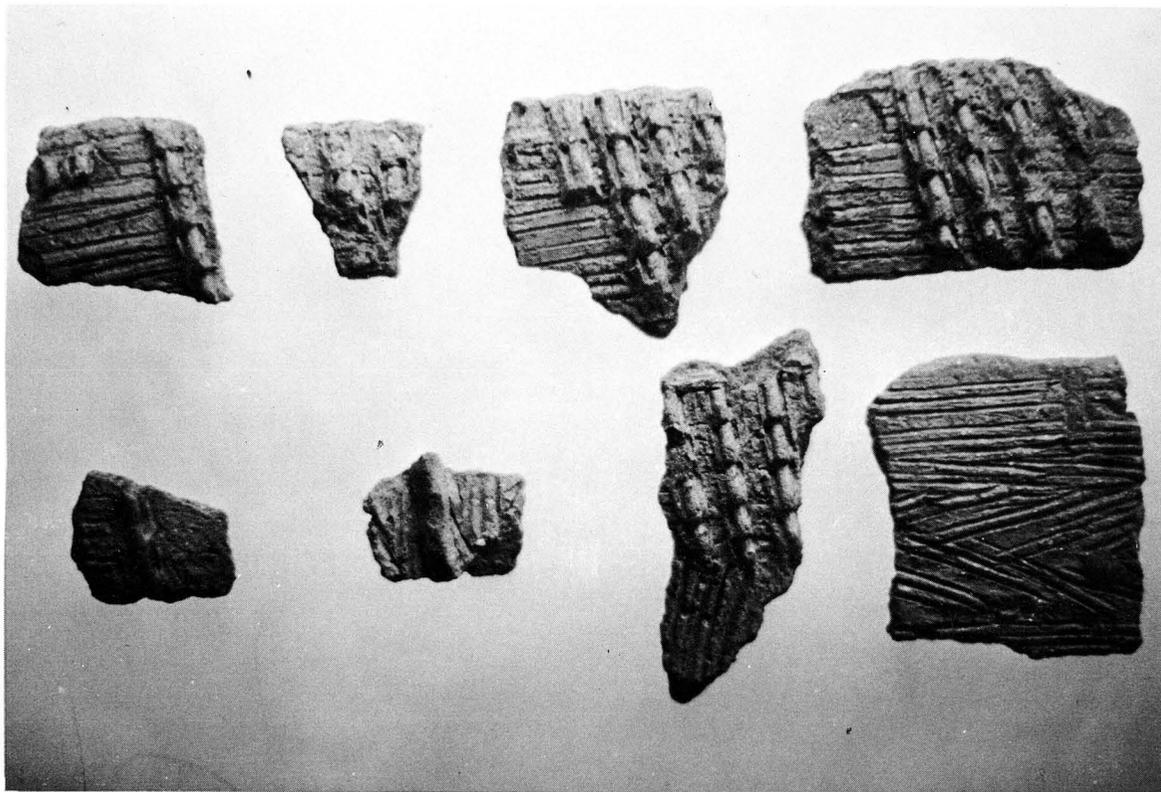
2. 黒浜式土器



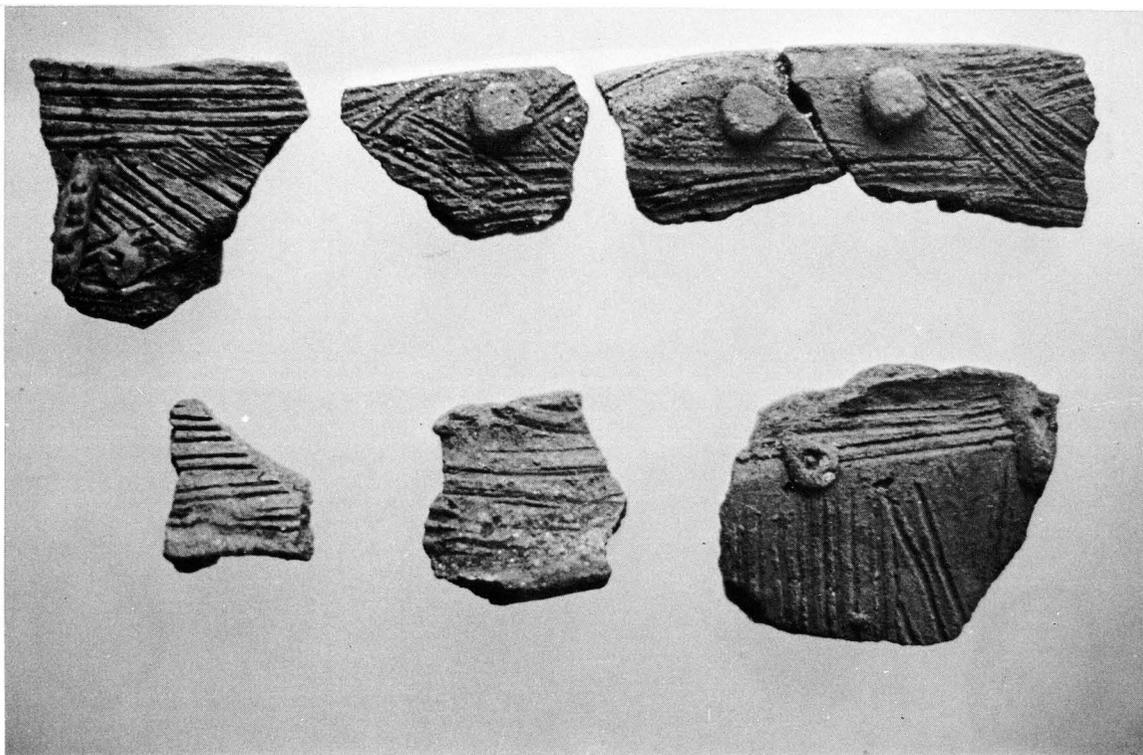
1. 諸磯・B式土器(上段), 擦痕文土器(下段)



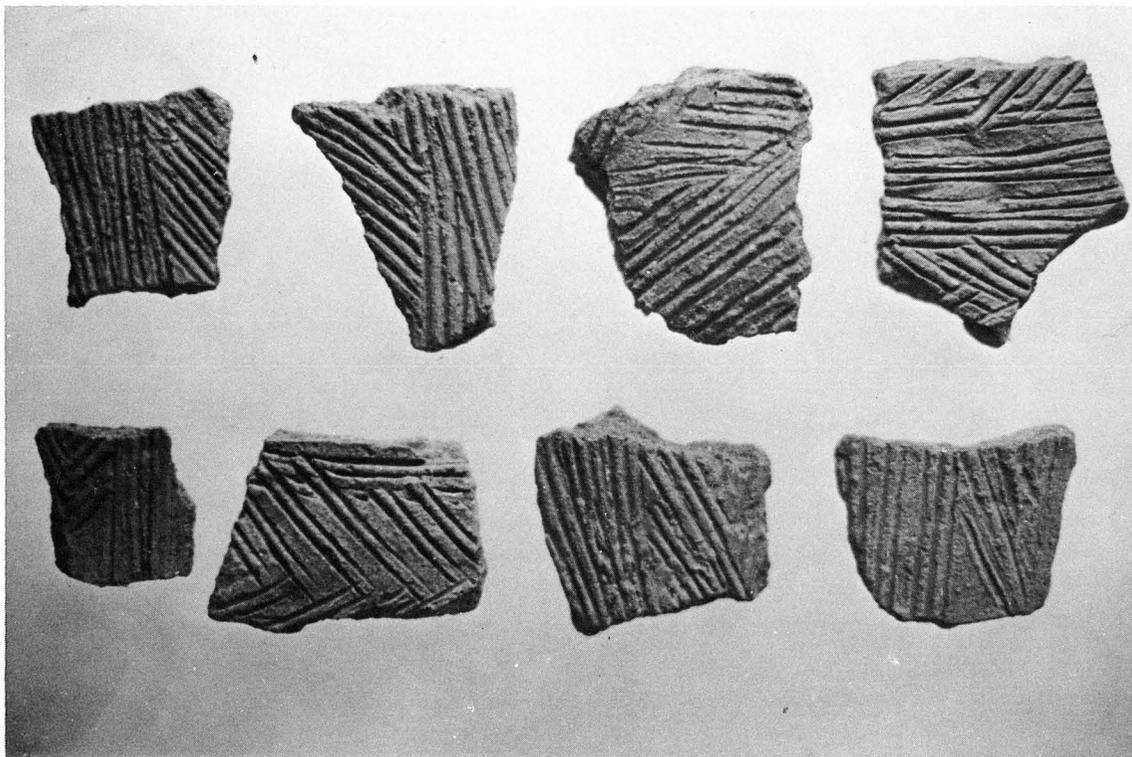
2. 諸磯C式土器



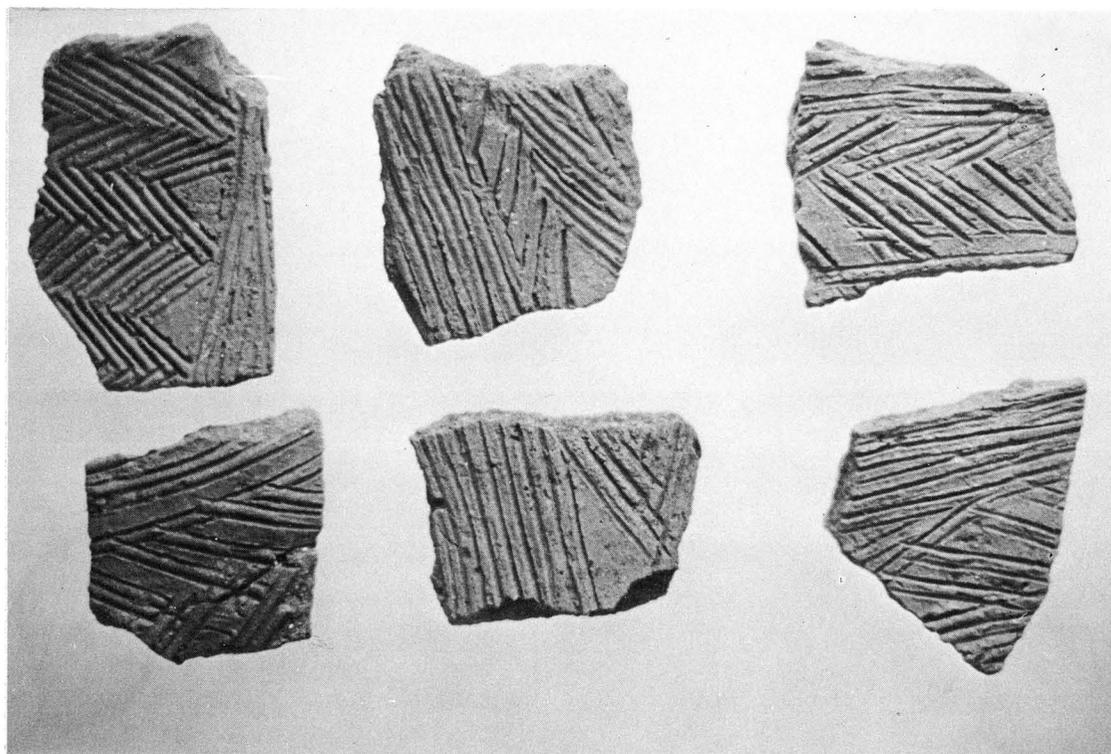
1. 諸磯C式土器・粘土紐付文



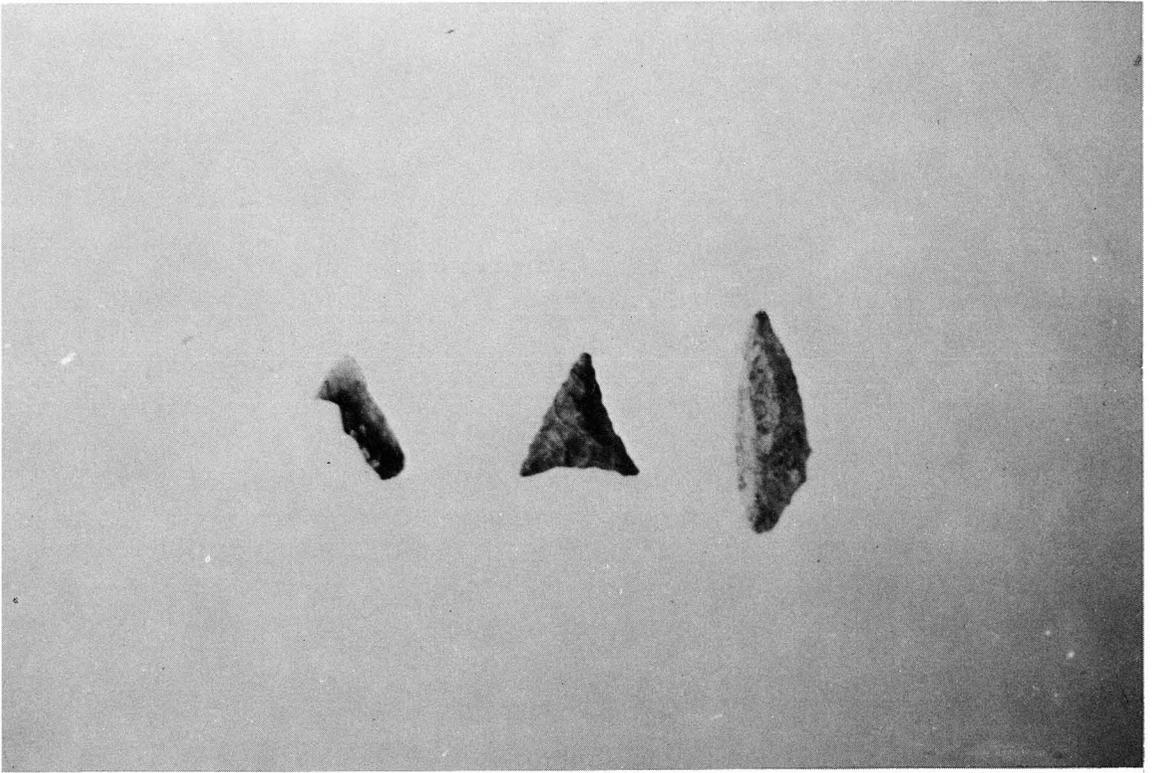
2. 諸磯C式土器・ボタン状突起文



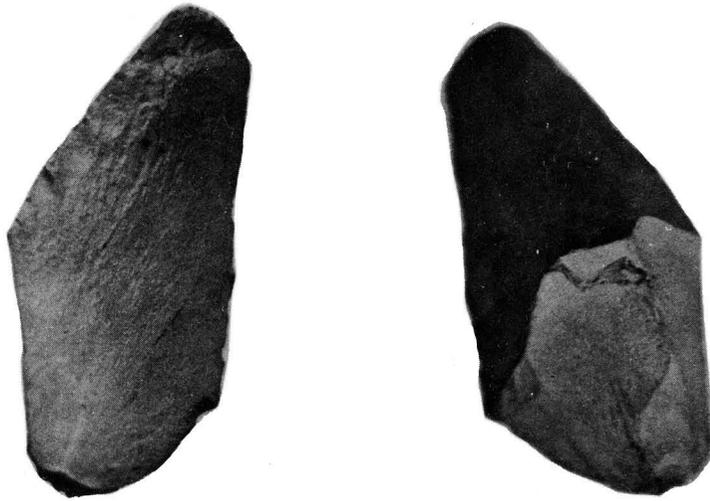
1. 諸磯C式土器



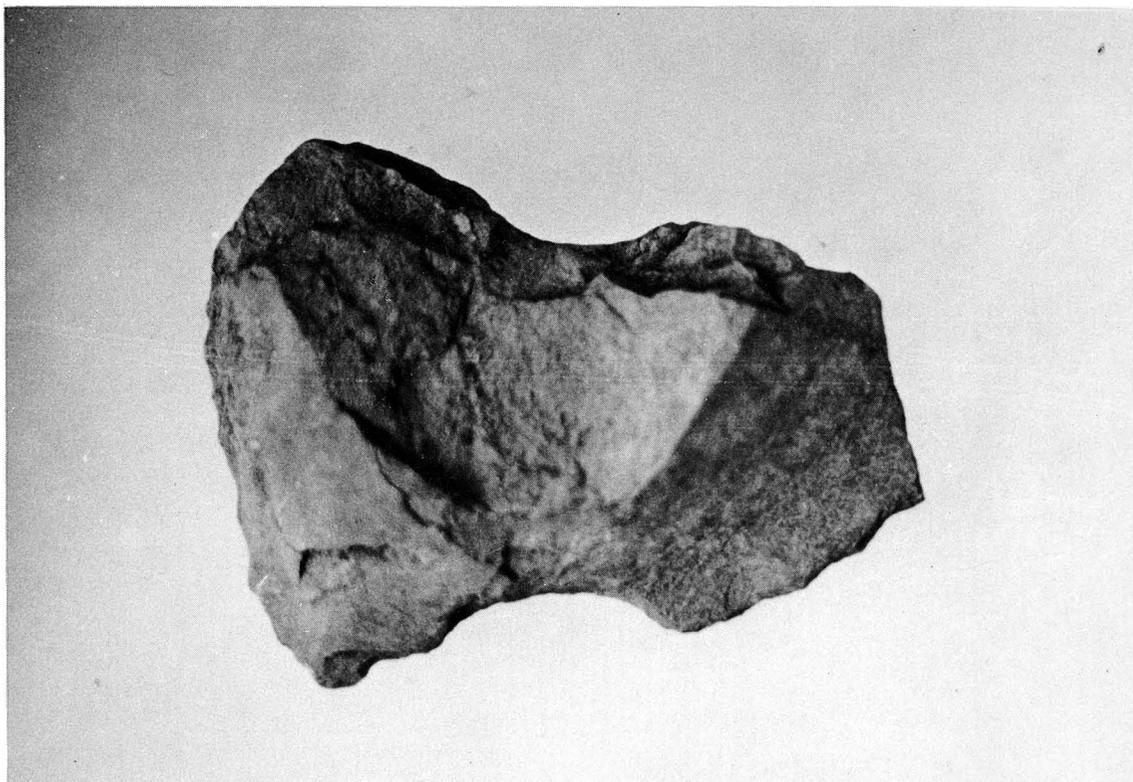
2. 諸磯C式土器



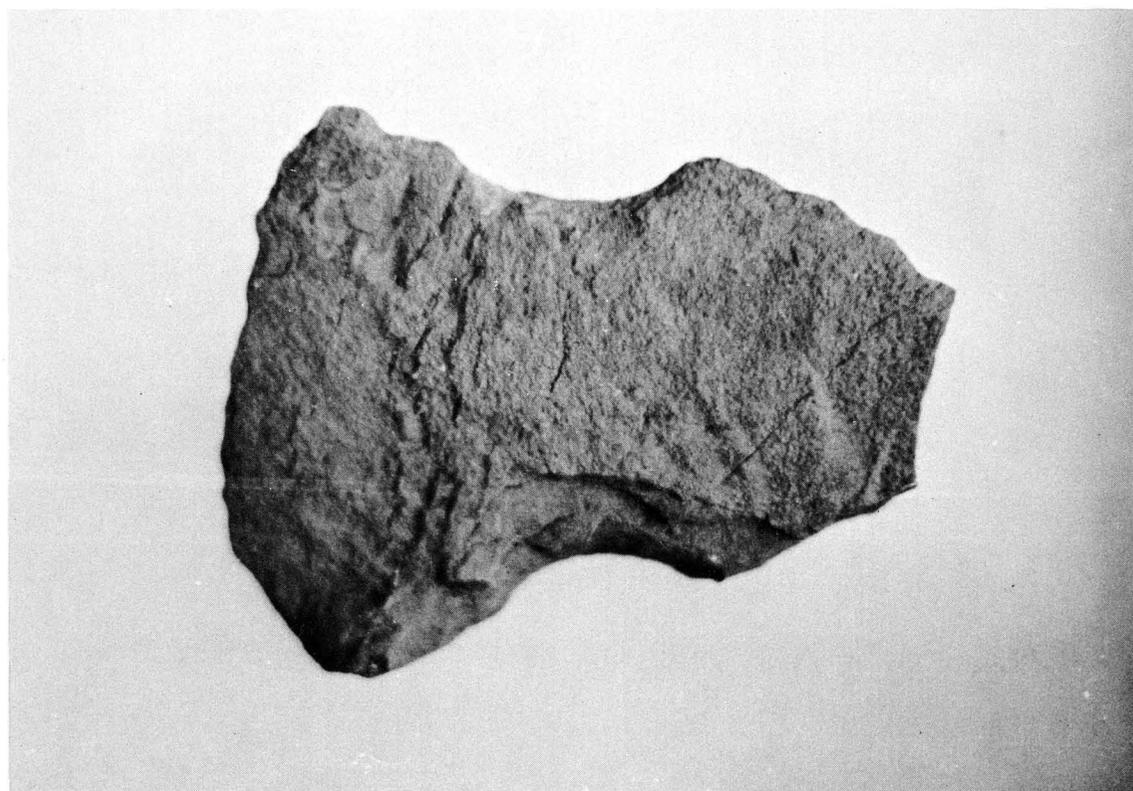
1. 石鏃



2. 石刃様石器



1. 分銅形石斧・表面



2. 分銅形石斧・裏面



1. グリット設定及び発掘状況



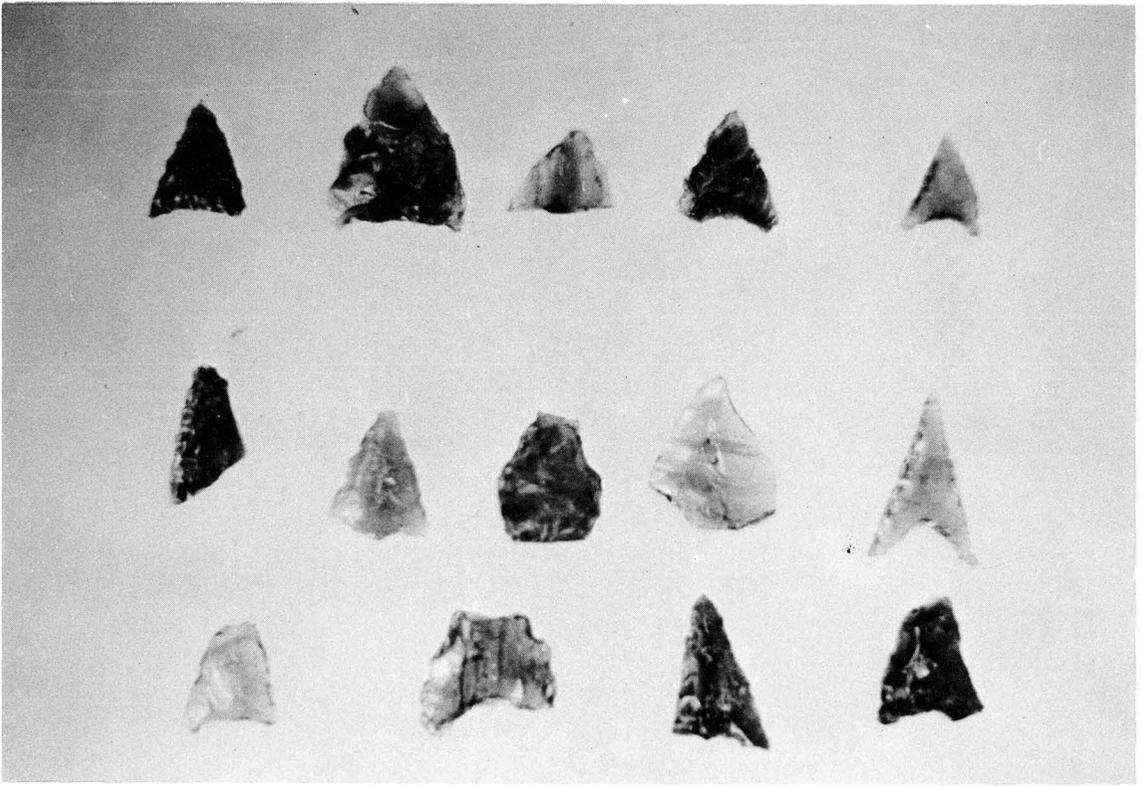
2. 擬似・寺門古墳



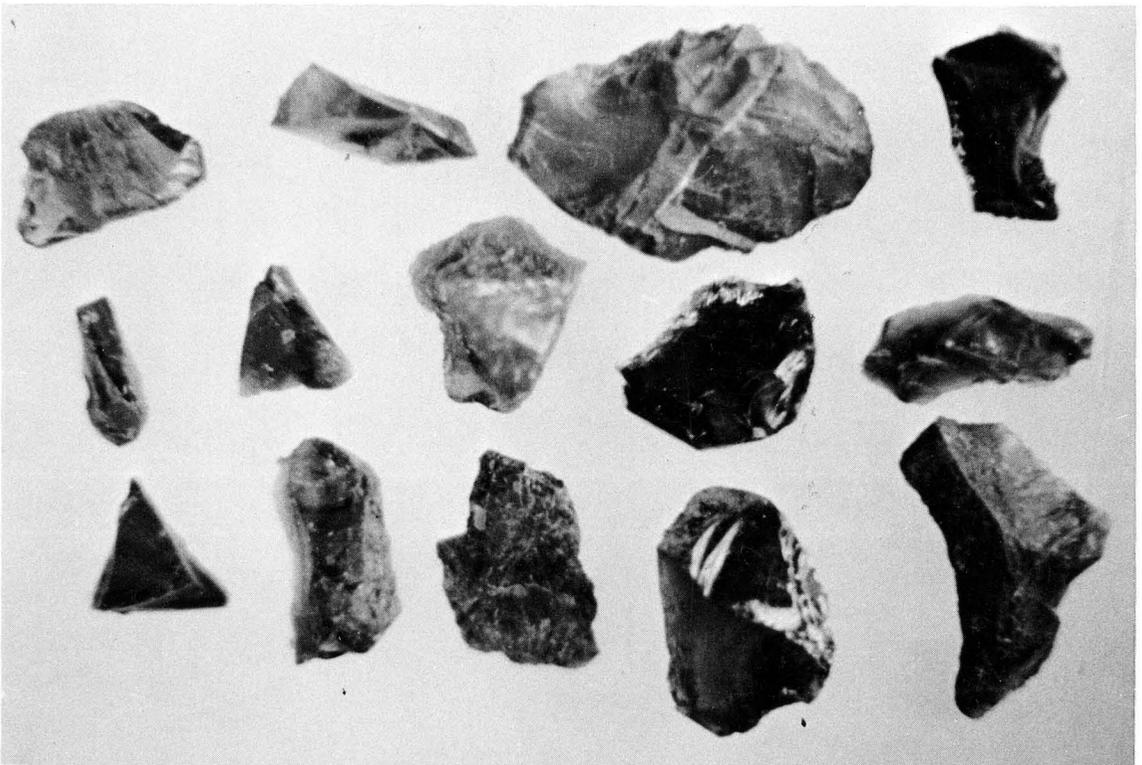
1. 土器・石鏃出土状況



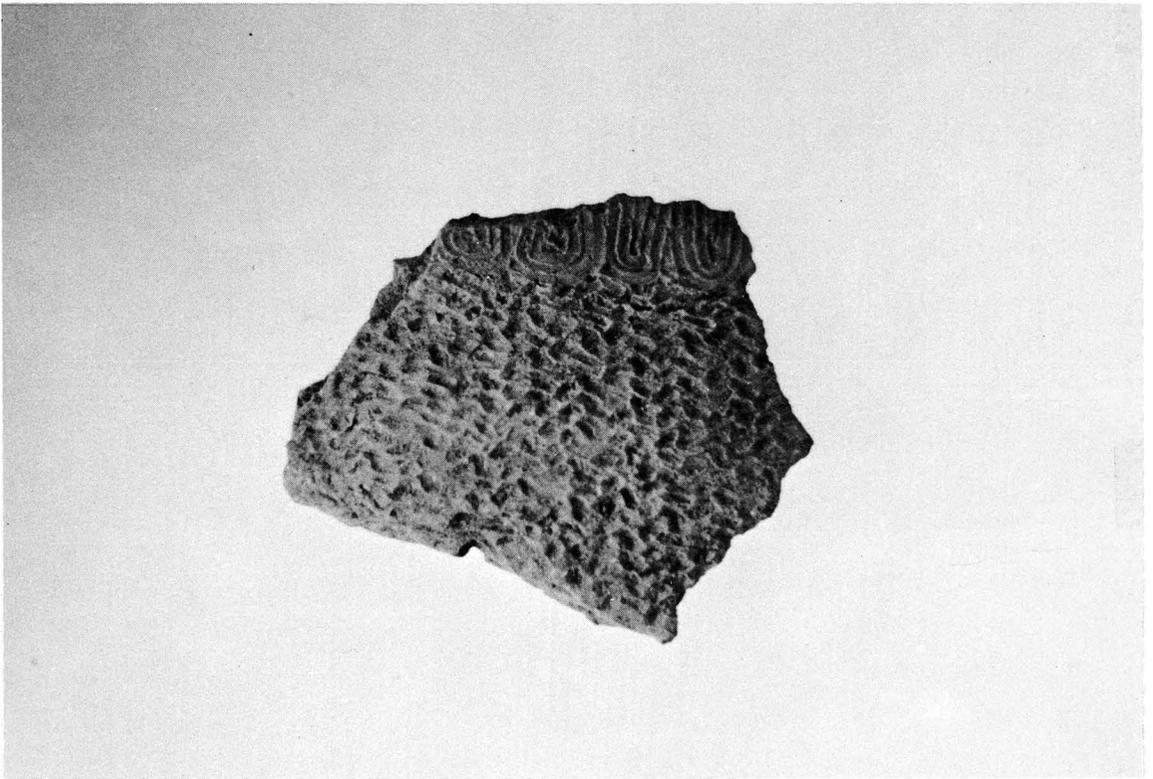
2. 石斧他出土状況



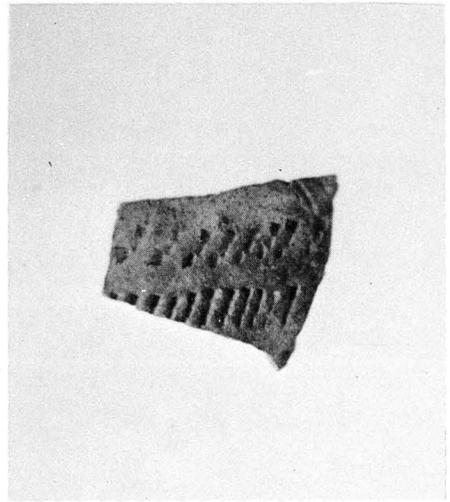
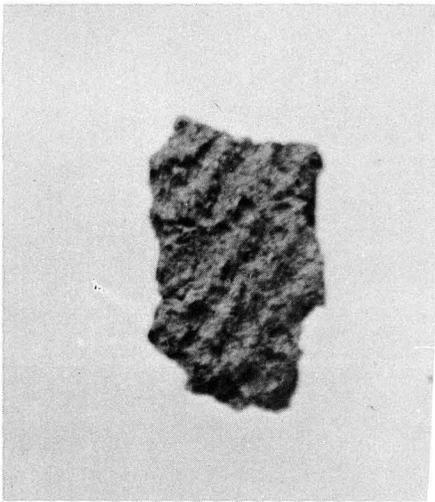
1. 石鏃

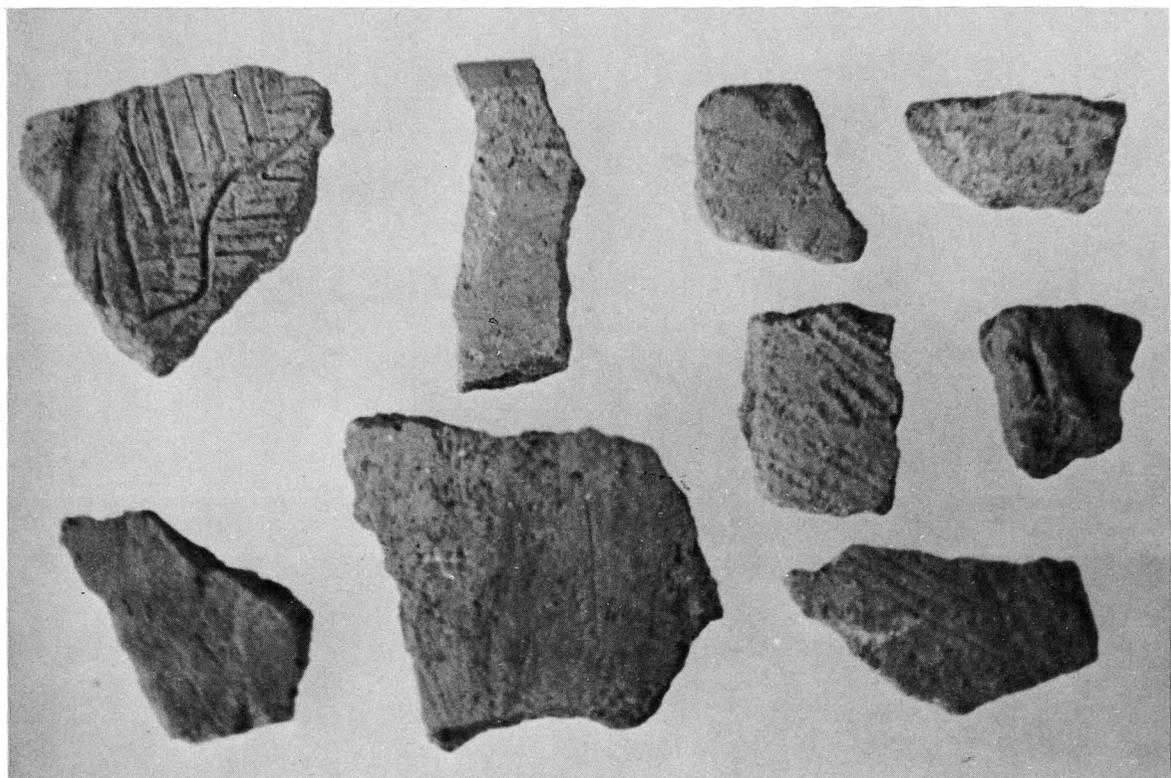
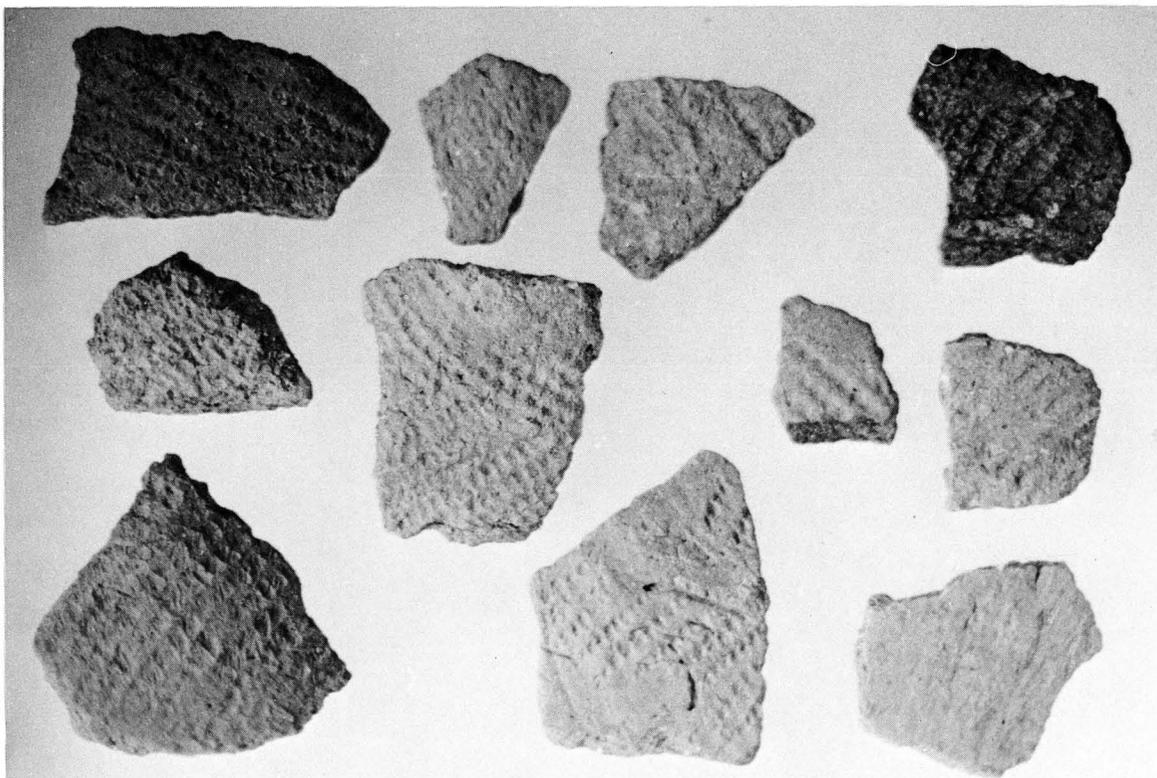


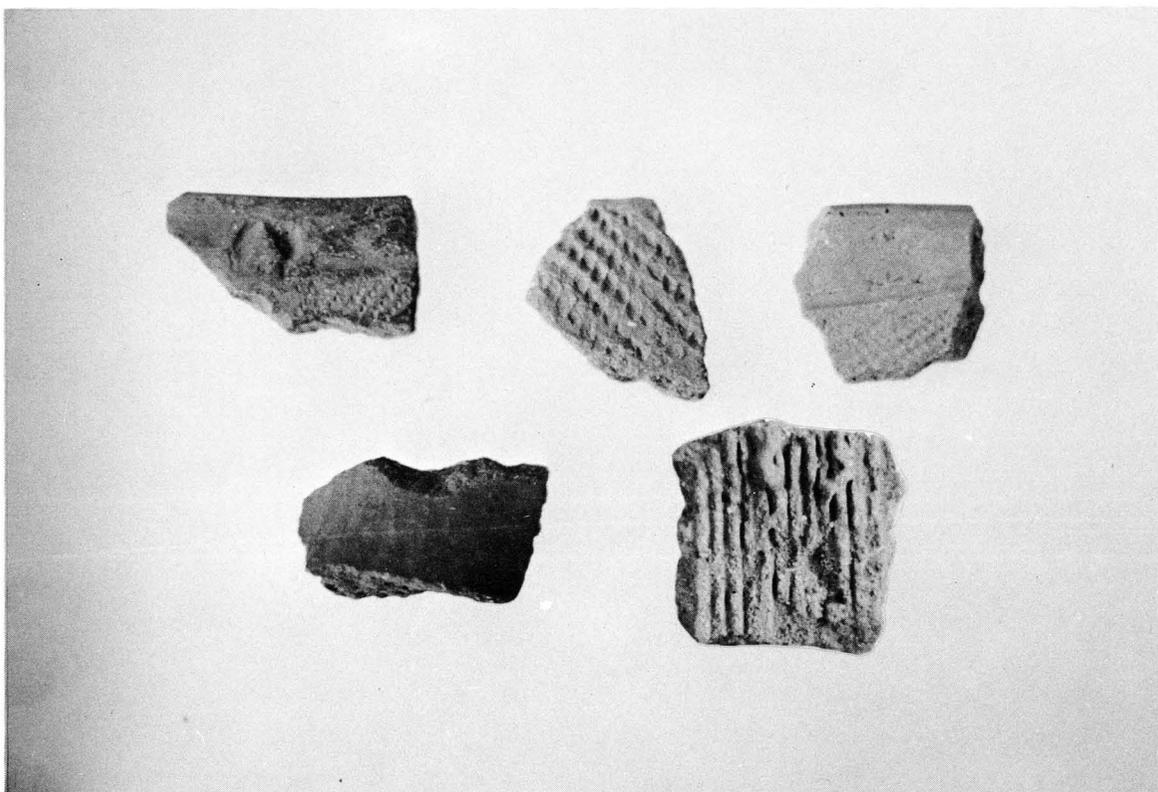
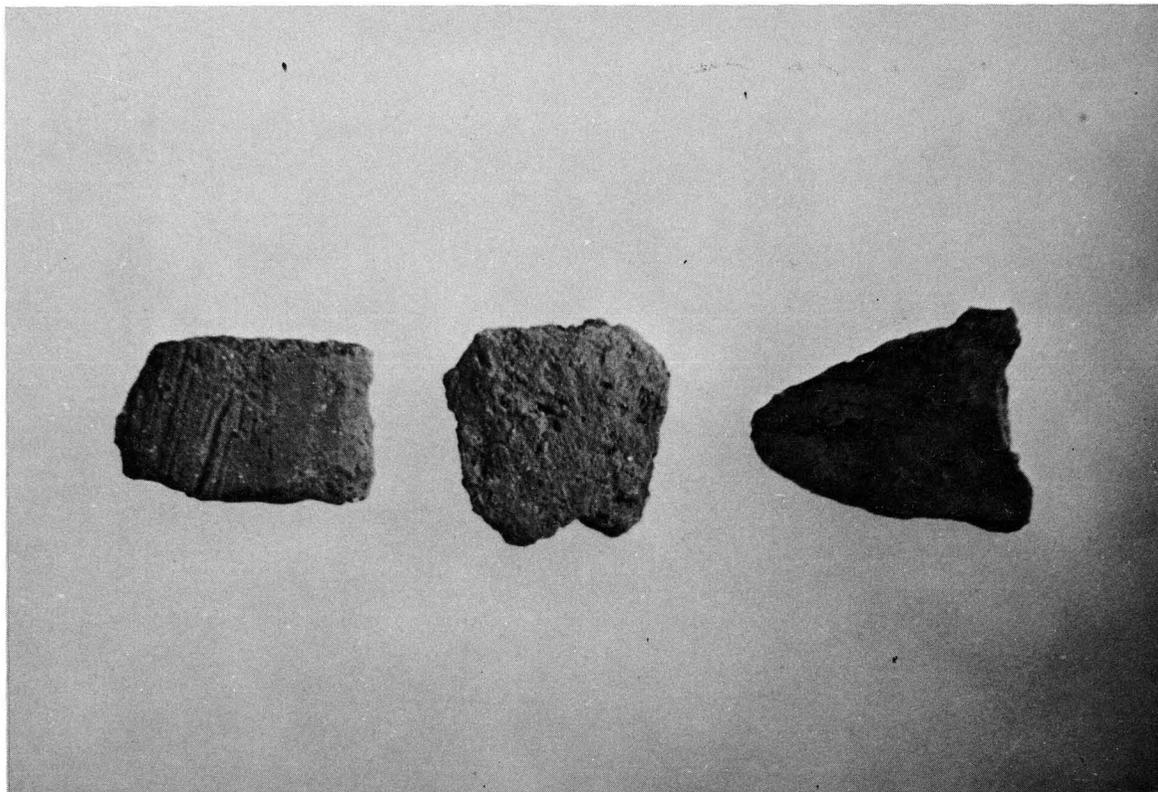
2. 剝片等



1. 関山式土器







中央高速自動車道西の宮線建設に伴なう

昭和46年度発掘調査報告書

沢中原遺跡・寺門遺跡

昭和47年3月31日

発行 山梨県教育委員会

編集 山梨県遺跡調査団

甲府市丸の内一丁目6番1号

印刷 温故堂印刷株式会社

甲府市相生一丁目7番16号

